
へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

悠久剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

【Nコード】

N9141X

【作者名】

悠久剣士

【あらすじ】

幼馴染のフェルミは「私と契約してください」と、剣士アルの『鎧』として冒険に旅立つことを望んでいた。異世界『ウェディング』では、未婚の女性たちが、契約者と呼ばれる刻印を持つ者の武器や鎧となって、モンスターと戦っている。騎士の血統を継ぐフェルミは、剣士アルに勿体ない凄い『鎧』だった。軽防具での戦闘を得意とする剣士アルは、幼馴染の願いを聞きいれて契約を交してしまっ

た…。

物語の舞台となる『ウェディング』では、男が契約者となり、女の

子たちが武器や防具になって、モンスターと戦います。当然、回を重ねる毎に主人公の装備は、充実してくるのでハーレム展開が予想されます。主人公はチートではありませんが、装備される女の子たちがチート級の凄さ(可愛さ)で補ってくれると思います。基本的に、装備その他の【描写がエロい】と思いますのでR15指定とさせていただきます。

第一部 設定資料（前書き）

【注意】第二部以降の設定は、各部設定資料をご確認ください。

第一部 設定資料

最新話更新時に変更点があれば、設定資料も更新されます。

契約者（登場順）

【名前】アルフレッド・S W・ライダー

【刻印】右手の甲『S W』：剣士

【スキル（はシャーロットテ装備時のみ発動可）】

「風」剣技ハヤブサ

「風」剣技ジャックナイフ

「」剣技インクリースナイフ（増えるナイフ）

「」剣技リターンズオータア（仏壇返し）

【契約の防具】

兜：「作られた装備」ピーピングトム「聞き耳」

鎧：フェルミ・A r・オシリス「魔法耐性／全属性攻撃耐性／毒・

麻痺無効／【N E W】女神の時間」

脚：ミアン・L a g・コーデアル【昼】「忍び足／逃げ足」【夜】

「超神速／飛行脚／水上脚／背面脚／悪魔の嘆き／悪魔の怒り／悪

魔の誇り」

盾：

籠手：

アクセサリー：

【武器：剣】

「剣」轟くC W W

「剣」疾風シルフィーネ零式「不可視」

「剣」シャーロットテ・S W・ライダー「魔法吸収／体力吸収／魅惑

／幻獣召喚／即死効果」

【名前】 エラハイ・Arc・ヒットマン

【刻印】 右手の甲『Arc』：弓使い

【スキル】

「風」 剣技ハヤブサ

「風」 体技トルネードウォール

「水」 弓技シャツフル

「水」 弓技レインマスター

「水」 弓技レインボーマスター

【契約の防具】

兜：

鎧：

脚：ナルル・Lag・ヒットマン「神速」

盾：

籠手：エイミー・Bra・バラモン「吸血」

アクセサリィ：

【武器：剣/弓】

「弓」 ユング・Arc・ノイエガ「男嫌い」

【名前】 カイン・He・フォンダ

【刻印】 右手の甲『He』：英雄

【スキル】

「火」 体技ファイヤ

「風」 剣技ハヤブサ

「風」 剣技ジャックナイフ

「水」 体技ウオータ

「土」 体技ニードルタツクル

【契約の防具】

兜：

鎧：モーリ・Ar・バレキオス「開発中」

脚：

盾：マーシャ・Shi・ガンティ「耐忍ぶ」
籠手：

アクセサリー：

【武器】 剣／大剣／斧／槍／弓】

「剣」無名の刀

「剣」リリイ・S W・ブランドン「毒／魅惑」

【名前】 ビンセント・War・フオーク

【刻印】 右手の甲『War』：戦士

【スキル】

「？」不明

【契約の防具】

兜：契約の装備「不明」

鎧：契約の装備「不明」

脚：契約の装備「不明」

盾：契約の装備「不明」

籠手：契約の装備「不明」

アクセサリー：

【武器】 剣／大剣／斧】

「大剣」契約の装備「不明」

契約の装備（契約者順）

【名前】 フェルミ・Ar・オシリス

【契約】 アルフレッド・S W・ライダー

【血統】 父：騎士／母：槍

【刻印】 胸の谷間：鎧

【特徴】 純白の鎧／金髪／碧眼／頑固／安産タイプ

【名前】 シャーロット・S W・ライダー

【契約】 アルフレッド・S W・ライダー

【血統】 父：魔法使い/母：剣

【刻印】 右脇の下：魔法剣

【特徴】 薄紅色に輝く魔法剣/剣技トップランカー/清純/強がり

【名前】 ミアン・L a g・コーデアル

【契約】 アルフレッド・S W・ライダー

【血統】 父：魔王/母：不明

【刻印】 左足の甲：脚

【特徴】 艶やかな漆黒/昼夜二つの顔を持つ/ピンサカ嬢/性に対してオーブン/とうかエロい/手技が上手いらしい/大剣豪の未亡人/猫娘/魔王の娘

【名前】 ナルル・L a g・ヒットマン

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：剣士/母：剣

【刻印】 左足の甲：脚

【特徴】 灰色のレギンス/慎み深い/良妻賢母

【名前】 エイミー・B r a・バラモン

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：魔法使い/母：籠手

【刻印】 両腕：籠手

【特徴】 青白く輝く籠手/エロい/お姉さんタイプ

【名前】 ユング・A r c・ノイエガ

【契約】 エラハイ・A r c・ヒットマン

【血統】 父：不明/母：不明

【刻印】 うなじ：弓

【特徴】 深緑の弓/童顔/男性恐怖症

【名前】 モーリ・Ar・バレキオス
【契約】 カイン・He・フォンダ
【血統】 父：旅人/母：弓
【刻印】 胸の谷間：鎧
【特徴】 真紅の鎧/コギヤル/女王様タイプ

【名前】 マーシャ・Shi・ガンティ
【契約】 カイン・He・フォンダ
【血統】 父：戦士/母：盾
【刻印】 左鎖骨：盾
【特徴】 ピンクの盾/変質者/M嬢

【名前】 リリイ・Sw・ブランダン
【契約】 カイン・He・フォンダ
【血統】 父：剣士/母：剣
【刻印】 右掌：剣
【特徴】 藍色の剣/元盗品/礼儀正しい/カインより年上

【名前】 ミリアム・Sw・ハイム
【契約】 未契約
【血統】 父：剣士/母：盾
【刻印】 右掌：剣
【特徴】 ???? 剣/級長/世話焼き/メガネ

登場したモンスター（強さ順）

【森】 リーフ・オーク
【森】 アーチャ・オーク
【森】 アーチャ・ゴブリン

【草】グラスマン

【草】プリースト・グラスマン

【草】マスター・グラスマン

【人】盗賊

【人】山賊

【魔】魔人メエリド

【魔】魔王（?）

盗賊・山族・海賊などは、モンスターと同じ扱い（殺しても可）。

契約者の刻印 契約の装備装着可

【剣士】 右手の甲『S W』 【武器：剣】

【戦士】 右手の甲『W a r』 【武器：剣／大剣／斧】

【英雄】 右手の甲『H e』 【武器：剣／大剣／斧／槍／弓】

【弓使い】 右手の甲『A r c』 【武器：剣／弓】

職人及の刻印 契約の装備装着不可

【旅人】 左手の甲『T r』 【逃げ足】

【鍛冶屋】 左手の甲『B l a』 【装備への特殊効果付加】

【調理師】 左手の甲『C h e f』 【食材鑑定／神の味覚】

【マメ知識】

ウエディング（惑星）の赤い月は恒星で、ウエディングの太陽は衛星です。ざっくり地球の太陽が月で、月が太陽と考えると良いでしょう。ほかにも2つの月（衛星）があり、物語の重要なキーワードになるので覚えておくと良いでしょう。

作られた武器は、『疾風シルフィーネ零式』『不可視』のような特殊効果が付加されている装備もありますが、新たな効果が付加さ

れたり、成長することがありません。また作られた武器は、契約者の力量のみを反映します。

契約の装備は、特定の条件を満たせば特殊効果を覚えます。ただし魔法使いの血統ではない場合、エイミーの「吸血」のような魔法系の特殊効果は付加されません。また契約の装備は、契約者の力量を超えた力を発揮することが可能です。

魔法使いの血統とは、父親が魔法使いの場合、息子が『魔法使い』か『旅人』になります。魔法使いの父親以外からは、絶対に『魔法使い』の契約者が誕生しません。また魔法使いの娘は、魔法系の特殊効果が付加された状態で契約できるので、契約者から珍重されています。このような理由から魔法使いは、希少性の最も高い刻印となっています。

イメージ置き場【随時更新】

【イメージ置き場】

写真やイラストを随時更新しております。

たまに覗いてみてね^^

【イラスト】

主に登場人物のイメージです。小説とは、髪色とかイメージが異なると思いますが、『アニメ版ちーかの』ということでご了承ください（苦笑）。物語前半は、登場人物の容姿を描写していません。第一部終了後に色々と加筆修正していかうかと思いません。

【内】内は、小説内で基準にされること。例え：フェルミ基準で〇割増しなら巨乳など。

> i 3 4 3 5 6 — 3 7 0 8 <

フェルミ・Ar・オシリス

フェルミは、金髪・碧眼が大きな特徴です。『鎧』の刻印が胸にあるため、前が大きく開く服を着ています。また騎士の家系ということで、全体的に制服っぽいイメージの戦闘服にしました。アルの装備の中では、リーダー的な存在なので強さも感じてもらえれば。

【オツパイ基準】

> i 3 4 3 4 8 — 3 7 0 8 <

シャールotte・SW・ライダー

シャールotteは、色白で、男勝りの性格です。肌色を明るく、ショートカットにしてみました。また『魔法剣』の刻印が右脇の下にあるので、肩周りを開けた戦闘服にしてみました。人気があるので、イメージから遠いとお叱りを受けそうですが、どうですか？【色白

基準】

> i 3 4 3 6 1 — 3 7 0 8 <

ミアン・ラグ・コーデアル

ミーコの容姿は、本文中で語られているので、赤い目、ピンクの髪、猫っ毛、ユングより幼いなど気を付けて書きました。魔族に類するということでも耳を尖らせてみたのですが、人間と共存している違和感がない程度にしています。服装も本文のままですね。【エロ基準】

> i 3 4 6 7 7 — 3 7 0 8 <

ミリアム・SW・ハイム

ミリアムは、教会の仕事をしていましたが、最終話で主人公と契約しました。切り揃えられた前髪、丸縁のメガネ。肉弾戦が得意ではないので、主に後方支援（傷の手当とか）に従事するイメージで、普段着のまま旅に参加しています。【人の話し聞かない基準】

> i 3 4 3 6 6 — 3 7 0 8 <

ナルル・ラグ・ヒットマン

ナルルは、刻印を持っています。修道院の仕事をしており、戦闘に参加しません。なので、イラストも修道服にしました。長い黒髪はローブに隠しています。夫が神父で禁欲生活を強いられているので、その反動から口が悪いです。そんな感じが伝わりますか？【口悪い基準値】

> i 3 4 9 1 8 — 3 7 0 8 <

エイミー・ブラ・バラモン

主人公の憧れる大人の女性ですが、アルコール中毒患者なので腫れぼったい目蓋や赤ら顔にしました。またシャーロットと同じ魔法

装備なので、色白で、二人は似ているということと髪色を同じ青にしてみました。台詞ほとんどないので印象が薄くなってしまうました。【大人の女性基準】

> i 3 4 3 4 7 — 3 7 0 8 <

ユング・Arc・ノイエガ

ユングは、ヒットマン夫妻の養女で見た目が未成年（16歳未満）ということ、幼さを強調しています。ユングは『弓使い』の武器なので、近接戦闘することがないから軽装でも良いかと、民族衣装っぽいのを着せました。ランキングでは不人気なので頑張っしてほしい。【ロリ基準】

> i 3 4 5 9 7 — 3 7 0 8 <

モーリ・Ar・バレキオス

モーリは、フェルミと同じ『鎧』なので前が大きく開くデザインですが、作品中にピンクのショールを着ているとあるので、胸の開いた服の上にショールを羽織らせました。英雄カインの前では大人しいけど、基本的に口が悪く、態度もデカい。奇抜なメイクはパンダメイクです。【猫被り基準】

> i 3 4 7 3 1 — 3 7 0 8 <

マーシャ・Shi・ガンティ

服装は、彼女の憧れと言いか女王様と同じピンクのショール。紫の巻き毛に、M女っぽい垂れ目にしました。脱ぎたがりの見せたがり、叩かれてもヘラヘラ笑っているという感じですが、なかなかイラストで表現しづらいです。シャーロットの親友ですが、たぶん直接的な関係はないと思います。【M女基準】

> i 3 4 7 3 6 — 3 7 0 8 <

リレイ・SW・ブランドン

リリイは、元盗品で作中で修道服を着て主人公に挨拶します。契約の装備にしては、年齢が高いとの表現以外されてません。第二部では、不幸を背負った装備の先輩として、ほかの女の子とも色々絡んでくると思います。【不幸自慢基準】

> i 3 4 7 0 4 — 3 7 0 8 <

【左】魔人ガオリ

モチーフが虎のガオリは、魔人メエリドから『虎の姉ちゃん』と呼ばれていますので、身長は三人の中で一番背が高く姉御的な感じにしました。普段は寡黙ですが、話し言葉は武士語です。性格は、好戦的で常に帯刀しており、「切る」と「噛む」しか選択肢がありません。【アホ基準】

【中】魔人ピヨンヌ

目元がミアンに似ているとの理由で、魔人メエリドからメイド長に任命されています。子供のメエリドからは、バニーガールの出来そこないと呼ばれており、生意気な口を聞くとお仕置きされます。床まで末広がり伸びる髪は、ピンクのストレートで、これもミアンを意識しました。【お仕置き基準】

【右】魔人ワーオン

魔人メエリドと散歩するときは、首に縄を付けられています。上を向いた鼻は、嗅覚の鋭さを象徴しており、常体で舌をだらしなく出して犬臭いらしいです。犬の獣人っぽいイメージです。メエリドは、ミアンの次に可愛いと称し、毎晩ではない夜の慰み者です。口リコンのメエリドに寵愛されているので、胸小さいです。【犬臭い基準】

扉絵（更新中）

【どうしても良いにゃん】

> i 3 4 9 3 8 — 3 7 0 8 <

【写真】

本作品のほか、他作品で日本刀の登場する推理小説を書いていたので、国立博物館にて刀剣のイメージを作りに行きました。国立博物館では、弓矢を持ち運ぶ弓穂、開戦を知らせる鏑矢を実際に見てきました。一部クライマックスでエラハイが鏑矢を使って、ナルルと通信するシーンが登場しますが、博物館でアイデアを得ました。

> i 3 4 3 5 2 — 3 7 0 8 <

切先イメージ『備前元重』：この刀は、切先も申ことながら反りが見事でした。しかし鋼は、ホームセンターの包丁売場で見ても波紋が綺麗ですね。ちなみにステンレスの包丁には波紋がありませんので、某ゲームに登場する刀剣の波紋は、あまりリアルではないと思います。

> i 3 4 3 5 3 — 3 7 0 8 <

彫金イメージ『小龍影光』：これも備前なのですが、前後に棒樋を掘り龍を浮彫しています。意外とおしゃれ。余談ですが、鏢だけを展示してあるコーナーにて娘が「すげえ刀って、デコれるんだね」と面白いこと言ってました。

> i 3 4 3 5 4 — 3 7 0 8 <

柄イメージ『青江次直の短刀』：柄がイボイボしているのは、白鮫肌を着せているからで、たぶん滑り止め効果を狙ったと思われます。この短刀の柄が一番ファンキーでした。

イラストとか頂けたら、こちらでご紹介いたします。
もしも頂ければですが・・・。

1. 私と契約してください

「私は、凄い『鎧』なんだから・・・」

幼馴染のフェルミは、冒険に出ることに二の足を踏んでいた俺に、契約を申し込んできた。返事に窮する俺に「私と契約してください」と、再び申し込んできたのは、16歳の誕生日を迎える一カ月前のことだった。

求める者アルフレッド・S W・ライダー、汝は守りし者フェルミ・A r・オシリスのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？

これは、愛し合う男女が神に誓う、永遠の愛の言葉であり、愛する者に誓う愛の言葉だ。そして俺が16歳の誕生日に、幼馴染のフェルミ・A r・オシリスと交す契約の言葉でもあった。

「ち、誓います」

俺は、集まってくれた大勢の友人や親戚の前で、結婚式の予行演習のような幼馴染との契約の儀式に、少し照れくさい気分になった。緊張のあまりに上擦った俺の誓いは、滑稽だったようで会場にいる友人が「本当に誓えるのか？」と、からかったりした。

「ち、誓いますよ、本当に誓いますから、神父様、契約を続けてください」

守りし者フェルミ・A r・オシリス、汝は求める者アルフレッド・S W・ライダーのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、

真心を尽くすことを誓いますか？

「誓います」

フェルミは、背筋を伸ばし凜として俺に忠誠を誓った。浮ついた俺とは、対照的な宣言の唱和に、会場にいる俺の親戚筋が顔を赤らめた。

爵位を持つオシリス家の御令嬢と、鍛冶屋を生業にしてきた我がライダー家の長男には、生まれ育ちの差があるのだ。俺と彼女が不釣り合いなことくらい、ウチの親戚筋も解っていたことだ。

では、誓いのキスを

宣言の続いて、このイベントが控えていたので俺は、先ほどから平常心を保てなかったのだ。

「えーと、どこにキスすれば・・・」

「ここです」

フェルミは、ウェディングドレスを模した純白のドレスの胸元を下げると、あらわになったデコルテ部に人差し指を突き立てた。

鎧属性のフェルミとの契約の刻印は、ふくよかなバストの谷間に描かれていた。無印のペンタグラムは、彼女が清らかな乙女の証であり、未契約の鎧を示す証だ。

「皆が見てるんだから、早く済ませてよ」

「う、うん」

俺は、大勢の列席者に見守られる中、幼馴染の胸元に俺の所有物である証を刻むことになる。初キスとしては、大胆過ぎる場所だ。

chu! smoooch!

フェルミのペンタグラムには、光り輝く『Al(alfredo)』が刻印され、その刹那に俺の胸板にも、同様のペンタグラムが描

かかれたはずだ。正装で着飾った俺の刻印は、見ることができないものの、焼印を押し付けられたように熱い痛みを感じたので、契約が成功したことが解った。

「い、痛い・・・」

フェルミの口から思わず零れた弱音は、胸の奥をチクリと刺した。彼女も同じ痛みには耐えていると考えると、切ない気分になる。

我、神の名において、剣士アル・S W・ライダーは、守りし鎧の乙女フェルミ・A r・オシリスの正式な所有者と認めます。ご列席の皆様方も、破られぬ契約により、二人の冒険を見守ることを誓います。

神父は、胸を押さえて苦しんでいる俺たちに近付いて、肩を抱いて列席者に拍手を求めた。古い教会の神父にとっては、日常の出来事なのだろうが、契約初体験の俺には、流れ作業の様な儀式が見世物みたいで気に食わなかった。

「なあフェルミ、こんな恥かしいのなら、二人だけで契約を交せば良かったな？」

俺は、顔を真っ赤にしてうつむいている彼女に、神前式で契約したことを詫びた。そもそも俺は、格式ばった神前契約なんて望んでいなかったのだが、ウチの両親がオシリス家の爵位に配慮して、押し進めた契約式だ。

「ううん、アルのご両親が気を使ってくれた神前契約よ、とても嬉しいわ」

「そ、そうか」

「それに、友達の顔を見てよ」

俺とフェルミが顔を上げると、先ほどまで好奇心な目で、契約の刻印を見つめていた友人たちは、立ち上がって拍手で迎えてくれた。

「そうだな、初めての契約なんだから、皆に祝福してもらって、良かったのかもしれないな」

「・・・私は、初めてじゃないよ」

「えっ？」

「これが最初で最後の契約だもん」

教会の広場では、芝生に白いステージが作られており、一段高い場所に座らされた俺たちは、再び見世物状態にされた。

大人たちは、主役である俺たちと無関係に、社交辞令のようにお互いに刻まれた刻印を見せ合い、自分たちの冒険談に花を咲かせていた。

「私の両親は、もともと契約者だったのよ」

「フェルミのお父さんは、騎士だったよね・・・お母さんは？」

「お母様の属性は、ランスで刻印が右肩にあるわ」

「ランスか・・・ずいぶん勇ましいお母さんだね」

「アルは、私が武器の方が良かった？」

「フェルミは、性格もお堅いし、鎧の方が似合ってるよ」

「性格がお堅いって、それ褒め言葉かしら」

「鎧なんだからカタイは、褒め言葉だろう」

俺たちの住んでいる世界『ウエディング』では、10歳を過ぎた頃になると、体の何処かに刻印が浮かび上がる。男性は、左右どちらかの手の甲に刻印が浮かび上がるものの、多くの者は、意味を持たない旅人『Traveler』の刻印が刻まれる。

そんな刻印には、稀に英雄『Hero』、騎士『Knight』、魔法使い『Magician』など、街の外に蠢くモンスターたちと戦うために、有効な刻印が刻まれる者がいる。彼らは、人々から契約者と呼ばれ、各々の活躍によって栄誉ある爵位が与えられる。

女性の刻印は、体の何処かに武器や防具を意味するペンタグラムが浮かび上がる。先ほどフェルミの母親が右肩に現れた刻印が『ラ

ンス』を意味していたように、胸元の刻印が『鎧』などが、その例えだ。女性の刻印には、男性の『Tr』に当る凡庸なる刻印が存在しないと考えられている反面、男性の刻印が生涯消えないのに対して、女性の刻印には色々な制約があった。

例えば母親になったときは、刻印が消え去ってしまい、その効果を永久に失うことになる。フェルミの母親が「ランスだった」と過去形で紹介されたり、契約式に参加している大人たちが、過去の冒険談に花を咲かせているのは、そのためである。

もう一つの大きな制約は、契約者の男性の『死』が、武器であり防具である彼女たちの『死』を意味することだ。彼女たちの『死』が、契約者の『死』を意味しないことから、非常に理不尽な制約だが、それでも多くの未婚の女性たちは、長い人生に一度くらい契約者との冒険を望んでいた。

「フェルミとの契約は、俺にとって大金星なんだけど、本当に俺で良かったのか？」

「・・・なんで、そんなこと聞くの？」

「剣士の刻印『SW (Swor dsman)』は、義父おじいさんのように『騎士』でもなければ、まして『英雄』でもない。フェルミのような優秀な『鎧』を身に付けるほど、価値のある刻印じゃないだろう？」

俺のミドルネーム『SW』は、剣士の刻印を持つ契約者を現していた。

「クラスには、確かに英雄や騎士の刻印を持つ男の子もいたけど・・・汗臭い男の子の『鎧』なんて、想像できる？」

「あつ、なるほど・・・けど、俺も年中サウナ状態の鍛冶屋の息子だし、汗臭いと思うよ」

「アルは、小さい頃からの友達だし、ちょっとなら我慢できるよ」

今日の俺は、風呂にも浸かって正装もしており、小綺麗な格好をしているが、普段の俺は、けして風呂好きの綺麗好きというわけはなかった。同級生に先んじて希少な『鎧』を手に来たので、彼女の「契約してください」との申し出を断る理由は、見当たらなかった。

さて、お集まりの皆さんご注目ください。この度、晴れて冒険の旅に出ることになりました、若い二人の門出に際して、ここで初となる共同作業を行って頂きます。カメラをお持ちの方は、檀上の傍に寄って頂いても、結構でございます。

司会を務めていた俺の親戚は、当事者の許可も取らずに、冷やかに半分の友人をステージの前に整列させた。

「キゝスしろ！ キゝスしろ！ キゝスしろ！ - -」

会場の誰ともなく音頭を取って、キスコールが沸き起こった。奴らの目当ては、フェルミを『鎧』に精製する一瞬、衣服が透けて素肌を晒す、そのタイミングをカメラに収めることだ。

俺は、フェルミを皆の視線から避けるように、後ろに隠してから、彼女の胸の刻印にキスをした。

胸の刻印は、焼けるような痛痒さと、鉄が焼け焦げるような匂いがした。

「オヤジの鍛冶場も、似たような匂いがしたっけ」

フェルミのペンタグラムに描かれた『A1』が輝いて、衣類が透けて虚空に消えた。最初の精製は、身を引き裂かれる痛みを伴うと聞いたことがあったが、彼女の苦痛に歪む表情を見ると、俺の痛みなんて、大したことが無い我慢できる。

「い、痛い・・・はじめてが、こんなに痛いなんて、誰も教えてくれなかったよ」

フェルミの体が完全に消えて、代わりに俺の正装の上に現れた『純白の鎧』は、まるで騎士物語に出てくる勇者の装いだっただ。

「これは、見事な『鎧』ですなあ……さすがオシリス家の御令嬢だ」

鑑定士の刻印『Ju (Judgment)』を持つ初老の男は、彼女の父親が招いた古い友人だ。

「いえいえ、まだ見かけ倒しの子供よさこいですよ」

「どれ、私が鑑定してみましょう」

鑑定士は、鎧を身に付けた俺の傍まで来ると、手に持った杖を振り上げて「仕えし契約者との命約、守りし者の力を我に示せ……」と、呪文を唱えた。彼ら鑑定士は、魔法使いのなりそこないだと、聞いたことがあった。

「私の見立て通り、とても優秀な『鎧』ですぞ。魔法耐性がトップクラスで、火、風、水、土の全攻撃耐性も付いている。毒と麻痺の無効化は、冒険の心強い友となりましょう」

「ふむふむ娘の頑固なところは、『鎧』になっても相変わらずだな」娘を褒められたオシリス卿は、機嫌を良くして口髭を撫で回していた。

「なあフェルミは、凄い『鎧』らしいよ」

俺は、自分の胸元に話しかけた。

「うん……私は、凄い『鎧』だって言ったでしょう」

「そつえば、言ってたね」

「私、重くない？」

「いいや、重たくないよ」

剣士の俺に不釣り合いな重厚な『鎧』は、たぶん騎士の血統によるものだろう。本来、軽装備で戦うことを得意とする剣士には、不釣り合いな気がした。

「本当に？」

「本当だよ」

「本当に、重くない？」

「そつだな、もう少しダイエットした方がいいかも……」

「重いじゃん！ 私のこと重いの思ってるじゃん！」

だって、何度も確認するから「重い」と答えてほしいのかと思っ
たんだよ。

冒険に旅立つことを躊躇っていた俺も、これだけ盛大な契約の儀
式を執り行ったのだから、今さら旅立たない言い訳も出来なくなっ
た。

フェルミが盛大な契約式に応じた理由は、俺の背中を押すためだ
つたのかなと、彼女の心情を勘ぐったりしたけれど、もう引き返せ
ない後の祭りだ。

「俺たちの冒険の目的は、自分探しってことでいいよね？」

「駄目です、却下です。男の子なら、もっと大きな目標を持ってく
ださい」

「ならば、隣町に薬草を買いに行こう」

「それも却下です」

「フェルミが俺と契約した目的は、いったい何なのよ」

「魔王を倒して、世に名声をあらわすためです」

「えええ！ 魔王討伐が目的なら英雄とか、騎士とか、もっと適職
の契約者を探せば良かったじゃないか」

「それでは、彼らの手柄になってしまおうでしょうか？」

「それって……」

「一介の剣士アルが魔王を討伐すれば、私（鎧）が優秀だったお蔭
として、私の名声が後の世まで語り継がれましょう」

やはりフェルミは、騎士の娘だと再認識させられた。

2・私が守ってあげます

「フェルミ……悪いけど、少しだけ解除しても良いかい？」

剣士の俺には、やはり軽装備がお似合いだったようで、『鎧』の重量に力負けしていた。

「駄目です……もう少しですから、このまま頑張ってください」

「駄目、駄目って言っても……フェルミだって、息が上がっているじゃないか……本当は、もう我慢も限界なんだろう？」

『鎧』となつているフェルミとは、『死』と同じように『体力』

も共有しており、俺の足に貯まった乳酸の影響で、下半身辺りの感覚が馬鹿になつているはずだ。

「そ、そんなことないです……もう少しだけなら」

「我慢するなよ……フェルミ、もう良いだろう？」

「もう少ししたら、気持ち良くなるかも……んっ」

「あっ！……もう駄目かも……もう出ちゃうよ」

俺は、急な斜面に片膝をついて立ち止まると、体を前に倒して『鎧』を解除してしまった。ペンタグラムが輝くと同時に、俺の上半身からヌウ〜と、フェルミの体が出てきた。

「バカ！ バカ！ バカ！ もう少してイケたのに」

急に解除された彼女は、俺と向き合う形で抱っこされている。彼女は、剣士の俺に合わせて軽装な衣服に身を包んでいたが、その豊かなボディまで軽くなるわけじゃなかった。前屈みに彼女を抱えている体力は、今の俺に残っていないので早く離れてほしかった。

「我慢できなかった俺も悪いけど、やっぱり無理があるよ」

「却下です。私は、アルが耐えてくれれば、我慢できましたよ」

「ウソだよ、フェルミだって苦しそうな声出してたよ。あは〜んとか、うふ〜んとか、気になつて前に進めないよ！」

「わ、私が、そんな妙な喘ぎ声を漏らすはずないでしょう！ な、

なんで私が、アルに抱き着いて、あはーんとか、うふーんとか言うわけ？」

日が暮れて三つの月が地上を照らし出してから、三度目の口喧嘩の理由は、他愛もないことで始まった。フェルミがやらしい声を出すから、俺の気が削がれた？ そんな馬鹿な理由で、『鎧』を解除する訳がない、冗談を言っただけなのに。

俺たちは、初めて冒険に出る若者に必ず課せられる、儀式『First night』に参加していた。半人前のまま冒険者として旅立った若者が、志半ばにモンスターの餌食にならないように、契約者の体力や、武器や装備との相性を再確認するために行われている儀式だ。

街から一番近い神殿までの道程には、冒険初心者の若者が戦うのに、丁度良い加減のモンスターが生息している。神殿までに夕刻から翌日の日の出まで、辿り着ければ儀式が終了して、晴れて一人前の冒険者として、旅立つことが許されるのだ。

儀式は、一回で突破できる者もいれば、何度やっても失敗に終わる者もいる。ただ三回以上失敗した冒険者は、大抵の場合、装備側から契約者に解除（三行半）を突き付けられる。

「よお、お宅らは、新婚さん（Newlywed）？ 初夜（First night）で喧嘩しているようでは、長い冒険旅行なんて出来ないぞ」

俺たちに話しかけてきたのは、いかにもベテランの弓使い（Archer）だった。長身の男は、作られた軽装備で身を固めていたが、深い緑の『弓』と、青白く光る『籠手』は、契約で得た武器と防具に間違いなかった。俺たちは、お互いの自己紹介を簡単に済ませた。弓使いの男は、エラハイ・Arc・ヒットマンと名乗った。

「俺たちは、今日が始めての儀式なんですよ」

「ウチは、この娘『弓』との契約を済ませたばかりでね、初夜に参加するのは、三度目なんだよ」

「へえ、装備を変える度に、儀式に参加するんですか？」

俺は、無知をひけらかしてしまつたようで、フェルミは「この剣士は、常識を知らないのよ」と、慌てて俺の口を塞いだ。鍛冶屋を継ぐつもりだつた俺は、冒険関連の授業なんて、昼寝の時間だと思つていたし、今現在をもつても、あまり前向きな気持ちではない。

「いいんだよ、知らないことを尋ねるのも、冒険者に必要なことだよ。それよりも、彼女を紹介しておくれよ？」

エラハイは、俺に寄り添つて警戒しているフェルミを指差した。

「彼女は・・・」

フェルミは、俺の『幼馴染』？ 『鎧』？ 『恋人』？ たぶん

『恋人』だと紹介したら、彼女の正拳突きが飛んできそつた。『鎧』だと紹介するのは、彼女を物扱いしているみたいで気が引ける。

「私は、剣士アルの『鎧』です。通り名は『オシリスの完全拒絶』です」

俺は、フェルミに通り名があることを初めて知つた。

「うん？ オシリス卿の娘なら、軽装備じゃないのか・・・それは、残念だつた」

「そちらも、名乗るのが礼儀です」

「そうですね、永久爵位を持つオシリス卿のお嬢さん・・・いいでしょう」

エラハイは、両手を前に向けると、その先にぶら下がる女の子が出てきた。

「『籠手』のエイミーです。特技は、攻守ともに吸血効果（Suck blood）を付加できます」

次にエラハイは、右手で弓を高く上げると、その手に巻き付いた

状態で幼い女の子が出てきた。

「こんばんわ・・・『弓』のユングです。えーと、特技は、まだ在りません」

お姉さんタイプのエイミーに比べると、ユングは、まだ成人前（16歳）の子供に見える。

「エラハイさん、その二人とも素敵な装備ですね」

「アルは、気が付かないの？ その『弓』は、まだ成人してないじゃない！ 成人前の女性と契約するのは、『ウェディング契約の書』青少年保護育成条項に違反してるわ！」

フェルミは、ユングを指差すと契約者であるエラハイを強く非難した。

「オシリスのお嬢さん、ウチは、大人の女性を愛せないんですよ。文句があるのなら、儀式が終わって一人前の冒険者になってから、意見することだな」

エラハイは、ユングのうなじに描かれたベンダグラムにキスをすると、彼女は、痛みをかみ殺す草で『弓』に姿を変えた。俺は、契約の痛みを思い出して、思わず自分のうなじを隠してしまった。

「あ、貴方は、変態さんですわ。子供に、あんな痛みを強要するなんて・・・」

珍しくフェルミは、感情を高ぶらせている。

「初夜で喧嘩している新婚さんには、俺と所有物の関係に、口出してほしくないね」

「坊やたちは、ほっておいて先を急ぎましょう」

エイミーの組んで腕の上下には、やはりベンダグラムが描かれていた。

「ああ、俺の可愛いエイミー・・・坊やたちには、契約者の愛の形が歪んで見えるらしい」

エラハイは、彼女のペンタグラムに舌を這わせると、青白い炎に包まれた彼女が、艶かしい叫び声をあげて、業火に焼かれる様に身

をクネらせると『籠手』に姿を変えた。

「今のは、なんか素敵だ・・・」

俺は、エイミーの妖艶な契約に魅了されてしまった。

「本来ならば、少年から、『鎧』を取り上げたいところだが、お宅らの様子なら、わざわざ取り上げる必要もないだろう。お宅らは、今から街に戻って、儀式をリタイヤするんだな。ここから先は、神殿までモンスターの生息地になる」

エラハイは、街の方向を指差すと、微かに街明かりが確認できた。俺たちは、日の沈む前から、たくさん歩いたのに、まだ近くに街明かりが見えたことに、落胆してしまった。

「あ、あのエラハイさん・・・色々教えてくれて、有難うございます」

俺は、彼にお礼を伝えると、フェルミが金切り声で「なんで！有難うなの！」と、ヒステリックに怒鳴っていた。

「少年は、良い冒険者になるだろう、お嬢ちゃんは、もう少し分を弁えないと、少年に捨てられるぞ」

エラハイは、弓使いらしく颯爽と暗がり消えて行った。

「なんで！ アルは、あんな変態さんに、有難うとか頭下げてるのよ」

「俺たち二人とも春生まれだから、同級生の中で初めての冒険者だろっ？」

「だから？」

「他人の契約を見たことなかったから、すごく参考になった」

「はあ？」

「何だかんだ言っても最後は、俺たちのこと気にかけてくれてたじやん」

俺は、エラハイとエイミーの契約を思い出すと、ちょっと羨ましく感じた。彼らの契約に比べれば、俺とフェルミの契約なんて、子供のお遊びだ。

「彼は、同じ軽装備が適職だから、剣士に仕える装備を奪おうと近付いてきたのよ」

「えっ、エラハイは、盗賊だったの？」

「アルは、彼の何を観察してたのよ？」

「えーと、契約方法がカツコイイなど」

フェルミは、顔を手で覆い隠すと、情けないと言わんばかりの大きな溜息を吐いた。

「カツコイイとか言ってる場合？ 私たちは、まだ痛みに耐える段階でしょう？」

「けど、ベテランのエイミーだって、痛そうにしていたし、抑えられない痛みなら、もっと楽な契約姿勢を考えるとかさあ、楽しみを見つけてもいいじゃん」

「例えば・・・どんなポーズよ」

フェルミは、俺の力説に話を聞く耳を貸してくれた。ちなみに今の契約方法は、胸を肌蹴た棒立ちの彼女に、俺が申し訳ない顔をして刻印にキスをしている。解除方法は、前述のとおり彼女を向き合った形で抱っこしている・・・そうだな、駅弁売りと駅弁みたいな格好だ。あれが、じつに情けない格好で、知り合いの前で解除した日には、三日ぐらい立ち直れない。

「エラハイは、なんか格好良く二人を出し入れしてたよ」

「私たちも経験を積みば、出し入れも様になるわよ」

「そうかな？」

「あのね、あの娘たちの刻印は、腕とか、うなじなのよ・・・私の刻印は、そ、そのオツパイでしょう・・・比べるまでもなく、私たちの勝ちじゃない」

「フェルミだつて拘る部分があるじゃないか？」

「・・・『鎧』として誇りはあります」

「そろそろ疲れも取れたし、練習を兼ねて契約しようか？」

と、俺は言うと、フェルミを右手で抱きかかえて、左手を天高く伸ばした。

「我は汝の契約者にして、誓いを守る者アルフレッド、神の名において・・・」

「ちょ、ちよつと、その呪文みたいな詠唱は、いったい何なの？ それと左手を突き上げている理由を説明しなさいよ」

俺たちの契約に呪文が要らないのは、エラハイたちの契約を見れば、理解できたと思う。

「だから、雰囲気作りだよ」

「格好悪いし、笑つちゃうから却下です」

では、改めて右手で抱き寄せた後、左手でフェルミの顔を支えた。俺は、彼女の喉元に舌を這わせると、胸元の刻印に向かって白い肌を舐めた。

「ちょ、ちよつと、くすぐりたいから止めてよ」

「エラハイだつて、エイミーの腕を舐めてたじゃん！ 少しくらい、くすぐりたいのは、慣れれば気持ち良いから我慢しなよ」

「駄目です。友達に見られたら、私が欲求不満だと思われちゃう」
フェルミには、エラハイの契約をパクるのを禁止された。

仕方がないので、支える仕草からやり直すと、少し乱暴に彼女の襟元を引き下げた。

「出ですよ！ オシリスの完全拒絶！」

鉄の焼ける匂いと焼ける痛みは、ちつとも緩和されなかったが、契約時に叫ぶのは、痛みを紛らわすのに効果的だった。それに夜闇のせいなのか、いつもより白炎が倍以上立ち上がった気がする。

「今のは、成功じゃないかな？」

純白の鎧は、相変わらず重たかったけれど、格好良く契約出来た俺は、このまま神殿までイケる気がした。

「……」

「フェルミ、どうしたの？」

「乱暴に服を下げないでよ、オツパイが見えたので、却下です」

「ええー、一連の動きがカッコイイのに」

「アルの格好付けたい気持ちは、理解できるけど、私たちのやるべきことは、もつと沢山あるでしょう？」

「解ったよ、衣服を肌蹴るのは、フェルミの仕事で良いよ……」

「解ってくれば、いいです。私たちも神殿に向かいますよ」

フェルミに尻を叩かれた俺は、腰に携えた既製品の剣に手をかけて、コンパスを確認した。

「赤い月を目指して歩けば、神殿に辿り着けるはずだ」

一步を踏み出した俺は、街を出てくるときのオヤジの忠告を思い出した。雑魚のモンスターは、仲間を集めて狩りをするから、森で長い時間足を止めれば、奴らに囲まれてしまう。迂闊だった。

体毛に覆われたモンスターは、身長二メートルくらいで、大小様々な木の棒を持っていた。数は……先頭に三匹、後方にも何匹か気配がした。

「まいったな……」

俺が剣を鞘から抜くとフェルミは、柄つかしか見えないので驚いたよ
うだ。

「その剣は、なんで柄つかしかないの？」

「この剣……疾風シルフィーネ零式の棒樋ぼうひは、不可視魔法で見えないんだ。ウチの鍛冶屋で一番トリッキーな剣を頂戴してきたんだ
ぜ」

刃長二・五メートルの疾風シルフィーネ零式が、なんで七十センチの鞘に納まっているのかなど疑問は、尽きないけれど、その辺も含めて相手の虚を突く、正真正銘の魔剣ってやつだ。

飛びかかってくる猿どもは、俺の間合いに入った瞬間にぶった切ってやるぜ！

「アルのこと、私が守ってあげます・・・」

フェルミの声は、少し震えていた。初めての实战だ、怯えるのも無理はない。

「頼んだぜ・・・」

剣士の俺の声も、震えていただろう。けどな、俺の震えは、武者震いってやつだけだな！

奇跡のカーニバルの開幕だ！

3・私なら大丈夫です

疾風シルフィーネ零式の不可視には、相手に間合いを計らせない、奇襲攻撃に長けているなど利点があるものの、高難度の剣捌きが必要される曲者だ。

刃長二・五メートルを自由自在に扱うには、見えない切先の風切音を頼りに、軌道を敵に向けて戦うのだが、熟練の剣士でも自分を切り裂くこともある。

「疾風の名前が示すとおり、風を操り敵を切り裂く魔剣だ」

先頭にいた三匹のうち、真ん中の一番長い木の棒を持ったモンスターが、ゆっくりと近付いてきた。

「アル・・・あのモンスターは、リーフ・オークだわ」

リーフ・オークは、最低3匹で行動しており、冒険者を2、3集団が協力して襲い掛かってくる。知能は、五歳児並みだと言われているが、戦闘に際して当てになる情報じゃなかった。

「なんでリーフ（葉っぱ）なんだ？」

「彼らの主食が、葉っぱだからよ」

リーダー格と思われる一歩踏み出したリーフ・オークは、体毛を掻き分けてギョロリとした目を向けた。白目のない瞳は、獣特有の鈍い輝きを放ち、突き出した顎から零れ落ちる唾液は、草食のモンスターと思えなかった。

俺は、リーダー格のリーフ・オークの足元に切先を忍ばすと、漁師の一本釣りが如く、股の間から脳天まで一気に切り裂いた。

「悪く思うなよ、子豚ちゃん！」

と、ここまでは、計画通りだったのだが、二手に備えて返した剣は、勢い余って俺の背中をガツンツと叩いた。

「んっ！」

フェルミが衝撃に驚いたのか、小さな呻き声をあげた。

「もしも疾風シルフィーネ零式が片刃でなかったら、フェルミの『鎧』に大きな傷跡を残すところだった。」

「す、すまない！」

リーダー格を失ったリーフ・オークたちは、ブイヒイブイヒイと豚のような鳴き声をあげると、後退りするように森の闇に消えた。

圧倒的な戦力差を見せつけられた奴らは、俺たちに恐れをなして敗走したのだ。

「さつき背中に剣当てて・・・ごめんな」

俺は、初のモンスター退治が成功すると、奴らの右手から小指を切り落として、懐に入れてあった小瓶に詰めた。

冒険者たちは、モンスター退治を行った証拠に、教会に決められた戦利品（部位）を街に持ち帰り、その教会で換金をして生計を立てている。

先ほど退治したオーク系の戦利品は、右手の小指だった。

「ねえアル、その剣だけど、ちゃんと使えるの？ もっと自分に合った剣で、戦った方が良いんじゃないかしら？」

疾風シルフィーネ零式は、先ほどの戦いで初めて使った。正直に言えば、剣士の俺でさえ、あまりのじゃじゃ馬ぶりに、この剣で戦うのを遠慮したと思った。

「ウチの鍛冶屋では、一番の業物わざものなんだけど、俺の実力レベルでは、まだ装備できる剣じゃない」

俺は、背中に差していた小太刀を取り出すと、目の前の切株に置いた。

「その剣は？」

「これは、俺に剣士の刻印が現れたとき、オヤジが打ってくれた最初の剣、轟くCWW（Cold wintery wind）だよ・・・」

・戦利品を剥ぐのに、持ってきたんだけど、こいつをメインウエポン主要武器に換装しておこう」

「神殿までは、まだ距離があるのよ」

フェルミは、初心者用の剣と聞いて、不安を覚えたようだ。

俺は、疾風シルフィーネ零式を背中との差すと、腰のフォルダーに轟くCWWを収めてから立ち上がった。そして体制を低くすると、切株の横にあった若い針葉樹の幹に手を当てて、轟くCWWを鯉口から浮かせた。

フォオオ！と、地を這うような風音がして、針葉樹の幹に左から三本、右から二本の切り傷を付けた。

「もしかして、今五回攻撃したの？ 風音は、一回しか聞えなかったのに？」

「これで安心した？」

「うん、その剣も凄いよ」

「安心したなら、先を急ごう」

フェルミを安心させるために披露した技は、轟くCWWの性能ではなく、剣士のスキル（刻印の力）『剣技ハヤブサ』を発動させたものだった。彼女の前では、剣士のスキルを発動させたことがなかったのも、剣の性能だと勘違いしてくれた。

フェルミは、俺の腕前を信用していないところがあり、強い装備を持参していると思わせた方が、納得するだろうと思った。

赤い月が頭上まで昇ると、夜明けまで12時間となった。太陽の周回軌道の真下に近い森では、夜闇が20時間以上続く。太陽が周回軌道？ これは、ウェディングと地球の違いを知らなければ、意味の解らない話だろう。

異世界ウエディングには、大小四つの月があるが、最も大きく二番目に明るいのが赤い月だった。そして特筆すべきは、この赤い月がウエディングの衛星ではなく、赤い月の軌道上にウエディングが存在しており、つまり赤い月は、死滅に近付いた太陽の成れの果とということだ。

では、ウエディングの太陽は？ 夜闇に姿を消している一番明るい衛星が、大地を照らす太陽なのだ。ウエディングの昼夜は、太陽が周回軌道を回る衛星なので、ウエディングの自転速度に比例して一定であり、地方毎に決まっている。

太陽の周回軌道から離れるほど、昼が長く夜が短い、周回軌道の直下では、昼と夜の比率が同じである。それが人々の生活だけでなく、夜闇を好むモンスターの生息地も限定していた。

最も長く夜闇に包まれる太陽の周回軌道の直下は、モンスターを支配する魔王の土地『Land of Adventure』となっており、南半球には、俺たちが住んでいるサウスファイア王国がある。冒険者たちの究極の目的は、魔王を討伐して、北半球を含めた地上の覇権を手にかざることだ。

もちろん北半球にも人間が住んでいるが、小国同士の戦争が絶えない北半球には、魔王の土地に挑むような冒険者がいない……らしい。

契約者や装備となつてモンスターと戦う冒険者は、『Land of Adventure』でモンスターを退治して、人間の住める安全な土地を開拓すること、北半球に住んでいる人々と商業的交流を絶やさぬこと、その他様々な目的で冒険の旅に出ている。

俺たちは、あれから一匹もモンスターに出会うことなく、神殿が見えるところまでたどり着いた。

「神殿までの距離も残すところ、あと数キロだな……ふう」

現金なもので、少し前までフェルミの『鎧』が重いと文句を言っていたのに、神殿が見えた途端、足取りが軽くなった。

「冒険者に守られた街の近くの森だから、モンスターが生息数も少ないと思うけど、『初夜』にしては、手応えがないわね」

フェルミの言うとおり、ただ神殿に向かつて歩くだけなら、毎年リタイヤする者が出るはずがなかった。確かに、手応えがなさ過ぎだ。

「このままゴールすることも出来るけど、それで「明日から冒険者です」と言われても、ピンと来ないね」

俺は、儀式の意味について考えた。

このまま儀式が終了しても、冒険者として旅立つ心構えが身に付くだろうか？ 彼女を上手く使いこなしていけるだろうか？ それらを試されるのが『初夜』だとすれば、俺たちの旅路は、口喧嘩とオーク一匹倒しただけに過ぎない。

「リーフ・オークの戦利品を増やさない？」

このまま終わりたくない、フェルミも俺と同じことを考えていたのだろう。

「戦利品一個では、騎士のプライドが許さないのかい」

「それもあるけど、せっかくだから私たちの力を試みましょうよ」

俺は、足の疲れを取るために、ちょうど休憩しなかった。先ほどのオーク程度なら、轟くCWWでも剣士のスキルを発動すれば、十分に戦えるだろう。

「ここで火を起こして休憩すれば、またリーフ・オークが現れるに違いない」

俺は、足元に堆積していた枯葉を足で掻き集めると、その中から小枝を拾い集めて、枯葉の上に井形を組んだ。そこに襟元から取り出したマツチ擦って放り込むと、火が次第に大きくなった。

「あら、ずいぶんと手際が良いのね」

「剣技の修行で森には、オヤジとよく来ていたからね」

「ちゃんと、修行してたのですね」

「刻印が浮かんだ頃は、頑張ってたんだ。俺にも、人並みの才能があったんだと・・・」

ウチは、代々鍛冶屋の刻印『Blacksmith』を受け継いでおり、俺にも『Tr』か『Black』の刻印が浮かぶと思っていた。

たぶん剣士の刻印は、右掌にペンタグラムが描かれていた母親の血筋なのだろう。本来は、男性の血統が受け継がれるが、稀に母親の血統を継ぐ者が生まれる。ただし、母親の影響を受けた契約者は、刻印の力を上手く扱えないと、教会の研究者が言っていた。

フェルミが優秀な鎧なのは、何世代も続くオシリスの『騎士』の血脈で、刻印の力が洗練されたからだ。

「人並みの才能では、私が困ります」

「フェルミは、魔王を討伐して名を挙げるんだもんね」

「そ、そうですね・・・私が認めたアルは、そんな弱音を吐いたら駄目です」

「解ったよ」

俺は、自分の体を抱きしめた。

冷たいはずの純白の鎧は、焚火のせいで人肌の温もりに感じた。

「ちょ、ちょっと、恥かしいから・・・」

照れるフェルミは、すごく可愛いと思った。

人間の彼女を抱きしめたら、強い口調で拒絶するだろうが、今は『鎧』だから離れられない。

「少しでもいいから、抱きしめていたいんだ」

「少しだけですよ・・・せっかくの純白の鎧が、汚れちゃうから」

「少しだけ黙っててよ」

俺は、何時間でも自分を抱きしめていたかった。

ペキッ

そろそろ良い感じに、雑魚モンスターどもが集まってきた。木々の暗がりには、赤い月を反射した瞳が、何個も浮かび上がっている。リーフ・オークは、なかなか暗闇から姿を現さなかった。たぶん先刻の敗走したオークたちが、さらに多くの集団を率いて戻ってきたんだろう。今度は、用心深くこちらの出方を探っているのだ。

「五歳児にしては、知恵があり過ぎるだろう」

「・・・」

俺は、やつらの背後に、鍔やいばがキラリと光るのを確認した。

「アーチャ・オークは、鉄の鍔を扱えるのか？」

「・・・」

「フェルミ？」

「・・・なに、もういいの？」

フェルミは、ウツトリした声で答えた。

「一斉掃射されたら、防ぎきれないかも」

俺は、立ち上がると、轟くCWWを中腰で構えて、弓矢を叩き落とすつもりで、アーチャ・オークの攻撃に備えた。

「アーチャ・オークは、たぶん石の鍔のはずだけど・・・鉄の鍔ならゴブリン系のモンスターかしら」

「オークとゴブリンの混合パーティ、ずいぶんと厄介な組み合わせだな」

俺は、摺り足で敵との間合いを詰めながら、『剣技ハヤブサ』を繰り出すタイミングを図っていた。

木々から先兵と思われる、一回り小型のオークが顔を覗かせたが、その面構えに見覚えがあった。やはり先刻の敗走したオークの集団だった。

ブオオオオ！ 轟く風音とともに先兵の顔を切裂くと、純白の鎧が返り血に染まった。

「ごめん、フェルミのこと血で汚しちゃった」

「いいの気にしないで、初夜ぎしきって、そういうものでしょう?」

オークの返り血は、鎧に付着することなく、鮮血のまま俺の太腿の付け根に流れ落ちた。こんなことなら、布のパンツではなく、多少の重量負担を無視して、皮のパンツを装備してくれば良かった。下着が血に塗れて、下半身が気持ちが悪い。

「今夜は、ブヒブヒ言わせてやるからな!」

俺は、オークどもの隠れ潜んでいる暗闇に飛び込むと、特攻に驚いたやつらは、ブイヒイブイヒイブイと鼻を鳴らして、月明かりの元に逃げ出した。

俺は、無我夢中で『剣技ハヤブサ』を発動させたが、さすがに五匹からの剣速は、ハヤブサと呼ぶに相応しくないほど遅くなった。「フェルミ・・・五匹倒したわけだが、まだ戦利品が必要かい?」

俺は、戦線離脱を提案したが、オークたちの血を浴びた『鎧』は、俺に敗走を許さなかった。

「いま戦いを止めるなんて許さないんだから、もっと大勢のモンスターを殺やりたいわ」

契約した装備は、戦闘により能力を開花させ、より多くのモンスターを相手にすることで覚醒する。オークとの戦闘において強い快感を得るのは、フェルミが優秀な証拠だ。

俺は、彼女に促されるまま、さらに五匹のオークの首を撥ねると、血が雨のように頭上から降り注いだ。

「ああ、アル・・・私、体が芯まで火照ってきたわ」

モンスターの血を浴びながら快感を得る幼馴染なんて、想像するだけで、俺の意識も持って行かれそうだ。

「あは〜んっ」

「なんだよ! あは〜ん、うふ〜んって言うじゃねえか!」

と、俺がフェルミの喘ぎ声に気を取られた瞬間、背後からゴブリンの弓矢が飛んできた。二本は、叩き落としたが、三本目は、右脇腹に突き刺さった。

「ひい！」

フェルミは、苦痛に満ちた短い叫び声をあげると、息遣いが荒くなった。俺は、矢が飛んできた方向に、切り落としたオークの首を投げつけると、ゴブリンたちは、ザワザワと相談して敗走を決めたようだ。

「だ、大丈夫か？」

『鎧』のおかげで俺まで貫通することは、なかったものの、フェルミのことが気がかりだ。彼女は、相変わらず荒い息遣いで、何も返答してくれない。

俺が『鎧』を解除すると、汗だくのフェルミを正面から抱きかかえた。彼女の右脇腹を確認した俺は、怪我一つなかったことに安堵した。

「外傷は見当たらないけど、大丈夫なのか？ 痛くなかったか？」

「すごく、きもち・・・かった・・・」

「気分が悪いのか？ 気持ちが悪かったのなら、吐いてもいいぞ」

俺は、フェルミを地面に寝かせると、水筒の水を飲ませてやった。

「アル・・・死にそうよ・・・手を繋いで・・・」

「矢が当たったくらいで、契約の『鎧』が壊れちゃうの？」

俺が手を繋いでやると、彼女は、首を大きく振った。

「私なら大丈夫です・・・戦闘が、すごく気持ち良くなって・・・」

「だって、死んじやうって？」

フェルミは、上半身を起こして俺を正面に見据えた。

「死にそうなくらい、気持ち良かったのです」

彼女は、上気して顔を真っ赤にした。

俺たちは、月明かりの中で大きな声で笑った。

俺たちは、オークから得た十一個の戦利品を小瓶に詰めると、二

人で手を繋いで神殿に向かった。

4・私は許可しません

俺たちが神殿に着く頃には、赤い月が西の地平に沈もうとしていた。赤い月が沈んで太陽が昇るまでの数時間は、青と紫の月が淡く輝くだけの深闇しんやみの時間だ。

フェルミは、神殿の階段を軽やかに駆け上がると、頂上付近で立ち止まって、森から聞こえる儀式の参加者たちの悲鳴を聞いていた。「私たちも、もう少し遅れていたら、深闇の森で発狂してしまいましたね」

深闇の森は、人間から視界を奪うだけでなく、夜行性モンスターたちに力を与える。

赤い月と太陽の間、深闇の中には、魔王の居城が存在すると信じられていた。深闇を追い続けて移動する城なんて、俄にわかかに信じ難い話だったが、同時刻には、城の番兵と呼ばれる魔族系のモンスターが異常発生することが知られていた。

深闇の時間までに神殿に辿り着けなかった参加者は、暗闇の中で恐怖と戦っているのだ。ただ、この森にいるモンスター程度ならば、冒険者を目指すだけの戦闘力で、朝まで逃げ回っていれば、命まで落とすことはないだろう。

「フェルミ……どうして、そんなに急ぎ足なんだよ……まだ日の出には、時間があるじゃないか？」

俺は、階段の中腹で座り込むと、森に向かって耳を澄ませている彼女に、息も絶え絶えに質問した。

「どうして？ 神殿に一番乗りしたいからですよ」

「一番乗りは、オーク狩りで時間潰したから無理だと思っよ」

「では、二番乗りです」

頑固なフェルミのことだから、二番乗りを否定すれば、三番乗りと言っに決まっている。

俺は、諦めにも似た気持ちで階段を登り始めた。

俺たちが神殿の階段を登りきると、既に何人かの参加者が、思いの格好で体を休めていた。

「おやおや、坊やたちも、リタイアせずに神殿まで辿り着いたのか」
声をかけてきたのは、森の中で出会った弓使いのエラハイだった。
彼は、腰布の上に、赤黒いゴブリンの指を何十本も括り付けていた。
「あはは・・・どうにか、辿り着きました」

俺の後ろに隠れたフェルミは、エラハイに敵意剥き出しの視線を送っている。俺は、気まずさで、思わず愛想笑いをした。

「ウチは、少年の『鎧』に嫌われてるみたいだね。お嬢ちゃん、しかめっ面ばかりしていたら、せつかくの美人が台無しだよ」

俺は、エラハイがフェルミに手を伸ばしたので、その手を反射的に掴んでしまった。

「えーと、すいません・・・一応、俺の『鎧』ですから」

「盗まれると思ったか？」

エラハイは、低い声で呟くと、殺気だった目で睨み付けた。

「フェルミには、気軽に触れてほしくないと思います」

俺は、『鎧』の所有者として毅然とした態度で、彼女に触れることを拒んだ。

「なるほど、触れてほしくない」

「はい」

「坊やたちもオークの返り血を浴びて、少し成長したってか？」

エラハイは、目を瞑ると口角を上げてニヤリと笑った。

「可笑しいですか？」

「なあ、アルフレッド・・・お前に掴まれて、エイミーのやつが濡

れちゃったってさ」

俺が掴んでいたのは、エラハイの『籠手』だった。

「す、すいません、エイミーさん、ごめんなさい」

俺は、エイミーの何処を掴んでいたのだろうか？

しかし、掴んだくらいで濡れちゃうのだろうか？

装備になった彼女たちにも性感帯があるのだろうか？

本当に、何処を掴んだら濡れちゃうんだろう？

「・・・」

「アル、なんか変なこと考えてますね」

フェルミは、エラハイの『籠手』を掴んだ手を見ながら、首を捻っている俺に言った。

「えっ、べつに変なこと考えてないよ」

「坊やたち、良いことを教えてやろう」

エラハイからは、殺気が消えていた。あの殺気は、盗むと疑われたこと腹を立てたわけじゃなく、俺が『籠手』（エイミーさん）を乱暴に掴んだから、怒ったのかもしれない。

「冒険者は、人前で装備を解除しない、なぜだと思っ？」

「なぜですか？」

「一つ目は、解除中の装備が盗まれないため」

なるほど、解除中のフェルミの刻印に、誰かがキスをしてしまつたら、俺たちの契約が解除されてしまう。装備泥棒は、まず契約を解除してから、武器商人たちに装備を持ち込むのだ。教会は、教義の中で『汝 姦淫する事なかれ』と注意されていた。

「二つ目は、装備を逃がさないためだ」

「装備が逃げる？」

誓いを立てた装備が、契約者から逃げ出すなんて、ずいぶんと薄情な娘もいるもんだ。

「坊やたちは、この世界に武器商人と呼ばれる、装備おんなを生業にする

連中がいると、聞いたことがあるだろう？ 武器商人の扱う女の子たちは、北部の貧しい農村から金で連れてこられた、器量よし（美人）だったり、契約解除された盗品おんなだ」

エラハイは、女の子の首に鎖を巻いて、奴隷のように扱っている男を指差した。

「そういう娘こたちは、契約者から逃げたがっているのよ」

フェルミは、軽蔑の眼差しで男を睨んでいた。

「契約した装備は、奴隷じゃないだろう？」

俺は、吐き気にも似た感情が込み上げてきた。

「ウチは、エイミーやユングと、強い誓いで結ばれている」

エラハイは、俺たちに装備を解除して、ちゃんと挨拶までしてくれた。やはり、彼が盗賊だなんて、フェルミの思い過ごしだ。

「疑ったりして、すいませんでした」

俺は、フェルミの首を押さえると、強引に頭を下げさせた。彼女は、少し抵抗したものの、エラハイの話に納得した様子で「ごめんなさい」と、か細い声で謝った。

「うんうん、坊やたちは、初々しくて可愛いね」

エラハイは、出会ったときと同じ笑顔を見せた。

「フェルミさんは、騎士の『鎧』なのに、なんでアルフレッドさんと契約したの？」

装備を解除されたエラハイの『弓』ユングは、フェルミと打解けて話している。少し離れたところには、水筒をガブガブと飲み干す勢いのエイミーがいた。

「人前で契約解除をするのは、危険だと言ってなかったか？」

俺とエラハイは、森の中で狩った戦利品を換金するため、神殿に

設置された窓口で並んでいた。俺たちのほかには、二、三人しか並んでいなかったのは、ほとんどの参加者がモンスターとの戦闘を回避して、神殿を目指したためだろう。

「ここは、協会が管理する神殿だよ。神聖な場所で、盗みなんて罰当たりなことする奴はいないよ」

「エラハイは、見掛けに寄らず信心深いんだな」

俺の言葉にエラハイは、首を振ると、胸の十字架を見せてくれた。ウチの本業は、神父なんだぜ」

「それこそ見掛けに寄らないよ」

俺の買取順番が回ってくると、机に置いた小瓶からオークの指を十一本取り出して、聖布の上に並べた。買い取り金額は、一本当たり二万五千Gが相場だから、合計二十七万五千G（市民の平均月給：二十五万G）で、街の連中の平均月給を一回の戦闘で稼いだことになる。

「アルフレッド、ずいぶんと沢山のオークを退治してきたね」

エラハイは、俺の何倍もゴブリンの指を持っている癖に、見え透いたお世辞を言った。

神父は、聖布を仕舞い込むと、代わりに二十万Gと、サウスファイア王国の初代国王が描かれたメダルを一枚くれた。

「ちよ、ちよっと待つてくださいよ、二十万Gでは、計算が合いませんよ！」

俺は、怪訝な顔をする神父に文句を言ったが、取り合う様子もなく、次に並んでいたエラハイから、ゴブリンの指を受け取っていた。「冒険者の報酬には、国に納める二〇%の税金と、十万G以下の報酬を教会に寄付する風習があるから、取り分は二十万Gで正解なぞ」

「そうなんですか？ 戦利品を換金するなら、沢山集めてからの方がいいですね」

「手持ちに余裕があるときは、換金しないのが正しい判断だ」

エラハイは、世間知らずの俺の師匠のような存在になっていた。

「ほかの連中は、気付いていないが、この儀式を終了するためのアイテムは、換金時に貰えるメダルなんだよ・・・つまり、モンスターから逃げ回っていた奴らは、メダルを手に出れない落伍者だ」

「えっ？」

俺は、神父から受け取ったメダルを見た。

「そのメダルを装備の刻印に、押し当ててみなよ」

エラハイは、自分のメダルを『弓』の刻印がある、うなじに押し当てると、体に吸い込まれる様に消えて行った。俺も、彼の真似をして、メダルを『鎧』の刻印に吸い込ませた。

「このメダルは、契約時の痛みを緩和してくれる。複数の装備と契約するには、契約者の痛みを緩和しないと、耐えられないからな」

エラハイは、確か三度目の儀式だと言っていたので、あと一つ契約の装備を持つているはずだ。

「このメダルは、装備に使えないんですか？」

俺は、痛みを緩和するメダルで、フェルミの痛みを緩和できないかと思った。

「彼女たちには、メダルの効果が効かないよ」

「そうですか・・・」

「後ろめたい気持ちになるなら、彼女を悦ばせる戦闘テクニクを磨くんだな。ウチらがテクニシャンになれば、痛みを忘れるほど気持ちいいらしいぞ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ・・・エイミーは、失神するほど喘ぐけど・・・男のウチには、ちよつと想像が出来んわな」

俺は、戦闘中に喘ぎまくるフェルミを想像して、なんか色々イヤバイことになった。

「師匠！ しばらく旅のお供に加えてください！」

俺は、エラハイから色んなテクニクを盗んでやる。彼女を悦ば

すためのテクニクなら、いくら盗んでも泥棒じゃないはずだ。

何も知らないフェルミは、ユングと神殿の階段の上から、東に登る朝日を眺めていた。

日に照らされた彼女の長い金髪は、向かい風に流されて輝いている。

凜とした横顔には、感動すら覚える。

無事に儀式『初夜』をコンプリートした俺たちは、日の光を浴びながら街へと帰路に着いていた。この森のモンスターは、夜行性のため日中に襲われる心配は、ほとんどなかった。

「アル、ちゃんと、私の意見も聞いてください！ あの男との旅、私は許可しません！」

フェルミは、俺が勝手にエラハイと旅をすると、決めたことに腹を立てていた。

「勝手に決めたことは、謝るけれど、ベテランの冒険者と旅が出来るのは、俺たちにとって有難いことだろう？」

「それは、そうですね・・・初めての旅は、二人きりの方が良いじゃないのよ（モゴモゴ）」

フェルミは、口の中でモゴモゴと文句を言っているが、聞えないフリをして誤魔化した。

「エラハイは、あんな形なりをしているが、本業は、神父様らしいよ。

フェルミは、ヘンタイ扱いしてたけど、ユングだって、あんな形で俺たちより二つも年上だったじゃないか。剣士の俺と契約したのだから、見る目が無いんだよ」

俺は、フェルミの間違いを指摘しつつ、エラハイとの旅に同意させた。

「だけど、あの男に気を許してはいけません。彼は、『鎧（私）』を盗むために、油断させているかもしれませぬ」

ユングやエイミーとは、ずいぶん打解けたように見えたものの、相変わらずエラハイに対する警戒心を解こうとしなかった。

「頑固なのは、騎士の血統のせいなのか？」

俺は、『鎧』の胸をコツコツと叩きながら言った。

しかし、往路に比べて復路では、『鎧』の重量が幾分か軽くなっただよつた。

「防具は、契約者好みに成長する」

俺は、エラハイの言葉を思い出して、思わずニヤけてしまった。

一緒に困難に立ち向いオークの群れを蹴散らしたフェルミは、旅に出る前の『お堅いイメージ』が、少しだけ和らいだ気がする。

「どうして『鎧』には、重鎧や軽鎧の区別がないか知っているか？」

「そんなことは、冒険学の授業を聞いていれば、誰にでも解ることです」

「知っていたなら、なぜ俺に教えなかった。防具は、武器と違って適職の概念がないのだろう？」

「常識だからです……ふくよかな『鎧（女の子）』があれば、スレンダーな『鎧』もあります。もちろん、私のようにお堅い『鎧』も、軽い『鎧』もあります」

「そうなんだ……ならば、フェルミは、俺好みの『鎧』になつてよ」

「えっ？」

「だからさ、剣士の俺に釣り合いが取れる『鎧』になつてよ」

俺は、『鎧』の腰の部分を撫でながら言った。先ほどから『鎧』を色々と触っているのは、彼女の性感帯を発見するためだ。師匠のエラハイから「暇があったら撫で回せ、吐息が漏れた場所を重点的に責める」と、有難い教えを頂いたからだ。

「わ、私が、アルに釣り合いが取れる女になれですって！ アルが騎士になりなさい！ アルが私に合わせるべきです！」

「無茶言うなよ・・・契約者の刻印は、一人一個、生涯に一つなんだよ」

「無理を通せば道理が引つ込む、ですわ」

フェルミは、たまに難しい言葉を使って、俺を馬鹿にした。全く意味が解らん、どこの国の格言なんだろう？

「俺だって、フェルミに似合う剣士おこしになる努力は、惜しまないつもりだよ」

ゴブリンの矢が刺さった右脇腹を、手でそつと確認したが、傷口残っていなかった。

「あつ、そこ触らないでください」

「まだ痛むのかい？」

「ええ、そ、そうです」

あれ？ なんかフェルミが動揺しているぞ。

「そうか・・・擦ってやろうか？」

「け、けっこうですつ、痛いから触らないでと、お願いしています」

俺は、反対側の左脇腹を強く擦って見たが、フェルミの反応が今一つだった。

「左脇腹は、人間で言つと、どの部位なんだ？」

「肩甲骨から首かな？ 『鎧』の形状を上手く置換出来ないから、よく解らないわ」

左側に上半身ということとは、フェルミが『鎧』になると、胴体部に巻き付いている感じになる・・・らしい。

「左に上半身だと、右が下半身だよな」

俺は、頭の中に胴体に巻き付いているフェルミを想像すると、襟首を触った。

「ここが左肩？」

「うん、左肩を触られてる」

なるほど、だいたい予想が付いたぞ・・・右脇腹は、ムフフの場

所だ。

「むふふっ」

「ちよっと、やらしい笑い方は、よしなさい」

俺は、凄いことに気が付いたが、しばらく右脇腹を擦るのは、止めておこうと思った。

俺は、拳を力強く天に突き出した。

「今なら魔王すら一撃で倒せるぜ！」

「そのとおりです！」

フェルミは、意味も解らずに、俺を鼓舞してくれた。
もうすぐ俺の玩具にされるのに。

5・私が登場してません

街に戻った俺たちは、それぞれの両親に儀式成功の報告を兼ねて、エラハイとの旅支度のために分かれて行動していた。

神前契約式からは、いつもフェルミと行動していたので、一人で街中を歩く俺は解放感に浸っていた。

「おい、アルじゃないか？ 儀式が成功したんだってな」

長い前髪を後ろに結った男は、学校のクラスメイトだったカイン・He・フォンダ。彼のミドルネーム「He」は、ご存知のとおり英雄の刻印を表している。

彼は、この街でも数人しかいない英雄の刻印を持っており、学校での成績も優秀だった。英雄は、血統により誕生するのではなく、凡庸なる「Tr」の家系から突然変異的に誕生する。カインのような成績優秀にして、容姿端麗のイケメンが英雄となる……らしい。「どうも……」

俺は、軽く会釈すると、足早に立ち去ろうとした。

「アル、ちよつと待てよ。俺も来月16歳の誕生日を迎えたら、装備と契約して冒険者になるんだよ。経験者のお前には、色々話を聞きたいんだ」

カインは、俺の肩を掴んで呼び止めると、ガラナジュースを奢るから、フェルミとの話を聞かせると言われた。カインは、正義感も強く性格も悪くないし、仲の悪い友人でもなかったが、優等生タイプなので、話し相手になるのがメンドクサイ。

「えーと、旅支度の最中だから……少しだけだよ」

俺には、ニコニコと爽やかな笑顔を見せる、友人の誘いを断る勇気がなかった。カインに手を引かれるままに、中心街にあるカフェ『冒険の木』のウッドデッキに座らされた。『冒険の木』は、どん

な小さな村でも必ず一軒ある、全国展開しているカフェだ。

「冒険者の情報交換は、『冒険の木』がいいだろう？」

成人前のカインは、まだ未契約だから冒険者の真似事をして『冒険の木』で、情報交換を試みたかったのだろう。

「冒険学の落ちこぼれの俺が、成績優秀なカインに教えることなんてないよ」

「経験者のアルには、確認したいことがあるんだ・・・そ、そのフェルミとの契約だけど、痛くなかったのかい？」

「すごく痛かったよ、シヨンベンちびるくらい」

俺は、先に注射を済ませたら、後ろに並んだ奴に「死ぬほど痛いぞ」と報告するタイプだ。

「そうか、そんなに痛いのか・・・彼女は？」

「フェルミは、痛みには耐えられず、シヨンベン漏らしてたよ」

「あ、あの『オシリスの完全拒絶』と呼ばれる彼女が、失禁するほど痛いのかい。それは、相当な痛みと考えていいね・・・モーリは、耐えられるだろうか？」

カインは、口元に手を当てて青ざめた表情をしている。

優等生をからかうのは、すごく愉快だった。

「モーリ？ あのモーリ？」

カインが口走ったのは、超が十個以上付く馬鹿女のモーリ・Ar・バレキオスのことだろう。モーリは、奇抜なメイクと、腰にジャラジャラと付けたアクセサリー、口癖が『 だしい』『 かつたり』『 超ウケるんですけどお』『 やつてらんねー』など、明らかにカインに不釣り合いな女だ。

「僕の初契約相手は、モーリなんだよ・・・彼女に、告白されてし

「まっつてね」

「英雄の刻印は、全ての近接武器の適正と、あらゆる防具を使いこなせるのに、あんな軽い『鎧』が初契約の相手で良いの？」

ちなみに剣士の俺は、武器なら『剣』としか契約できない。英雄のカインなら、フェルミ級の装備と契約するべきだ。むしろ、モーリの（頭の）軽さは、俺の方がお似合いな気がする。

「モーリは、皆が考えるほど悪い装備じゃないと思う。すごく個人的だし、英雄の『鎧』に相応しいと思う」

「いいや思わない。あれは、契約の痛みに耐え切れず、すぐに逃げ出すタイプだ。」

「そうか、さぞかし個性的な『鎧』になるだろうね」

「アルも、そう思うかい？」

「個性的という点では、同意するよ」

「僕らの契約式には、ぜひ出席してくれたまえ」

カインは、俺の手を掴むと上下に大きく振った。

「あれ？ カイン様と・・・アルかよ（チツ）」

ド派手なピンクのシヨールを身に纏ったモーリは、俺を見て舌打ちをした。噂をすれば影。俺は、彼女から意味もなく嫌われている。

「やあ、ちょうど良かった。君たちも後学のために、彼から話を聞かないか？」

「君たち？」

ド派手なモーリに目を奪われて、彼女の後ろにいた二人に気が付かなかった。『盾』の刻印を持つマーシャ・Shi・ガンティは、モーリの子分みたいな女。もう一人の女は・・・俺の従姉妹のシャーロットだ・・・詳細は、のちほど。

「私も、カインさんの『盾』になりたいなあ」

マーシャは、カインの腕に抱き着いているモーリに、甘える声で言った。

「駄目よ、アンタみたいな軽薄女に、カイン様の『盾』が務まるわけないでしょう」

モーリは、子分のマーシャの願いを一喝した。

俺は「お前も十分軽いよ」と言いたかったが、ラブラブな二人に水を差すのは止めておく。恋は盲目。

「しかし、なんで『鎧』の女の子は、親分肌（リーダー格）が多いんだ？」

「防具の中核を担う『鎧』は、しっかり者も多いし、契約者の寵愛を受けやすいからね」

「装備の部位は、性格にも影響するの？」

「もちろんだよ。例えば、モーリやフェルミのような『鎧』は、しっかり者で、芯の強い性格だ」

「『籠手』は？」

俺は、エイミーのことを考えた。

「籠手は、契約者の手に近い装備だから、世話焼きで、とても気の利く性格らしいよ」

エイミーは、エラハイの身の回り（色々）の世話をしているようだ。

「だから攻撃を受けまくる『盾』マーシャは、マゾツ気が強いのか」

モーリに拒絶されたマーシャは、なぜかヘラヘラ笑っていた。彼女は、契約者に足蹴にされても、ヘラヘラ笑っているようで怖かった。「戦闘では、マーシャみたいな性格の『盾』なら、攻撃を受けても心が痛まないかもね」

「あら？ 試しにマーシャの顔面に蹴りを入れて、それでも笑っていたなら、カイン様の『盾』にしてあげようかしら（笑）」

黒い！ モーリの『鎧』は、きつと呪われた暗黒鎧に違いない！
そんな『鎧』との契約は、破棄した方が良さぞ。

「ボクは、失礼させてもらうよ・・・」

そう言って席を立ちあがったのは、俺の従姉妹シャーロット・ライダー。彼女の母親と、俺の母親が姉妹で、近所に住んでいる兄妹みたいな関係だ。

「まてまて、契約の話は、もう止めるからジュースくらい飲んでいけよ」

俺は、シャーロットの手を掴むと、強引に席に戻した。

彼女には、ミドルネームがない。

刻印を失った彼女の前で、契約の話で盛り上がったのは、俺たちが無神経だったと詫びるしかなかった。

シャーロットの母親は、俺の母親と同じ「剣」の刻印を持っており、父親が「魔法使い」という珍しい夫婦だ。魔法使いの武器は、「杖」なので、多くの魔法使いが結婚相手に「杖」を選ぶ。

そもそも魔法使いの刻印は、血統でしか誕生しないため絶対数が少なく、希少な魔法使いの血統を継いだ装備むすめというだけで珍重されている。

魔法使いの息子は、「魔法使い」か凡庸な「T r」の刻印だが、娘たちは、魔法効果が付加された装備になる。エイミーの「籠手」が青白く輝いて、吸血効果を持っているのは、彼女の父親が魔法使いだからだ。

シャーロットは、母親の胎内にいるときから、多くの契約者に契約を申し込まれるほど、注目を集めた逸材だった。彼女は、刻印さえあれば最高の装備おんなになれた。

俺が中等部を卒業する朝、シャーロットに「刻印が浮かび上がった」と嬉しい知らせがあり、同級生だった俺は、登校前に彼女に花束を届けた。女の子に刻印が現れたと聞いた同級生は、お祝いに花

束を贈って、契約を申し込む真似事をするのが、この地方の風習だった。

「ボクに、契約を申し込んでくれたのは、お前だけだ」

俺が花束を届けた日の夕方、落胆する叔母さんから「刻印が消えた」との報告があった。

シャーロットの刻印が消えた理由には、色々な噂があったが、結局は「乙女で無くなった」から、刻印が消えたのだ。彼女は、刻印が刻まれた日に、何者かに純潔を奪われた。

それが愛のある行為だったのか、暴漢に乱暴されたのか・・・真実は、闇の中へ消えて行った。

俺たちは、『冒険の木』を出ると、街の外壁の外にあるリット村に、マーシャを送り届けるため皆で移動していた。

街の外には、森と反対側に小さな集落が点在しており、マーシャの住んでいるリット村は、外壁の拡張工事のため作られた村だった。

「こんな明るいのに、護衛が必要なのか？」

「アルは、本当に何も知らないんだね。女の子たちが、どうして徒党を組んでいるのか、その理由を考えたことがあるかい？」

カインは、前を歩いている三人を指差した。

「女って生き物は、集団行動が好きなんだろう」

「・・・違うよ。彼女たちペンタグラムを有した女の子は、盗賊に狙われる可能性があるから、けして一人で行動しないように、幼い頃から躾けられているんだ」

「成人（16歳）前の女の子でも、物理的に契約するのは可能だ。

盗賊にモラルを求めるのは、期待できないもんな」

成人前の乙女と契約すれば、教会により非常に厳しい罰が下され

る。俺は、無意識に成人前のモーリとマーシャを装備として考えていなかった。それほど教会の教えは、俺たちのモラルを徹底していた。

「モーリは、僕より早く、あと二週間で成人する」

「悪い虫が付かないように、監視も兼ねた護衛つてやつだな」

「冒険者となったアルには、無料で護衛を頼んで申し訳ないけど、宜しく頼むよ」

護衛も冒険者の稼ぎらしいが、友人の頼みに金を要求するほど、俺は守銭奴ではない。

「従姉妹のシャーロットを護衛していると、考えればいいさ」

「シャーロットには、護衛が必要ないだろう？」

俺は、カインが刻印を失ったシャーロットを侮辱したと思ったが、彼女は、剣技のトップランカーだよ」と続けたので、その意味を正しく理解した。

「そうだな、シャーロットなら良い装備になっただろう」

「アルは、彼女が刻印を失った理由を知っているのかい？」

俺は、首を横に振ると、年頃の女の子が刻印を失うだけで、世間の好奇の目に晒されると思うと、やるせない気持ちになった。刻印を失っても、シャーロットの美しさは、色褪せるものじゃなかった。春風のようなシャーロットの後ろ姿には、フェルミと違った意味で、優雅さを感じさせる。フェルミの高貴な立ち姿が、悠久の騎士の血統によるものだとするれば、シャーロットの後ろ姿は、両親や周囲の愛情に支えられた、暖かな雰囲気を感じさせる。

「アル・・・少し様子がおかしくないか？」

カインは、俺の行く手を遮るように、前に立ち塞がった。

「そう言えば、鳥の鳴き声が聞こえない」

俺は、腰に装備していた、轟くCWWを眼前に構えた。

「お兄さんたち、その装備を置いて立ち去りな！」

俺は、本物の盗賊と生まれて初めて対峙した緊張感で、下腹に鈍い痛みを感じた。

盗賊たちは、男が四人、女が五人だが、たぶん軽装の女たちは、盗賊の装備に違いなかった。

「どうする・・・あの盗賊は、契約者だぞ」

俺は、前衛に立っているカインに言った。

「戦うしかないだろう・・・それともアルは、彼女たちを見捨てるつもりか？」

「いいや、俺もそこまで腰抜けじゃない。俺の轟くCWWでは、契約の装備に敵わない。モーリたちを逃がしたら、俺たちも逃げるぞ」
「英雄の僕が、敗走するのは忍びないが・・・」

カインは、小さく頷くと、彼女たちの前に飛び出した。

「お前たちは、まだ契約の装備を持っていない子供だろう？俺たち契約者と戦って、勝てると思っているのか」

盗賊の三人は、女の右掌にキスをする、『剣』を装備した。そして『剣』を装備した三人の後ろにいた、口髭を生やした盗賊は、両手に女を抱えて一人の右二の腕、もう一人の左鎖骨にキスをした。
「『斧』の刻印は、右二の腕に、『盾』の刻印は、左鎖骨にあるんだな」

俺は、妙なことに関心を示すと、モーリたちを後ろに隠すように前に出た。

「四対二では、分が悪いだろう・・・ボクも加勢するよ」

シャーロットは、護身用に持たされていた、秘剣スイートソードを鞘から抜いた。

「シャーロットくんは、刻印の力スキルを持っていないから、契約の武器と戦えるはずがない」

「ここは、俺とカインに任せて、モーリたちを街まで逃がしてくれ・

「もしも、余裕があるのなら、警備兵を呼んできてくれ！」

盗賊たちは、警備兵に助けを求めた俺を鼻で笑った。

「ボクは、剣技のトップランカーだぞ……スキルがなくても戦えるさ」

学校の剣技では、契約者のスキル発動を禁じられており、俺たちよりシャーロットの成績が上でも、実践で勝ると限らない。

「轟けCWW！ 風のように！」

ブオオオオ！ 俺は、先手必勝と考えて『剣技ハヤブサ』で盗賊を攻撃した。ちなみに叫んだのは、威嚇を兼ねた景気づけだ。

盗賊は、俺のハヤブサを剣でいなすと、俺の背中を剣の嶺^{みね}で叩きつけた。

「ガハっ！」

俺は、勢いよく前のめりになると、顔から地面に倒れ込んだ。やはり作られた『剣』では、契約の『剣』に敵うはずがなかった。

「アル、大丈夫か？」

カインは、俺の失態に腰が引けたようだ。

「だ、大丈夫……なわけない」

「喋れるなら、大丈夫だな」

「カイン様、お守りします」

モーリとマーシャは、逃げるどころかカインを守るように左右に並んでいた。

「俺が特攻している間に、逃げれば良かったのに……ガク」

盗賊どもの狙いは、未契約のモーリとマーシャなのだから、二人さえ逃げてくれれば、盗賊だって諦めてくれるのに……本当にモーリは、超が百個付く馬鹿女だ。

「カイン様、私たちと契約^{がったい}しましょう！」

モーリは、フェルミと同じように襟元を引き下げると、胸元のペ
ンタグラムを露わにした。馬鹿女のくせにオツパイの大きさは、フ
エルミに負けず劣らない。

さらに驚いたのは、マーシャが上着を全て肌蹴て、ほぼ裸の状態
で恍惚の表情でいることだ。『盾』の彼女がマゾっ娘との噂は、真
実だった。

「しかし・・・成人前の女の子との契約は、教会で禁止されている」
カインは、同級生の女の子二人の裸を前にして、顔を真っ赤にし
た。

「何を躊躇してるんだ！ このフニヤチン野郎！ 俺が二人と契約
するから、お前ら、ちよつとこい！」

「カイン様、こんな状況です。神罰は、下るはずがありません」

モーリは、半ば強引にカインの顔に胸を押し付けて、彼の初キス
を奪った。

「私にもしてください（ヘラヘラ）」
マーシャは、まだモーリとの契約の痛みに耐えているカインに、
飛びついて彼の口に鎖骨打ち当てた。

ガチンつと、カインの前歯に、マーシャの鎖骨が当る鈍い音がす
ると、彼は、前屈みに口を押えた。
なんだか気の毒な初契約である。

「い、痛い！ マジで痛すぎるから！」

ほぼ三人が同時に痛みを訴えると、カインの体が赤い炎に包まれ
て、ついに契約の『鎧』と『盾』を装備した、本物の英雄が誕生し
た。しかし前歯からの激しい出血のため、ちよつと残念な登場とな
った。

カインは、真紅の『鎧』と、淡いピンクの『盾』を装備していた。
「こ、これがモーリと、マーシャなのか・・・すごいフィット感だ」
モーリとマーシャの変態を着こなせるのは、カインくらいだろう。

カインは、上半身だけ見れば、立派な英雄に見える。

残念なのは、重厚な上半身に対して軽装な下半身と、前歯が血だらけなことくらいだ。

「カイン、こんな時だが、初契約おめでとう」

「アル、有難う！ これなら盗賊どもを蹴散らせるぞ！」

カインは、左手の『盾』を前に突き出して、剣を持つ右手を腰に当てた。

「あは〜ん、カイン様、そこは駄目ですう」

「モーリ、ここが駄目とは、どういう意味なんだい？」

カインは、右脇腹を擦っていたが、そこは、モーリのムフフな場所だ。初契約なのに、人目を気にせず『鎧』の右脇腹を擦るなんて、なんて大胆な男なんだ。さすが英雄としか、コメント出来ないわ。

6・ボクを助けてほしい

俺は、立ち上がって体制を整えると、剣を構えるシャーロットの傍まで駆け足で戻った。

「カインも、こっちにきて円陣を組もうぜ！」

「わ、分った・・・」

盗賊共の親玉は、たぶん『斧』と『盾』を装備した口髭の男だろう。

俺は、契約の装備で身を固めたカインに、口髭の対峙するように指示した。

「どうします兄貴、装備が契約しちゃいましたよ」

盗賊の一人は、口髭の男を兄貴と呼んで、戦闘を続行するのか確認していた。彼らは、転売目的のため未契約の装備が欲しかったのだろう。一度でも契約してしまった装備は、既に能力値が明らかで、買値が半減してしまうのだ。

未契約の装備の価値が落ちるのは、食玩の中身が解つてしまえば、需要が半減するのと同じ理由で、何の特殊効果がないモーリヤマーシャを、高い金を出して買う馬鹿はいない。

「それに契約中の装備を奪うには、契約者を殺すわけにもいかない・・・これでは、あまり美味い商売じゃないな」

「俺たちが怪我でもしたら、手間の方が大きいはず。こいつらの装備は、諦めますか？」

盗賊たちは、何やら話し合っており、このまま見逃してもらえそうなのな雰囲気だ。

口髭の男は、顎を撫でながらシャーロットを見ている。

「おい、その勇ましい娘！」

シャーロットは、脇を引き締めて秘剣スイートソードを強く握っ

た。

「ボクのことか？」

「お前の契約者は、その坊主か？」

口髭の男は、『斧』の先を俺の方に向けて言った。

「ボクは、契約の刻印を失っている・・・」

「ほお、その腰付きで男を知っているとは、思えないな（ニヤリ）

」

口髭の男は、引き締まったシャーロットの腰を眺めると、ペロリと舌を出して笑った。

「計画変更だ！ あの娘を娼婦館に売り飛ばすぞ！」

盗賊共は、口髭の一言で再び剣を構え直した。

「戦うよりほか、道が無さそうだな」

カインは、まだ痛み of 引かない胸を抑えながら、盗賊共の一人に切りかかった。

盗賊は、飛び退くとカインの剣が空を切った。

実践では、場数を踏んでいる盗賊に分があった。

しかし英雄のカインは、潜在能力で遙かに盗賊に勝っていた。

盗賊の『剣』を『盾』でいなすと、二の太刀で足元をすくって倒し、剣技ジャックナイフを発動して、盗賊の喉元に剣を突き立てた。

剣技ジャックナイフは、剣技ハヤブサの次に覚える剣士のスキルで、切先の直線上にある敵を数メートルに渡って貫くのだ。ちなみに俺も使える。

「ぐふっ！」

喉元を貫かれた盗賊は、首を手で抑えても止らぬ血量けつりょうに、死を覚悟して装備を解除した。

倒れ行く盗賊と右手を繋いで解除された『剣』の女は、「死にたくない！」と懇願しながら、ほかの盗賊に右掌のキスを求めた。

「契約者の『死』は、装備の『死』か・・・これは、辛い現実だな」

「カイン、あまり気にするなよ」

「盗賊は、俺たち契約者の面汚しだ。このまま戦って、皆殺しにしてやるよ」

俺は、初めての人殺にカインが動揺していると思ったが、意外なほど冷静でいることに、多少の驚きを感じた。

俺が森でオークを退治したとき、フェルミが暴走気味だったが、カインの『鎧』や『盾』は、今の戦闘で快感を覚えているのではないだろうか？ やはり作られた装備では、契約の装備と比べものにならないと思った。

「あああああ！」

女の悲痛な叫び声が聞えると、死んだ盗賊の契約の装備だった女は、契約を解除した盗賊の新たな『剣』となっていた。

「おいおい、二刀流も可能なのかよ・・・奥が深いな」

仲間の一人を失った口髭の男は、二刀流の盗賊と、もう一人の盗賊に、カインと戦うことを命じて、自分は、俺とシャーロットの方に向き直った。

「死んだ子分の稼ぎは、娘の体で払ってもらおうか」

口髭の男は、斧に舌を這わせると、大きな風切音とともに、俺とシャーロットの間に振り下ろした。

「モーリ、アーシャ・・・二人とも大丈夫かい」

二刀流となった盗賊の連続攻撃を『盾』で防いでいたカインは、二人を気遣って話しかけた。

「カインさん・・・アーシャは、悪い子です。もつと前に突き出してえ、叩いて・・・もつと叩いてほしいですう」

マーシャは、完全にイカれた『盾』だ。『盾』が全員マーシャみ

たいな性格だと思われたら、明日からサウスファイア王国の『盾』の刻印を持つ女性たちは、左鎖骨の刻印を隠して生きることになるだろう。

「ああ、どうしまししょうかインさん・・・マーシャ、もう耐えられそうにありません・・・イキそうれすう・・・ああ、どうしましよう」

「マーシャ！ イクって壊れるってことかい？ もう少し耐えておくれ！ 僕のマーシャ、イク（死ぬ）ときは、一緒に逝こうおおお！」

カインは、『盾』を大きく上下に振ると、体技ニードルタツクルを発動して、二刀流の盗賊の懐に飛び込んだ。体技ニードルタツクルは、『盾』に意識を集中して極限まで硬度を高めると、相手の懐に侵入して体制を突き崩す体術だ。

ドスつと鈍い音がすると、カインの『盾』は、二刀流の盗賊の鳩尾おちに減り込んだ。

「はあ〜んっ！ アーシャ、イキますうううう！」

マーシャは、全身の力を込めて耐え忍んでいたが、カインの力強いタツクルで、体の奥に溜め込んだ何かを、二刀流の盗賊目掛けて放出した。ロボットアニメの主人公のような、叫び声を残して。

「こ、これは・・・『盾』の特殊効果『耐忍ぶ』だ！」

マーシャは、初めての戦闘で特殊効果を物にした。

彼女の生まれ持った才能なのか？

カインがテクニシャンだったのか？

とにかく初契約、初戦闘で、見事にマーシャの体を開発したのは、さすが英雄としか言えなかった。

マーシャが発動した特殊効果『耐忍ぶ』は、英雄スキルの体技ニードルタツクルとの相性が良く、相乗効果として、体技ニードルタツクルの威力が百倍になった。

単なるタツクルだと思つて避けなかつた二刀流の盜賊は、『盾』の特殊効果で鳩尾から真つ二つになつた。窮鼠猫を噛む。

実戦経験のないカインを見縊みくひつた盜賊は、上半身をカインに預けて、下半身が両膝を付くように崩れ落ちた。

滴り落ちる生温い血は、真紅の『鎧』をテラテラと輝かせた。

「カイン様、血でヌルヌルしてきもち・・・いわ・・・」

「モーリ、気持ち悪いのかい？」

「カイン様、そこがヌルヌルして気持ち良いわ・・・もっとヌルヌルしたいですう」

また、このパターンかよと、俺ならツッコむところだが、『鎧』が血を好むのは、どうやら基本的なこと・・・らしい。

「ああ、そ、そうなのか・・・モーリ、あと一人盜賊がいるから、タップリと注ぎ込んであげよう」

カインは、初めての戦闘、初めての契約にも関わらず、さすが学校での成績優秀者だ。俺なんかよりも、十分に契約の装備を使いこなしている。優等生のくせに、女たらしの才能まで秀でているとは、なんとも羨ましい男だ。

「最初の盜賊、二刀流の盜賊、これで僕は、四人の人間を殺したことになる・・・もう、何も感じないよ」

カインは、上目使いに最後の盜賊を睨み付けると、呪いの言葉のように言った。

「お、お前の契約の装備は、武器じゃなくつて、単なる防具じゃないか・・・俺の『剣』には、特殊効果『毒』が付加されているんだぞ」

「それが、どうしたんだ？」

「ほんの少しでも、傷が付けば、そこから腐つて行くんだ・・・恐ろしいだろっ」

「盜賊に相応しい、未婚の毒女というわけだ・・・あははは」

カインは、両手を下ににして、いつでも打ち込んで来いと言った。盗賊が迫力負けして睨み合いになったのは、言うまでもなかった。

口髭の男は、シャーロットを軽んじているのか、俺だけに『斧』に向けていた。

「俺が口髭を引き付けるからシャーロットは、秘剣スイートソードの『魅惑』で攻撃しろ」

彼女の携えている秘剣は、ウチの鍛冶屋が彼女のために作った護身用の剣で、『魅惑』の特殊効果が付加されている。

俺の特殊効果のない轟くCWWよりも、少しだけ上等な剣だ。

「『魅惑』で視界を奪えるのは、ほんの数秒だし、ガッツな男には、幻術系の魔法耐性がある・・・私が困になって、アルの剣技スキルで攻撃した方が良いだろう？」

「お前は、そうやって意地を張るところが、悪い所だ」

「あの男は、ボクを娼婦にするつもりだ。ならば、商品を傷付けるはずがない」

「怖くないのか？」

と、俺が言うとシャーロットは、コクリと頷いた。彼女の言うとおり、娼婦館に売り飛ばすならば、傷付けないように配慮するかもしれない。口髭が体勢を崩してくれば、俺の剣技スキルで倒せる可能性は大きい。

「ボクの『魅惑』で視界を奪っても、逃げ回るだけなら、体力を消費するだけで意味がないぞ」

「分かったよ・・・シャーロットの作戦で行こう」

口髭の男は、『斧』を背中まで下げると、同時に『盾』を前に構えた。

『斧』を使ったスキルを発動する気だろう。

一刻の猶予もないと悟ったシャーロットは、狙いもそこそこに飛

び出した。

「やはり、お前は、素晴らしい娘だあ」

口髭の男は、スキル発動のポーズを囮に、シャーロットが飛び込んで待っているのを待っていたのだ。男は、彼女の一撃を『盾』で防ぐと、秘剣スイートソードの柄つかごと右手を捻りあげた。

「スキル発動は、見せ掛けだったのか」

「経験不足は、勇み足を招くぞ（笑）」

口髭の男は、シャーロットを釣り上げた魚のように、高く持ち上げた。

「い、痛ひいいいい！」

自分の体重を右手だけで支えていたシャーロットは、腕が抜けるような痛みに、思わず悲鳴をあげた。普段の気丈の彼女からは、想像が出来ないほど情けない悲鳴だ。

「シャーロットを離せ！ ゲス野郎！」

俺は、轟くCWの切先を口髭の男に向けると、剣技ジャックナイフの狙いを定めた。

「小僧、そんな震える切先が、俺様に当ると思っているのか？」

「どうだろうな・・・試してみるか」

俺の剣技ジャックナイフの命中率は、十発中二発当たれば大成功だった。下手な鉄砲数撃ちや当たる。

だが、確実に一発で仕留めなければ、俺に『斧』を防ぐの実力はない。とりあえずハツタリかまして、彼女を取り戻すチャンスを待つ。

「お前は、この娘の恋人かあ？」

「・・・いいや、違うぞ。だが、俺の大切な人だ」

「ボクが、アルの大切な人？」

シャーロットは、右手が抜けないように、右の脇を左手で抑えていた。

「この娘は、お前の契約の装備でもない、恋人でもない」

「そのとおりだ・・・だが、俺は、彼女に契約を申し込んでいるよ」

「お前は、この娘にフラれたのか？」

俺は、中等部を卒業した日、たった一日だけ彼女に刻印が現れた日、花束を持って契約を申し込んでいる。

あのときの気持ちは、忘れていない。

あの告白は、真似事^{まねごと}じゃなかった。

「俺は、シャーロットにフラれたのだろう。俺が告白した日、彼女は純潔を失っている」

「アル・・・違うんだ」

口髭の男は、情けない俺の話しに、涙を流して大笑いした。

「面白い小僧だ！ 娘に告白した日に、ほかの男に寝取られたとは、お前も哀れな男だ。本当は、お前を裏切った、この娘が憎いんだらう？」

口髭の男は、もう抵抗すらしなくなってシャーロットを俺の方に向けた。男は、彼女の左手も掴むと、左右に大きく引つ張った。彼女は、十字架に張り付けられた格好で、俺のことは見ながら涙を流していた。

「ごめん・・・ボクは、アルの気持ちに気付いてやれなかった」

「小僧！ お前の飛び出すナイフ（剣技ジャックナイフ）を放ってみろ」

シャーロットの右脇から顔を覗かせた口髭の男は、俺の命中率で貫くのが不可能だ。

「アル、ボクのごときは、構わないでくれ・・・ボクをゲス野郎ごと貫けば良い・・・」

「アホか！ シャーロットは、強い娘^こだろう」

俺は、轟くCWWを口髭の足元に投げ付けると、両手を挙げて降参した。

「戦わずして敗走とは、契約者の名折れだな」

「俺は、情けない剣士だよ」

口髭の男は、彼女を娼婦館に転売するなら、彼女が殺されるより数倍マシな決断だ。俺は、彼女を失いたくない、その一心で悪党の情けに縋ろうとしている。

「・・・うん？」

シャーロットの右脇から覗いていた口髭の男は、そこに何かを見つけた。

「俺は、もう降参したんだから、彼女を連れて行けばいいだろう・・・」

俺は、カインと離れて戦ったことを後悔していた。もしかしたら、彼に加勢が得られるのではないかと、山裾に消えた英雄の到着に期待していた。

「お前ら、よくも俺を騙したな。この娘には、ペンタグラムが有るじゃないかあ」

と、口髭の男が言うと、シャーロットの軽装備を右脇の下まで引きちぎった。

「なんでシャーロットに未契約の刻印が・・・」

シャーロットの右脇の下には、無印のペンタグラムが浮かび上がっていた。

「右脇の下の刻印なんて、俺の長い盗賊稼業でも初めて見るぞ。この契約の装備は、さぞかし高い値で売れるだろうよ（笑）」

口髭の男がニヤニヤと、シャーロットのペンタグラムに顔を寄せて笑っていると、彼女はカッと目を見開いて、男の顔を蹴り上げた。ためき寝入り。

男の簸るんだ隙を付いたシャーロットは、俺の足元まで転がると、俺を庇うように両手を広げた。

「シャーロット・・・その刻印は？」

「ボクは、希少性の高い魔法使いの娘だよ。装備の契約が可能になれば、良からぬ輩に襲われる、危険があるからね」

シャーロットの刻印が浮かび上がった日、大勢の契約者が契約を申し込んできた。彼女の両親が対応に苦慮した結果、乙女を失ったことにした。それに彼女のペンタグラムは、人目に付かない右脇の下で、隠し通すのが容易かった。

結果的に彼女は、成人前に乙女を失った女だと、不名誉な噂に悩まされることになった。

「そうだったのか・・・ごめんよ」

俺は、シャーロットの清らかな心を疑っていた。

本当に大馬鹿野郎だ。

「ぐぐつ、小娘が、俺を足蹴にしやがったなあ・・・」

口髭の男は、顔面の痛みに堪えながら、今度は本当に『斧』のスキルを繰り出すつもりだ。

「アル、ボクを助けてほしい」

助けたいのは山々だが、俺の轟くCWWは、口髭の男の足元に投げ捨ててしまった。

「シャーロットの秘剣を貸してくれ、今なら剣技ジャックナイフも当たる気がする」

あくまで気がするだけで、当たる保証はないのだが。

シャーロットは、右手を俺の肩に回すと、鼻先にペンタグラムを近付けた。

「少し汗臭いのは、我慢してくれよ・・・あの日、ボクに直接契約を申し込んだのは、アルだけだ」

彼女の右脇の下は、汗の匂いなんてしなかった。

「いいのか・・・シャーロットなら、俺より強い契約者と、契約出来るだろう」

「あの契約申し込みが、まだ有効ならば、今ここで契約を躲そう」

シャーロットは、既に成人しており、ここで契約を交わすことに道義的な問題はない！

「シャーロット、いつまでも大事にするよ」

俺は、肩に手を回した彼女を斜向はすむかに抱えると、彼女の全てを吸い込むように、右脇の下を強く唇で吸った。

「ああああ、アル、ボクは、最高に幸せだよ！」

シャーロットは、恥かしい台詞とともに、契約の装備に姿を変えた。

右脇の下の痛みは、想像以上の痛みで、右の手の感覚を奪っていた。

「い、痛い、こ、これでは、せつかくの装備が扱えないだろう・・・くうっ！」

森での儀式で貰えるメダルは、契約者の痛みを緩和する、アレが必要な理由が理解できた。

刻印の輝きが落ち着くと、俺の右手には、四方八方に剣先が広がった『剣(?)』が握られていた。

薄紅色に輝く『剣』は、まるで薔薇の花束のようだった。

「アル、ボクに通り名を付けてほしい・・・ボクに相応しい名前を」
「『踊り狂う魔法剣ブラッディローズ』爆誕！」

薔薇のような姿形と、彼女の血統により魔法系の特殊効果に期待して、彼女の通り名を命名した。

彼女は、徐々に中央に集束すると、刃先の細い両刃の『剣』になった。

「アル、ボクは・・・美しいか」

シャーロットのように洗練された美しい『剣』は、俺の力量を引き上げてくれるに違いなかった。

7・ボクが決めたことだ

口髭の男は、俺たちの契約の見届け人となったことを地団駄を踏んで悔しがった。

「魔法使いの娘だったとは、くそガキ共めえ！」

薄紅色に輝く『剣』を見た男は、シャーロットが魔法系の特殊効果を付加した契約の装備だと、気が付いていたようだ。

「下賤のお前にも、シャーロットの魅力が理解できるようだな」

俺は、鋭く尖った『剣』を真一文字に構えると、剣技ハヤブサを中空に繰り出して、ブオオオオ！と風音で威嚇した。剣技スキルを無駄撃ちしたのは、彼女を娼婦にする企みも、契約の装備として奪うことも叶わなくなった男に、これ以上の戦いを諦めされるためだ。

「こうなったら、お前の右手を根元から切り落として、『魔法剣』だけでも持ち帰ってやるわあ！」

俺の好意を無にするように口髭の男は、盗賊の親分らしい台詞で対抗してきた。

「普通の『剣』とは、違っていると思ったが・・・彼女は『魔法剣』なのか？」

「たださえ希少性の高い魔法使いの娘、中でも武器が生まれる確率は、百人に一人と言われている。その武器でさえ、魔法使いの『杖』ばかりで、『剣』が誕生したなど噂にも聞いたこともない・・・小僧は、殺さず半殺し、娘を俺様の契約の武器にしてくれる」

男は、ご丁寧にシャーロットの凄さ全て教えてくれた。

「シャーロットは、とても貴重な『魔法剣』らしいぞ」

「駄目だよ・・・ボクは、初めてなんだから、話しかけられたら集中できない・・・」

シャーロットが湧き上がる興奮に身を震わせると、『魔法剣』の

切先がフルフルと、二本、三本、四方に広がってしまった。まるで手品師のステッキの先に、赤い花が咲いたみたいだ。

「わ、わ、分った、頼むから、じっとしてくれよ。肩の力を抜いて、切先を閉じておくれ」

「う、うん、分かった・・・ボク、頑張るよ・・・うん！ うん！」

シャーロットは、力いっぱい足を踏ん張るように、低い唸り声をあげた。

「違う、違うよ、シャーロット、力を抜いて、リラックスするんだ」

「ボク、初めてだから、かんじやうの・・・」

泣くなシャーロット、やれば出来る娘なんだよ。

誰にだって初めての経験は、必ずあるんだからね。

「その『魔法剣』は、おぼこ娘のようだな（ニヤリ）」

「ボ、ボクが、世間知らずだって言いたいのか・・・近所のおばちゃんからは、ヤリマンのシャーロットと噂されてきたんだぞ！」

おい、お前のヤリマン伝説は、てめーの両親が広めた噂話じゃないのか？ どうも装備中の彼女たちは、若干思考能力が落ちるようだ。

「まてまて、今は、俺の剣技スキルを発動するため、リラックスしてくれよ。このままだと、俺の『気』を挿入できないぞ」

俺の手に握られた『魔法剣』は、ある意味で疾風シルフィーネ零式よりも、じゃじゃ馬だと思った。

「アル・・・もう落ち着いたから、早く挿入してくれ・・・もちろん『気』の方だぞ」

「あ、当たり前だろ！」

シャーロットは、何を期待していたのだろうか？

いや、俺が期待していたのかもしれないが。

シャーロットは、落ち着いたと言っていたが、剣先は相変わらずフルフルと幾重にも分かれていた。

「小僧たち、そろそろ右手にサヨナラを告げな！」

口髭の男は、高く構えた『斧』を、俺の右肩目掛けて振り落とそうとしていた。

「い、いかん・・・先手必勝！ 飛び出せ！ 剣技ジャックナイフ！」

もちろん掛け声は、景気付けだが、ハンマー投げの選手が投擲後に、無意味に「あああああつあつあつ！」と叫ぶのと同じで、発動時に叫ぶと命中率が上がる気がする。

シャーロットは、不意を突かれて『気』を挿入されて「ううっ！

」と、小さな呻き声で苦痛に似た何かを訴えた。

「な、何だと、これが剣技ジャックナイフだとお！」

振るえる『魔法剣』の切先から繰り出された剣技は、無数の光の矢となつて男の体を蜂の巣にした。

「これなら命中率とか、ぜんぜん関係ないじゃん（笑）」

ただ一本、一本の威力が分散されていたため、男に致命傷を与えるに至らなかった。

「見たか！『魔法剣』の隠し技、剣技インクリースナイフ（Increase Knife）の力を！」

全身から血が噴出した男は、振り上げた『斧』力なく下した。

「す、すごいぞ・・・本人のボクでさえ、知らなかった技だ。ボクの知らないボクを、アルが開発してくれる」

そりゃそうだ、いま俺が命名した。

忘れないうちに、すぐに資料を更新しておこう。

「おのれ・・・」

さすがの奇襲攻撃に、男も後退りして距離をとった。

「おい、オッサンも血達磨じゃないか。ここは、痛み分けにしないか？」

俺は、敵の敗走を願って一歩引き下がった。

「アル、お願いがあるんだ」

「どうしたシャーロット？ もうすぐオッサンが「覚えておけよ！」と、捨て台詞を吐いてミッションコンプリートだぞ？」

俺は、もう一度「Mission Complete!」と、親指を突き立てて流暢な発音で言った。

「そんなの嫌だ！ ボクは、まだ誰も切っていない・・・こんな状態で、装備解除なんてしたら、ボクは、アルのこと嫌いになるぞ」

「ええ〜っ」

「イヤイヤ！ 言うこと聞かないと、もう好きなとき『魔法剣』してやらないぞ！」

「そんなこと言っても・・・俺だって、仕事（旅支度）で疲れてるんだよ」

「イヤイヤ！ あのオッサンを肉塊にしよお、ボクの一生のお願いだよ・・・」

シャーロットは、いつからオネダリさんになったのか？

俺は、彼女に甘えた声を聞いたら、色んなところが元気になった。

「シャーロット、もう一回だけだぞ」

「アル、大好きよ・・・」

俺は、『魔法剣』の鏢つばに親指をあてがうと、焦らすように撫でた。「いいかい、シャーロット・・・今度は、上手く力を抜けよ」

親指が、鏢の突起した部分に触れると、彼女の息遣いが荒くなってきた。

その突起した部分に、爪が当たたらぬよう慎重に指の腹で確かめながら、前後左右に刺激した。

「あぁっ・・・アル、そこ、そこが熱いよ・・・」

「いいかい、シャーロット・・・イクときは、一瞬だよ。タイミン
グを逃さないでくれ」

俺は、また新たな『魔法剣』の剣技を思い付いて、それを試そ
うと考えた。

先ほどの剣技インクリースナイフのときも感じたが、もしかする
と本当に『魔法剣』の所有者のみが発動出来る剣技があるのかもし
れない。彼女との契約で、その隠されたスキル（契約の力）を手に
しているのではないか？

相手との距離は、攻撃の間合いに入っていた。

「あつ、あつ、あつ・・・」

シャーロットの吐息は、感覚が早まり、そして一定のリズムを刻
んでいる。

あとは、俺が剣技を放つタイミングを間違えなければ、必ずイケ
るはずだ。

俺は、彼女の興奮を損なわぬように、そつと『魔法剣』をヘソの
高さで正面に構えた。

そこは、シャーロットが膝を着かずに、四つん這いで尻を挙げて
いる高さだ。

「そ、そんな、ボク初めてなのに、バックから突くの？ あつ、あ
あ・・・」

彼女は、吐息さえ噛み殺した。

「そろそろイキたいだろうが、もう少し我慢しておくれ」

俺は『魔法剣』に、お留守になっていた左手を添えると、両手で
彼女の柄つかを持ち上げた。

「『魔法剣』の隠し技・・・」

口髭の男は、俺の殺気に身を震わせている。

もう覚悟を決めたのだろう、逃げる気配すら見えない。

「リターンズオータア（Returns altar）！」

「あは~~~~~んっ」

俺は『魔法剣』を正面に構えた状態で走り出すと、地表の起伏に関係なく、男の真正面まで辿り着いた。あとは、シャーロットを深く突き刺すだけだ。

「ぐはあっ！」

蹲る男の呻き声は、確かに聞こえたものの、切先が肉を切り裂く手応えがなかった。

「アル・・・盗賊と契約している女たちは、近くの村からの盗品だった」

カインは、切り落とした盗賊の右手と、一人の女の子を連れて戻っていた。

「まさか、そんな馬鹿な・・・盗品だった？」

俺の剣技リターンズオーターアは、アーシャの発動した『耐忍ぶ』で防がれていた。

俺たちは、装備解除すると、口髭の男を縛り上げて拷問に近い強迫で、盗品を装備解除させた。

「あ、有難うございます・・・」

口髭の装備たちは、俺とカインに怯えた顔で、頭を下げると震えながら座り込んだ。

モーリとマーシャは、少し離れた場所に生き残っている三人の装備を連れて行き、そこで水筒から熱いお茶を飲ませていた。

「ボクは、同じ契約の装備として、彼女たちが強姦に等しい扱いを受けたと知っている。出来ればアルとカインで、彼女たちを解放してやってくれないか？」

シャーロットは、盗品の女たちの刻印にキスをして、盗賊たちが

らの解放を願っていた。

俺たち契約者のキスで彼女たちを解放することは、容易かったものの、俺の気持ちは混乱していた。

カインは、力いっぱい岩に拳を叩き付けると、グローブが血で滲んだ。

「僕は、彼女たちの友人を二人殺したんだぞ！」

一人目の盗賊に装備解除された女は、命乞いをしながら次の盗賊の二刀流になった。

その二人目の盗賊を真つ二つにして、引き裂いたのもカインだった。

「俺たちは、非がないと思うぜ」

「ち、違うんだ・・・一人目の盗賊から装備解除された女は、僕に命乞いをしていたんだ・・・僕が気付いてさえいれば、あるとき僕が解放してやった・・・」

カインは、盗賊からもぎ取った右手を掲げた。

「こいつは、出血多量で、もう長く持たないだろう」

契約者の肉体から離れた刻印に、契約の装備を繋ぎ止める力は無い。

だが、契約自体が解除された訳ではないので、盗賊が死ねば女の一人が死ぬことになる。

カインは、盗賊の薄汚れた右掌にキスをした。

盗賊との契約から解放された女は、自由の身となった。

「有難うカイン、ボクからも感謝するよ」

シャーロットは、女たちのところへ報告に行った。

カインと二人で残された俺は、涙を流す友人の肩を抱いた。

「悪いのは、盗賊だろう？ お前は、モーリたちを守ったじゃないか」

「アルは、冒険者となって、こんな過酷な戦いをしているのか？」

俺は、首を横に振って、こんな悲劇があるものと慰めた。

俺たちは、街に引き返すと、口髭を生やした盗賊と盗品を教会に引き渡した。

カインは、未成年者モーリとマーシャとの契約、教会に許可なく契約の装備を解放した罰として、成人後三カ月間の儀式『初夜』参加禁止と、それまで数か月の教会清掃のボランティアを命じられた。「なんで？　なんでだよ！　悪いのは盗賊だろう！」

俺は、冒険者だったので盗賊討伐も、成人していたシャーロットとの契約も、全て御咎おとがめなしだった。それどころか、盗賊討伐及び盗品回収の報奨金として二百万Gを渡された。

「アルは、大ばか者です。私を連れていけば、そんな盗賊なんて屁でもありません」

俺は、実家から帰ってきたフェルミに「バカ」呼ばわりされると、横面を叩いてやるうかと手を振り上げた。

「ここでフェルミを殴ったら、本当の大バカ者だぞ」

その手をシャーロットが抑えていなければ、フェルミとの関係が終わっていただろう。

「俺が馬鹿なら教会の連中は、なんなんだ？　神様か？」

「よく聞くのです。教会は、カインを癒そうと罰を与えたのです」
フェルミは、俺の目の前で人差し指を真っ直ぐに立てながら言った。

「カインを癒すだと・・・」

「このまま何の罰もないまま、カインを帰してしまつては、彼の罪悪感が消えることなく、後々の冒険者としての生き方を狂わせていたでしょう。教会清掃のボランティアを通して、彼の心を癒すこと

は、教会の赦しでもあるのです・・・難しい話でしょうか？」

フェルミは、学校の先生みたいに俺の頭を撫でてくれた。

「ボクは、カインのことも心配だが、教会から突き放されたアルの方が、もっと心配だぞ」

シャーロットは、俺の両肩をグツと力強く握った。

二人とも慰めているつもりだろうか？

気分が落ち込んでいるときは、人肌が有難い。

「アルは、冒険者だから教会の助けを必要としてはいけません。教会を助けるのが、冒険者なのです・・・ところで」

フェルミは、俺の目をジッと見つめて、

「なぜシャーロットは、私たちの部屋に上り込んでいるのでしょうか？」

俺は、色々あってシャーロットとの契約を、ちゃんと説明していなかった。

フェルミは、何か怪しいぞと前髪をピコピコと揺らしながら睨んでいる。

「そ、そうだ・・・エラハイと合流する前に、もう一度だけ『初夜』に参加してみないか？ 力試してやつでさあ・・・ついでに剣技の修行を兼ねて、シャーロットも森に行ってみたってさ・・・」

俺は、シャーロットとの関係を伏せて、メダルを手に入れたかった。

シャーロットは、両手を挙げて、知らないよのポーズで誤魔化した。

「シャーロットから契約者の匂いがします。それにアルからは、装備の匂いがします。ヤツたなら、ヤツたと報告するのが、筋つものではありませんか？ 私は、隠し事と嘘が大嫌いです」

シャーロットは、顔を赤くして右手を挙げると、右脇の下のペンタグラムの匂いを嗅いでいた。

「そ、そうかな・・・アルの匂いなんて、べつにしないよね？」
「な、なぜ俺に同意を求めるんだ！ それにお前は、乙女を失っているはずなのに、フェルミに刻印を見せたらバレルだろが！」「うん、しない」とか嘘に嘘重ねたら、フェルミに前から後ろから殺やられるぞ？」

「私は、アルの匂いとは言っていませんけど？ まだ、神前契約式から一カ月しか経っていないのに、もう愛人を囲いやがったですね（笑・・・ってない）」

俺は、今回の事件で致し方なくシャーロットと契約したこと、彼女の武器としての性能がずば抜けて優秀なこと、俺のお気に入りへの装備が『鎧』であり、毎晩『鎧』を装備したまま寝たいと力説した。「解りました、これから毎晩『鎧』を着て寝てもらいます」

「は、はい、毎晩一緒に寝ましょうね」
「それからシャーロットは、すぐに教会で、アルとの契約を解放してもらいなさい」

「なんで、アルとの契約を解放しなきゃいけないんだ？ アルとの契約は、ボクが決めたことだ」

「今回の契約は、事故のようなものだから、犬にかまれたと思って解放しなさい」

「あの契約は、事故だったのかい？」

シャーロットは、潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「えーと、そうですね・・・事故のようなものと言えば、まあ事故のような気がします」

「私も鬼ではありませんから、二人とも初犯なら一回は、水に流して許しましょう」

フェルミは、俺とシャーロットがヤツたことを怒っている。

「ボクは、アルの『魔法剣』だ！ フェルミより価値があるんだ！」

「装備おんなの価値は、どれだけ特赦効果を沢山持っているかです！」

シャーロットは、ニヤリと笑った。

「アルは、一回の戦闘で二回（個）も新しいスキルを開発してくれたぞ。フェルミは、何回くらい新しいスキルを開発された？」

彼女の「二回も」の言葉に、さすがのフェルミも「〇回」とは、言い返せなかった。

剣士と騎士の『鎧』では、体の相性が悪いのかもしれない。

フェルミは、目に涙を貯めながら机に登ると、堂々と立ち上がって仁王立ちした。

「アルの二号さんとして認めてあげますが、アルと一緒に寝るのは却下です。アルの腕枕は、第一夫人の私のものです！」

「二号さんでも、三号さんでも、一緒に旅ができるのならボクは、どうでも構わないぞ」

第一夫人とか、二号さんって・・・俺たち結婚してないじゃん？

こんな調子で装備コンプリート出来るのかよ。

俺の武器と装備は、組合せが最悪な気がする。

7・ボクが決めたことだ（後書き）

契約の装備が、新たなスキルを得たとき
☐ で表示しています。

8 ・ ボクが恥ずかしいだろう

シャーロットとの契約は、突発的なことだったので、彼女のご両親への報告が後先になってしまった。本来ならば、契約前に相手方のご両親に、挨拶するのが常識人というものだ。

「俺は、叔母さんに何て言えばいいんだろう」

「ボクの母さんは、鍛冶屋のライダー家から、剣士の刻印が誕生したことを自慢していたぞ」

俺は、シャーロットと二人で彼女の実家に、挨拶に行くことになった。ウチの両親からは、勝手に契約の装備を増やしたことに、勘当される勢いで怒鳴られたものの、盗賊に襲われた状況を説明して、どうにか理解を得られた。

「シャーロットのお母さんは、俺のお袋に似て勝ち気な性格だからな・・・箱入り娘を傷物にした俺としては、どんな仕打ちが待っているのか、想像するだけで恐ろしいよ」

と、俺が言うとシャーロットは、高笑いをしながら背中を叩いた。「アルとの契約は、ボクからお願ひしたことだ。そのことは、ボクから両親に説明済みだよ」

俺たちは、街の中央通りから石畳が続く路地に入った。

彼女の実家を訪ねるのに、手土産を買うためだ。

この路地には、小さな商店が道いっぱい籠を並べており、歩くにも困難な場所だ。しかし中央通りの観光客相手の高級店に比べて、安くて上質な食料品などが売られており、手土産にピッタリなケーキ屋だって数多く出店している。

「果物は、けっこう値段が高いんだな」

俺の目に留まったのは、店先の籠に果物を積み上げたフルーツパラー『愛社堂』だった。

「ボクは、ブドウが好きなんだけど、ブドウって六千Gもするんだね・・・おい、メロンなんて二万五千Gもするぞ」

「普段は、家に有る物を食っているから気にしてなかったが、果物が値の張る食い物だったとは、ちよつとした驚きだ。メロンなんて、オーク退治の報奨金と同じだぜ」

「冒険の旅では、メロンを一個食べるにも、オーク一匹退治する必要があるのか」

シャーロットは、果物屋の値札をメモに取ると、フェルミから預かった封筒から二万Gを取り出した。

彼女が値段を書き留めているのは、金庫番のフェルミから街で食料品の相場を調べてくるように、言い付かっていたからだ。

訪れた街の相場を把握するのも、これからの冒険に備えて必要なことだ言われた。

「手土産は、このブドウで良いだろう。ボクの両親は、ボクのブドウ好きを知っているから、お持たせで食べられるかもしれない」

「ブドウの季節だし、それで良いだろう」

シャーロットと従兄妹いとこの俺が、洋服の趣味や、食い物の好き嫌いが同じなのは、ライダー家の遺伝によるものだろう。もしくは、魔法剣と剣士が関係しているのかもしれない。

フェルミの買い物に付き合わされたときは、洋服一枚買うにもウンザリするほど時間がかかったのに、シャーロットとの買い物だと軽快に物事が決まった。

「ただいま！ アルを連れてきたよ！」

シャーロットは、玄関扉を勢いよく開くと、これでもかと大きな声で両親に俺の来訪を伝えた。

彼女の自宅は、魔法使いの父親が魔法書の研究に没頭するため、街中心部にある大きな図書館の一角を間借りしていた。

「しかし、いつ来ても広い屋敷だな」

俺は、石造りの書籍庫を改装したシャーロットの家の広さに、いつも圧倒されている。

「父さんの仕事関係の借家だから、どの部屋も魔道書で埋め尽くされて、使える部屋が少ないけどね・・・どうしたんだい？」

シャーロットは、腰に下げていた秘剣スイートソードを無造作に、玄関の傘立てに放り込むと、玄関扉の前で畏ま^{かし}っている俺に声をかけた。

普段の俺なら無遠慮に上がる込むのだが、今日ばかりは、叔母さんの許しを得ないと敷居を跨ぎづらい気分だ。

「あら、ずいぶん早かったのね」

シャーロットのお母さんは、鼻にかけた眼鏡がなければ、俺の母親と区別が付かないほど似ていた。

応接室に通された俺は、緊張のあまり手土産のブドウを抱えたまま、渡すタイミングを逃していた。

「あつ、あのシャーロットは？」

「あの子なら、部屋で着替えてから来るわよ」

「ああ、そうですね・・・この紅茶、ウチのより美味しいです」

「貴方のお母さんから頂いたものよ」

「よく考えたら、同じ味でした・・・煎れ方が違うのかな？」

「今度、あの子に煎れ方を教えておくわ」

「シャーロットには、紅茶なんて似合いませんね」

俺は、紅茶に口を付けながら上目使いに、叔母さんの顔を見た。

「何か、言いたいことがあるのでしょうか？」

睨み付ける眼光は、契約の装備時代に『絶対零度の氷剣』の異名をとった女性だ。

「は、はい・・・そのお嬢さんを、僕に頂けませんか？」

「頂くも何も、もう頂いちゃったのでしょ」

「は、はい・・・すみません、頂いちゃいました」

「頂いちゃってから、何を言いに来たのかしら？」

「えーと、お嬢さんを頂いちゃった報告ですかね？」

「そんな報告、聞いたことがないわ」

「ですよ」

叔母さんは、俺の手足を指差した。

「代わりに、それを寄こしなさい・・・あとで、皆で食べましょう」

「は、はい、頂いちゃってください」

俺は、緊張のあまり下腹が痛くなってきた。

叔母さんがブドウを持って部屋を出ていくと、入れ替わりに真紅のドレスを着たモーリと、ピンクの同じデザインドレスを着たアーシャが部屋に現れた。

彼女たちは、表情を強張らせていた俺を見ると、大きな溜息を吐いた。

「どうしてシャーロットは、アルなんかと契約したのかしら？」

モーリとアーシャは、剣技の修行に明け暮れていたシャーロットにとつて、親友と呼べる数少ない友達だった。性格も属性も違う彼女たち三人が、仲良くなった理由は、乙女でないと噂されていたシャーロットのことを、モーリやアーシャだけが色眼鏡で見なかったからだ。

「なんでお前らは、正装しているんだ？」

「はあ？ アンタ馬鹿じゃないの？」

モーリは、ふんわりしたスカートの裾をたくし上げると、俺と向かいの席に足を組んで座った。彼女の席の後ろには、子分のアーシャが自分の居場所を見つけて立っていた。

「本当にアルは、お馬鹿ですよ」

アーシャは、モーリの意見に同調するように言った。

「ここ最近、俺のことを馬鹿呼ばわりする女が増えているのは、由々しき事態だ。」

「だから、正装している理由を聞かせるよ」

「シャーロットの契約式の見届け人だからよ。先月は、フェルミの契約式、今月は、シャーロットの契約式、ご祝儀代も馬鹿にならないわよ。私とカインの契約式には、二人分のご祝儀包んで来いよ！」

「契約式って、これから？ だって俺たちは、既に契約済みだぜ」

モーリは、組んでいた足で机を蹴飛ばした。

「女の子にとって契約は、遊びじゃないのよ！ 人生掛けるのよ

！ 契約式も挙げないで、命がけの冒険が出来ると思ってるのかよ

お！」

「仰る通りです・・・これから俺の式なんですか？」

「てめーのじゃねーよ、シャーロットの契約式だって、さっきから言ってるだろう？」

カインのいないときのモーリは、大抵こんな感じで俺に食って掛かる。

もしかして俺に、惚れていたのだろうか？ そんなわけないか。

「アル、ちょっと来なさい。モーリとアーシャは、少し待っていて頂戴ね」

俺は、叔母さんと呼ばれるままに玄関ホールに来ると、そこに続く階段には、黒い伝統的な魔法使いの衣装を着た叔父さんが座っていた。

「やあアル、久しぶりだね」

「伯父さんとお会いしたのは、何年ぶりですかね」

シャーロットの父親は、この家の地下で魔道書の研究に明け暮れて、もう何年も穴蔵生活をしていた。

「私は、食事の時以外、あそこから出てこないかね」

「本当に叔父さんは、研究熱心ですよな」

「そういえばアルは、オシリス家のお嬢さんと契約したそうだね。式には、参列できずに申し訳ないことをしたね」

「いえいえ、たいした式じゃありませんでした」

「そんなことはないよ、女性にとって契約と言えば、人生を左右する重大事なのだからね」

それは、挨拶もなしに娘と契約した俺を、非難する言葉でしょうか。

「叔父さんは、どんな研究をしてるんですか？」

「・・・親の承諾もなしに、娘の契約を不可能にする研究だよ」

「それは、面白い研究ですね・・・」

「少し遅かったみたいだけどね」

叔父さんは、階段から見下ろすような目で俺を見ていた。

死んだ魚のような、虚ろな目で。

「冗談だよ」

叔父さんは、目尻を下げて笑った。

俺と叔父さんの会話が終わると、叔母さんがモーリたちも玄関ホールに呼び出した。

「シャーロット、もう良いから下りていらっしやい」

叔母さんが声をかけると、階段の上に純白のオフシヨルダー（肩を出した）ドレスに身を包んだシャーロットが現れた。

手に持っていた薔薇のブーケは、彼女の『魔法剣』のように純白のドレスに赤く栄えていた。

その姿を見ていたモーリとアーシャは、口を開けて眺めていたが、たぶん俺も、そんな感じだったに違いない。

ほんの数秒の出来事が永遠に感じられるほど、彼女に見惚れていた。

「あまりジロジロ見るんじゃない・・・ボクが恥かしいだろう」

シャーロットは、ここで契約式を行うと知っていたのだろう。

階段に腰を下ろしていた叔父さんは、シャーロットを階段の下までエスコートすると、俺の前まで彼女を連れてきた。

「アル、娘のことを宜しく頼むよ・・・泣かしたら、ただじゃおらんぞ」

叔父さんの最後の台詞は、本音だろう。

「シャーロット、正式に契約を申し込むよ・・・俺と契約しておくれ」

兄妹同然に育って俺は、彼女のことなら何でも知っていると思っていた。

だけど俺は、目の前にいる美しいシャーロットのことを何も知らなかった。

「ボクは・・・アルの契約の装備になりたい・・・」

シャーロットは、右手で頭の後ろを押さえるように、少し状態を逸らして脇の下を皆の前に晒した。

その姿にモーリは、顔を真っ赤にして手で覆っていたが、あまりの艶かしさに直視できなかつたのだろ。

俺は、契約の証を立てるため、見届け人の前で彼女の刻印にキスをした。

閃光の中、彼女のドレスが虚空に消えて、俺の手に彼女の感情が伝わってきた。

刻印の痛みなんて感じないほど、感動的なシーン。

友人と家族が見守る中、シャーロットは、俺の手に収まった。

「踊り狂う魔法剣ブラッディローズ」

その『魔法剣』は、剣先もブレることなくシャンとしていた。

契約式は、俺の『魔法剣』を彼女の友人二人が称えて終了となっ

た。

「娘のことは、頼みましたよ」

叔母さんは、装備解除したシャーロットの髪を結び直しながら言
った。

「もちろんです」

「娘は、剣士の貴方に勿体ない契約の装備です」

「はい、そのとおりです」

俺は、背筋を伸ばして返事をした。

その姿は、家を訪れたときと同一人物を思えないほど、ハキハキ
していたので、叔母さんも思わず笑い出してしまった。

「シャーロットは、刻印が刻まれた日、貴方から花束をもらって、
ほかの契約を全て断ったのよ・・・単なる風習なのに、貴方からの
契約申し込みが、よほど嬉しかったのね」

「ボクは、そんなこと覚えてないよ」

「お母さん、皆に断るのが面倒だったから「ウチの娘は、もう乙女
じゃないのよ。もう男の子とやりまくりよ」って、ご近所に言っ
て回ったのよ」

「そうだったの？ 有難うお母さん」

「おかげで変な男に言い寄られなくて、良かったでしょう？」

叔母さん、色々と間違ってる気がする。

「叔母さんのおかげで、ヤリマンのシャーロットとか不名誉な噂が
流れたんじゃないですか」

叔母さんは、髪を結っていたブラシを俺の顔面に投げつけた。

俺は、シャーロットの気性の荒さが母親譲りだと理解した。

俺は、シャーロットが家族や友人と過ごすというので、彼女を残して一人で家路に着いた。

彼女の自宅から出ると、すぐ目の前の大きな木の下に、フェルミが足元の石を蹴飛ばして、不機嫌な顔で立っていた。

「なんだよ、近くににいるのなら、フェルミも契約式に顔を出せば良かったのに？」

俺は、フェルミの傍に駆け寄ると、引き出物にもらった袋をフェルミに渡した。

「要らない……」

「引き出物には、フェルミが好きな鯛の尾頭付きとかお赤飯とか入ってるぞ」

「そんなもの要らないです。鯛の尾頭付きは、好きじゃなくなりました」

フェルミは、そう言って俺の数歩前を歩き出した。

「お赤飯は？」

足早に歩くフェルミの後ろから、俺も追いかけるように小走りになった。

「お赤飯も好きじゃなくなりました」

「何怒ってるの？」

「契約の装備になったら、同じ契約者の契約式に参列できない決まりがあります」

「そうなの？」

「だから今日一日は、シャーロットとのデートを許可しました」

「だから今朝、不機嫌だったのか？」

フェルミが急に立ち止まったので、後ろから追っていた俺は、彼女の背中にぶつかった。

「今も不機嫌です……そんなことも解らないアルは、大ばか者です」

俺は、肩を震わしているフェルミの後ろから抱きしめると、彼女の横顔に頬を寄せた。

「機嫌直してくださいよ」

「シャーロットには、今夜帰らないように言っておきました・・・今夜は、約束どおり『鎧』を着たまま寝てもらいます」

「解りましたよ」

「そうすれば、いつか剣士の『鎧』になるかもしれません」

俺は、フェルミの手を繋ぐと、路地裏のケーキ屋に向かった。フェルミの好物の一つで、彼女の機嫌が直れば安いものだ。

9 ・ ボクの出番が少ないぞ

「アルは、知っているかい。教会の床は、湿らせた大鋸屑おがくずを撒いて、掃き掃除をするんだけど、松の大鋸屑を使つと、松脂のワックスで床がピカピカに輝くんだよ」

カインは、目を輝かせながら教会の清掃ボランティアで得た知識を、カフエ『冒険の木』で俺に披露している。

「そいつは、知らなかったな」

知っていても、冒険に役立つ知識でもないと思う。

俺は、盗賊討伐の際、盗品だった女の命を奪ってしまったカインが、落ち込んでいるだろうと、教会に寄ってみれば、大勢のボランティアを指揮して働く、イキイキとした姿があった。お掃除好きの英雄だ。

所詮人間なんてものは、フェルミの言うとおり、与えられた役割があれば、そうそう塞込んでもないらしい。

「教会の仕事は、充実して楽しいよ。アルも、嫌なことがあったら足を運んでみると良いよ」

「・・・いつから、お前まで信心深くなったんだ？」

毎朝、教会に向かつて祈りを捧げているフェルミは、幼い頃から週末の礼拝を欠かさず、俺の出来の悪さを信心の無さに例えて説教する。

俺も子供の頃は、両親に連れられて礼拝にも通っていたが、学校に通い始めると、休日を自分のために使うことにして、礼拝に通わなくなっていた。

「宗教は、心を平穩に保つ癒しの拠所だよ」

「俺にとって教会は、戦利品の換金所みたいなものだ」

「そうか・・・では、契約の装備を充実するのに、教会が役に立つと言っただら？」

「どつという意味だ？」

カインは、椅子から腰を浮かすと、前屈みに近付いた。

「ここだけの話だが、信心深く礼拝に通うのは、年頃の女の子が多いんだよ。僕も学生時代は、礼拝なんて馬鹿にして通わなかったけど、毎週決まって礼拝に参加するような女の子は、憤み深く清らかな乙女が多くて驚いたよ」

俺は、鼻の穴を広げてカインの話を聞いた。

「そ、そう言われてみれば、フェルミを筆頭にして礼拝に通っていた女子は、みんな清楚で可憐なお嬢様が多かったな」

「なぜ気が付かなかったのかと、僕も後悔したよ……アルも礼拝に参加したくなっただろう？」

カインは、俺の顔色を伺うように切り出した。

「ちょっと待てよ……この手口は、新興宗教の誘いに似ているぞ？」

俺は、冷静になって考えてみた。

カインの話は、確かに頷けるものだが、彼の性格を考えれば、契約の装備おんなをエサにして俺に礼拝を受けさせる意味が解らない。

「お前、何か企んでいるだろう？」

俺は、カインの目をジッと見ながら言った。

「い、いや、何も企んでなんかいないよ。ただ、冒険の旅に出る前に、無事を祈っても良いだろうと……」

「本当のことを話せよ」

「……俺から聞いたと言わずに、今度の礼拝に来てくれるなら、真相を打ち明けるよ」

カインは、椅子の背もたれに深く腰掛けると、諦め顔で言った。

「つまり教会では、未契約の装備おんなを冒険者に斡旋あつせんしているのだな。

俺に契約を望んでいる女の子と、お見合いをしると言うのか」

サウスファイア王国の人口比率は、男女ほぼ同等なのだが、男性の刻印の多くが『Tr（旅人）』に対して、女性全員が何かしらの契約の装備たる資格を有している。

ウエディングでは、多くの女性が冒険を望んでおり、特定の装備おんなを除いて過剰供給になっているのだ。

「簡単に言ってしまうえば、そういうことになるな」

「しかし、武器商人の真似事を教会が裏でしているとは、信じられない話しだな」

「武器商人で売買されている装備は、金で買われた装備や、盗品がほとんどだが、教会で斡旋している装備は、本人たちが契約を望んでいるし、相手が気に入らなければ、断れることもある。教会は、出合いの場を提供するだけで、本人たちの自由意思に基づく契約だよ」

カインは、ガラナジュースを飲み干すと、事情を説明したのだから礼拝に参加しろと迫ってきた。

「装備を充実したいのは、山々なのだけど、シャーロットと『初夜』を済ませたばかりだし、まだ冒険者としても実力のない俺が、これ以上の装備を増やすのは厳しいぞ」

俺は、エラハイの住んでいる隣街に出かける前に、シャーロットとの『初夜』を済ませて、契約の痛みを緩和するメダルを手に入れていた。

ここで新たな契約の装備を入手しては、来月の儀式が開催されるまで、街に足止めを喰らうことになる。

「そう言うだろうと思って、礼拝を口実に呼び出そうとしたのだが・・・」

「誰のアイディアだよ」

「僕が斡旋の話を読んだと言っただよ・・・ミリアムから、アルを礼拝に参加させるように頼まれた」

「ミリアムって、あの級長だったメガネか？ 彼女には、俺に斡旋

したい装備があるのか？」

ミリアム・S W・ハイムは、俺たちが通っていた学校でクラスメイトだった女だ。彼女は、目立つような女の子ではなかったが、芯のしっかりした娘で、教師からの信頼も暑く、中・高卒業まで級長を務めていた。真面目な娘。

「そこまでは聞いていないが、彼女は熱心な信徒だから、多くの冒険者を集めて、契約を望む装備を宛が^{あて}いたいのだろう」

「装備仲介の世話焼きか・・・ミリアムは、卒業しても相変わらずだな。お見合いには、カインも参加するんだろうな？」

「僕は、まだ儀式の参加資格を剥奪されているからね」

「だけど成人したのなら、契約が可能だろう」

「お見合いは、冒険者しか参加できないんだ」

カインは、街を歩き交う人並みを見ていた。あれほど冒険を楽しみにしていた彼は、盗賊との戦闘以来、冒険に対しての熱意を失いかけ、どこか達観するようになっていた。

「今回だけは、カインの顔を立って参加してやるよ」

「そうか！ ミリアムも喜ぶよ」

「参加するだけで装備との契約は、絶対に出来ないと思うぞ」

俺は、今の装備を使いこなすまで、新たな装備を手にしなないと決めていた。

礼拝当日の朝は、シャワーを浴びて身綺麗にしてから朝食を食べた。

「ボクたちは、旅に出る手続きに不動産屋と役所に行くけど、アルも一緒に行くかい？」

シャーロットとフェルミは、冒険の旅に出るため部屋を引き払う

準備をしていた。

「今日は、カインに誘われて、礼拝に行くことになってるんだ・・・
役所には、君たち二人で行ってくれ」

「あら、無信心のアルが礼拝に参加するとは、こういった風の吹き
回しかしら？」

フェルミは、ほかの装備おんなのことに敏感に反応する。

「旅の安全を祈願するだけだよ」

「殊勝な心掛けですね・・・では、私も一緒にします」

「えーと、シャーロット一人だと心配だ」

「なら用事を済ませてから、三人で行きましょう」

「俺は、君たちが仲良くなるように気を回してるんだよ・・・二人
で行きなさい」

装備に対して毅然とした態度で接するのも、多くの装備を身に纏
うための契約者の条件だ。

「解りました。私は、シャーロットと出掛けることにします」

フェルミは、とても冷たい目で俺を睨み付けると、抑揚のない言
葉で言った。

俺は、彼女の見透かしたような態度に、背筋が寒くなった。

教会の帰りにケーキでも買ってこよう。

教会の前には、カインと修道服に身を包む女性が待っていた。
「カイン、彼女は？」

俺は、ローブから覗く女性の顔を見ながら、目鼻立ちの端正な彼
女に見覚えがある気がした。

「ああ紹介するよ、彼女は、リリイ・S.W・ブランドン」

「カインの友人のアルフレッドです・・・何処かでお見かけしたよ

うな？」

と、俺が言うとカインは、右手のグローブを外して、掌をこちらに向けた。契約者は、自分の適職を敵（他人）に知られぬように、全員がグローブで手の甲の刻印を隠している。同様の理由で、自分の装備を晒して手の内を読まれぬように、露出が少ない服装でいる契約者も少なくない。

カインが晒した右手には、『剣』の刻印があった。

「リリイは、僕の契約の装備で、盗賊たちの盗品だった娘だよ」

リリイは、カインが手を切り落とした盗賊の装備だった娘で、彼が契約解除を行った元盗品だ。

「あときの娘か・・・なかなかの拾い物だよ、良い装備じゃないか」

俺は、カインの『剣』を褒めてみたものの、若い彼に釣り合いの取れる年齢ではないと思った。

「彼女は、既に『毒』『魅惑』の特殊効果が二個も付加されている。僕には、勿体ない『剣』だと思うよ」

カインに褒められたリリイは、頬を赤らめて俯いてしまった。

俺は、カインが自慢した特殊効果『毒』『魅惑』が、リリイの年齢を考えれば上限（付加限界値）だと思った。確かに端正な顔立ちの彼女は、切れ味が鋭く、安定したクセのない太刀筋を見込めるが、若い英雄のメインウエポンとしては、物足りない気がした。カインが彼女と再契約した理由が同情ならば、彼の精神状態は、完全に回復していると言い難かった。

「アルフレッド様、その節は有難うございました」

リリイは、見た目通り礼儀正しい装備だ。

「カインは、冒険者の夢を諦めたのか？」

「僕が冒険者にならなかつたら、モーリに殺されてしまうよ。彼女は、冒険の旅に誰よりも憧れているからね」

「そうか、それを聞いて安心したよ」

カインは、英雄に相応しい契約者だ。冒険者となる儀式を終える前に、既に『鎧』『盾』『剣』の装備を携えている。俺は、冒険者なのに二つの装備すら満足に扱えていない。剣士と英雄の格の違いを見せつけられた気がした。

礼拝堂には、既に多くの信者が集まっており、神父の講話を静かに聞いていた。

俺は、入口から入ってすぐ脇の壁に背中を付けると、立ったままの状態で祈りを捧げた。

席に座らなかつた理由は、冒険者の仕事中に背後からモンスターに襲われてから、人の集まる場所で背中を晒すことに臆病になっていたからだ。

「アル君、お久しぶりですね。私のこと覚えているかな・・・級長だったミリアムです。私、卒業してから、ここの教会で働いているのよ」

礼拝が終わると、偶然を装ったミリアムが声をかけてきた。彼女は、白いブラウスに、濃紺のタイトスカートこそ大人びて見えたが、赤い丸縁のメガネや、真直ぐに切り揃えられた前髪、おずおずと話す仕草は、学生時代のそれと変わらなかつた。

「もし時間があるのなら、冒険者のアル君に見てもらいたい装備があるんだけど」

彼女は、俺の同意を得るのもそこそこに、教会の裏手にある修道院に手を引いて案内した。

案内された白い土壁の小部屋が、装備と冒険者のお見合い会場なのだろう。

「もし紹介する装備が気に入ったら、私が最後に聞きに戻るから、そのとき伝えてね」

「あ、あのな級長、俺は、装備のことなら間に合っているよ・・・」
「あっ、もしも気に入った装備があっても、ここで勝手に契約しちゃダメよ」

「俺が辺り構わず契約するほど、発情していると思っっているのか」
「アル君は、剣士だからお相手は『剣』がいいよね？」

「ミリアムは、自分勝手に納得して、俺を残して部屋を出て行った。俺は、ミリアムの事務的な対応に、こんなに人の話を聞かない奴も珍しいと思っただ。」

お見合いは、三人目まで冒険談を聞かせたりして、お茶を濁していたものの、四人目からは、もう相手の話だけを聞いて過ごしていた。日の傾きかけた頃、似たように自己紹介ばかり聞かされ、八人目になると、退屈のあまり欠伸まで出てきた。

彼女たちは、良くも悪くも普通な『剣』で、良く言えば「まじめ」、悪く言えば「地味」、合わせて言えば「まじめで地味」。彼女たちは、普段の生活が地味だから、冒険に憧れているのだろう。

「アル君、十人目の彼女が最後だったのだけれど、誰か気に入った娘がいた？」

休憩も入れずに十人とお見合いさせられた俺は、もう最初の一人目の顔すら忘れてしまった。

「うーん、特技が掃除と洗濯で、契約後の特殊効果に『幻獣召喚』を欲しがっていた『剣』がいただろう」

「何人目の娘かしら？」
「犬を召喚してペットにするらしいよ。その話が今日聞いた話で、一番面白かった」

「そ、そうだよね・・・犬は、幻獣じゃないよね」

ミリアムは、溜息を吐いくと、持っていたノートで顔を半分隠した。

「・・・なら、私と契約する？」

「な、なんで級長と俺が、契約するんだよ？」

彼女の提案に驚いた俺は、椅子を倒して立ち上がった。

「だって、剣士が旅するのに『剣』がないと、何かと不便でしょう？」

「級長には申し訳ないけど、シャーロットミリアム以上の『剣』が、この世に存在すると思えないんだよ」

彼女は、ノートの上から顔を覗かせて目を丸くした。

「シャーロットさんと契約したの？　彼女は、乙女じゃなかったはずよ」

「ああ、あれは人払いの嘘だったらしいよ、彼女は、ちゃんと乙女だし、俺の『魔法剣』だよ」

シャーロットとの契約式は、身内だけで執り行っており、ミリアムが知らないのも無理はない。

「そうだったの？」

「だから、級長の申し出は嬉しいけど、その気持ちだけ受け取っておくわ」

「ち、違うのよ、べつに私がアル君と契約したいとか、そんな意味じゃないのよ・・・アル君、あんまり剣技の成績が良くなかったから、心配しちゃって」

ミリアムは、恥かしさのあまり火照った顔をノートで煽いだ。

「なんだよ、そんなに俺の剣技が弱いと思っていのたのか？」

「うん」

「否定しないのかよ・・・学校では、スキル発動が禁止だけど、実戦ならカインとも渡り合えるぜ」

「そうなんだ」

「そうだよ」

ミリアムは、緊張を解いたのか、硬い表情を崩して笑った。

「シャーロットさんも乙女のままだったし、アル君も何の心配なく送り出せるわ」

「級長は、世話焼きが過ぎるよ」

と、俺が言うとミリアムは、

「私は、いつだってクラスの皆のこと心配してるんだ。だって私は、級長だからね」

卒業後のクラスメイトなんて普通は、あつという間に過去の人だろう。

落ちこぼれのクラスメイトの旅立ちを心配するなんて、級長は馬鹿だろう。

「級長は、世話好きが過ぎるよ・・・けど、心配してくれて有難う、マジで有難うな。それから、級長みたいな真面目な奴は、きっと良い契約者の『剣』になると思うよ」

「うん」

ミリアムの真っ直ぐ笑顔を見た俺は、自分がどれだけ多くの友人に支えられているのか。それら友人の支えをどれくらい自覚できているのか。たぶん俺は、ほとんど自覚出来てなかった。

「級長が素敵な契約者に出会ったために、一つだけアドバイスしてやるう」

「なにになに？」

「ここぞというときは、契約者の前でメガネを取れ」

「なんで？」

俺は、学生時代にメガネを外したミリアムの顔を見たことがあった。

彼女の近視で潤んだ瞳は、フェルミとシャーロットの次くらいに素敵な瞳だ。

素顔のミリアムなら、どんな男も契約を申し込むだろう。

「それから・・・いいや、何でもない」

俺は、カインの面倒を頼もうとしたが、ミリアムが傍にいれば心配いらないと、余計なことを口にするのは止めた。

「けどアル君は、凄いや」

「俺の何処が凄いな？」

「だってフェルミとシャーロットは、学校の成績で一、二を争っていた才女だよ。その二人を自分の契約の装備にしちゃうなんて、本当に凄いや」

俺は、契約者の前でメガネを外す本当の理由を付けずに、ミリアムに見送られて修道院を後にした。

それから一週間後、俺たちは生まれた街を出て、エラハイの住む隣街へと旅立った。

10. ボクの夢はいつか叶う

「はうっ！」

フェルミは、右前方からのプリースト・グラスマンの攻撃を避けきれずに、肩口に一撃を喰らってしまった。俺が剣で攻撃を防いで、左後方に飛び退けようとしても、彼女がそれを拒んだためだ。

「ボクは、イケるよお！ そのまま左から突き上げてえ」

俺は、シャーロットの言葉を信じて、トカゲの司祭（プリースト・グラスマン）の左脇腹から首筋まで『魔法剣』で切れくと、剣士のスキルを発動することもなく、半身を失ったトカゲの司祭は力なく崩れた。

エラハイの住む隣町までは、定期運航している乗合馬車を使えば二日で到着する距離なのに、出立してから四日目の俺たちは、まだ道程の半分も進んでいなかった。

「フェルミの体調が悪そうだから、無理せずここで野営をしよう」

彼女達を装備解除した俺は、まだ戦闘の興奮で息の上がっているシャーロットを草むらに寝かせて、フェルミと二人で野営用のテントを張った。

フェルミは、虚ろ下な表情で、近くにいる冒険者のために赤い旗を立てた。

身を隠すところのない草原での単独野営は、夜間のモンスターの襲来に対応できないため、狩りをする冒険者同士が集まって夜を過ごす。彼女の立てた赤い旗は、ほかの冒険者を呼び集めるための目印だった。

「こんな早い時間から旗を立てても、良いものでしょうか？ もう少し時間を置いてから、旗を出した方が良いでしょう」

フェルミは、テントの中に戻ってくると、自問自答するように呟

いた。

赤い旗を見つけた冒険者は、体力に余裕があるうとも、先を急ぐ特別な理由がない限り、そこで野営を行いコミュニケーションを築くのが、決まりとなっている。

「ほかの冒険者の事情なんて、知ったこっちゃないよ。狩りを続けなければ、野営の周りで勝手に狩れば良いんだからね」

と、俺が言うとフェルミは、少し笑ってから夕飯の支度もせずに寝てしまった。

「アル、ちよつと良いか？」

俺は、テントの外からシャーロットの呼ぶ声が聞えたので、フェルミの体調が気になったものの、その場に残してテントを出た。

「フェルミの具合は、どうなんだい？」

シャーロットは、草むらに上半身を起こしてテントの中の様子を伺っていた。

「俺よりも、同じ契約の装備で同性のシャーロットの方が、フェルミの体調のことを解るんじゃないのか」

「ボクには、よく解らないけど、この旅に出てから日増しに、アルとフェルミの息が合っていないのは、よく解るんだ。そのせいで、ボクまで気が散っちゃって、なかなかイケなくて・・・」

盗賊との戦闘では、二つの剣技を開花させたものの、フェルミを装備した状態での戦闘では、まだ一つの剣技も特殊効果も目覚めることがなかった。

剣士には、重装過ぎる『鎧』が戦闘の足枷となり、『魔法剣』を活かし切れていないことが、シャーロットの集中力を欠く結果となっているのは明らかだ。

それでも彼女は、気丈にも俺との呼吸を合わせて、自ら快感を得ようと導いてくれているが、そんなとき決まって、フェルミが思い

通りに動かなかった。

「三人での戦闘は、二人の時よりも楽になると思っただけだ。俺には、まだ二つの契約の装備を同時に扱うテクニクが足りない……」

「フェルミとの初戦闘では、幼馴染の奥深い所で一体感を感じ、シヤールotteの剣技を开花したときには、契約者としての自信もついた。」

だが三人での戦闘は、自分の気持ちばかりが先行して、戦闘中の『鎧』と『魔法剣』を萎えさせている。俺が悪い。

本来ならば、契約者である俺がリードして、彼女たちに戦闘の快楽を与えるのが役目だ。

力任せに剣を振るだけの俺は、二人に愛想を尽かされても文句が言える立場じゃない。

「ボクは、アルとの戦闘が気持ちいい。アルが頑張ってるのに、イケなくてごめんよ」

俺は、シヤールotteの申し訳なさそうな顔に、胸が張り裂けそうになる。

彼女が詫びる理由なんて、どこにもないと言うのに。

「シヤールotteは、俺の思いどおりに応えてくれてるよ……ちゃんど能力を引き出せないのは、俺のテクニクの問題だ」

俺は、シヤールotteの頭に手を置くと、戦闘で乱れた髪を後ろに梳いてやった。

目を細めた彼女は、とても美しく、汗に濡れた髪は、凜々しくもあつた。

日が傾く頃には、俺たちのテントの周りに三組の冒険者が集まっ

ていた。

野营地では、最初に赤い旗を立てたパーティが、狩りの獲物で作った料理を振る舞うのが、この地方での風習だ。

この風習は地方毎に特色があり、周回軌道上の太陽から離れた南の寒い地方では、夜も短く周囲にモンスターも少ないため、酒を振る舞ってダンスを披露して羽目を外して騒ぐらしい。

俺たちの冒険の旅に目的がないのなら、各地を訪ね歩いて見聞を広げたいと思った。

だが、俺が目的のない旅だと言ったなら、テントで寝息を立てているフェルミに、怒鳴られるに決まっている。彼女の旅の目的は、モンスターを率いる魔王を討伐して、優秀な『鎧』としての名声を得ることだ。

堅実なはずの彼女は、多くの冒険者が数世紀に渡り挑み続けて、その居城にさえ辿り付けない魔王討伐が夢だなんて、少しロマンに過ぎる気がする。

「本音は、俺に魔王を倒させて、名を挙げさせたいんだろう。フェルミは、やっぱり可愛いよ」

シャーロットは、独り言を呟いてニヤニヤしている俺と一緒に、ほかの冒険者のテントへ、戦闘で倒したトカゲで作ったステーキを届けていた。

「アルの刻印が『Chef（調理師）』ではないのが、不思議なくらい料理が上手だね」

「刻印だけでは、人の資質が計れないからこそ、みんな成りたい自分を追いかけられるんだよ」

と、俺が言くとシャーロットは、急に腕にしがみ付いてきた。

「ボクは、アルのそういう考えが好きなんだ」

「どういう考えだ？」

「ボクにも幼い頃からの夢があるんだ・・・それは、叶うだろうか」

「？」

「シャーロットの夢なら、いつか叶うよ」

「そうか、ボクの夢はいつか叶うのか」

彼女の夢が何なのか？ いま聞くには勿体ない気がした。

まだ旅は、始まったばかりなのだから。

俺は、三組の冒険者に食事を配り終わると、フェルミの寝ているテントの横に、四組目の冒険者がテントを張っていた。

困ったことにトカゲのステーキは、品切れとなっており、材料となる肉も手元に残していなかった。

日が完全に暮れるまで野営を張らなかつた四組目の彼らは、大きな焚火を囲んで既に食事の最中だつた。

「無視する訳にも行かないから、事情を説明してくるよ。シャーロットは、フェルミの傍にいてくれ」

俺は、空手のまま挨拶に来た非礼を詫びると、四組目の冒険者は、赤ら顔で笑って許してくれた。

焚火の周りには、六人の契約の装備（フル装備）が座っており、その真ん中で、ほとんど下着姿の格好で酒を煽っているのが冒険者だつた。

「君は、はじめの街から来たばかりか？」

俺たちが住んでいた街は、冒険者となるための通過儀礼『初夜』の森に最も近く、冒険者から『はじめの街』と呼ばれていた。

「生まれ故郷なんですよ。俺の名前は、アルフレッドと言います・・・えーと」

「俺の名前なら、ビンセントだよ」

「ビンセントさんは、何処から来たんですか？」

「旅で出会った冒険者同士は、初対面でも呼び捨てで構わないぞ。俺は、王都サウスファイアから来た」

彼は、そう言って立ち上がると、千鳥足に近付いて握手を求めた。

「その手の刻印は、『War（戦士）』なんですね」

ビンセントは、自分の手の甲の刻印を見つめてから「そうか俺は、戦士か・・・戦士だったのか？」と、何が面白いのか理解できなかったが、契約の装備たちと一緒に馬鹿笑いだした。

「なんだ？俺のギャグが伝わらなかったのか？」

このオッサンは、完全な酔払いだ・・・。

「アルフレッドは・・・剣士か、剣士だったのか？」

と、似たようなフレーズを繰返して馬鹿笑いするのは、酔払いの特徴だ。

しかしグローブで刻印を隠している、俺の適職をどうやって見抜いたのだろう。

「君は、初心者で・・・契約の装備は『鎧』と『剣』だろう」

「そのとおりですが、どうして解るんですか？」

「右肩を下げて前に出して斜に構え、手を腰の小太刀に当てていれば、『剣』がメインウェポンの剣士だ」

「英雄の主装備も『剣』ですよ」

「彼らは、もっと正面に構えているよ」
「なるほど」

俺は、カインの立ち姿を思い出した。

「初心者 of 剣士には、複数契約するほど経験がなく、普通は『剣』のみだが、アルフレッドは、上半身が軽装な衣服なのに、脚をスカーツで守っている。上半身は、契約の装備だから連れてきていない」
彼は、なかなかの観察眼の持ち主だった。

「初心者には、複数契約が難しいですかね・・・」

俺は、フェルミの調子が良くないことを相談すると、ビンセントは、足元の枝を二本拾って、一本を俺に渡した。

「アルフレッド、枝を剣だと思って構えてごらん」

俺は、枝を持った右手を下げて、腰を落とすと斜に切上げる体勢を整えた。

最初のリーフ・オークを疾風シルフィーネ零式で倒したときも、フェルミに剣技ハヤブサを披露したときも、腰を落としてから下から上へと切上げたが、これが俺のスタイルだ。

「珍しい構えだね・・・自己流かい？」

「そうです」

「なるほど、その構えが良くない。『鎧』の右側は、彼女の下半身だと知っているかい？」

「『鎧』は、右から左に巻き付く格好で精製されています」

「よろしい。では、切りかかっておいで」

ビンセントは、頭上高く枝を掲げたので、彼の左下から枝を打ち上げた。その刹那に彼は、手にした枝を振り下ろしたので、枝を盾代わりに左回転で後ろに飛びのいた。

「これは、全くよろしくない。彼女の調子が狂うわけだよ」

「？」

「『鎧』の能力開発には、成功したことがないだろう」

「はい。じつは、友人（カイン）も『鎧』の能力開発に成功していません。『剣』なら敵を切り裂くことで、『盾』なら多くの攻撃を受けることで、新たな能力を得られました。ですが、『鎧』の場合、致命傷になる攻撃を受けるわけにいきません」

「鎧の刻印を持つ女の子は、芯が強く見えて、とてもデリケートなんだよ。アルフレッドは、初手から彼女のケツを上を持ち上げたり、敵の攻撃に対してケツを向けたりしたら、彼女の気が散ってイケるものも、イケないだろう？」

「あつ」

「『鎧』がイケないのは、契約者の未熟さにあるんだ。彼女は、ここ数日間の戦闘で、イキたいのに寸止めされて、イケなかつたんだ。君は、何日間も寸止めされても平気なのかい？ マゾヒズムに狂った『鎧』でもない限り、君のやっていることは拷問だよ」

「何日間も寸止め・・・」

「契約者には『暇があつたら撫で回せ、吐息が漏れた場所を重点的に責める』という格言があるんだが、君のことだから移動中に、ちゃんと装備を愛撫してないだろう」

エラハイの教えてくれたのは、契約者の格言だったのか・・・。

「そうですね、まあ移動中は世間話してます」

「愛撫もなしに、いきなり戦闘（本番）とは・・・俺は、常に右脇腹を撫でながら、剣の鍔を指で摘まみ、踵かかとを大地に擦るよう歩き、籠手と盾が魅惑の音色を奏できるように手を振り、いつでも戦闘に備えている。まあ兜には、スティックな娘を選ぶことだな」

ビンセントの説明は、勇ましく歩く戦士の立ち振る舞いだ。

彼の話聞いていた六人の契約の装備は、顔を赤くして笑っている。

「俺は、むしろ大事なところだから、触つたらいけないのかと・・・」

「

「鼻歌交じりに装備の声（喘ぎ声）を聞き、語らぬはずの装備の声（喘ぎ声）に、耳を傾けるのが契約者おていつてもんだろう！」

ビンセントは、親指を突き立てると、呆然としている俺に、

「Good luck! and Good night!（幸運を そして おやすみなさい）」

俺は、ビンセント先生に感謝を伝えると、二人の待つテントに走って帰った。

俺は、人生で二人目の師匠に会えたことを、神様に感謝した。

俺がテントに戻ると、寝ている二人を叩き起こして、『鎧』と『魔法剣』を装備して寝た。

当然だが、朝まで『鎧』の右脇腹を飽きるまで擦り、『魔法剣』の柄と鐔を舐めたりした。

翌日の朝、寝不足気味の三人でテントを畳むと、ビンセントに挨拶をして野営地を解放した。

フェルミは、目の下にクマを作っていたけれど、いつも以上に爽やかな朝だと笑顔で言った。

> i34938 — 3708 <

「ふあっ！ 溢れてきちゃうよっ」

「まだイクなよ、シャーロット！」

トカゲの長兄マスター・グラスマンが率いるトカゲの家族に囲まれた俺は、前衛の頭上高くから剣を振り落とし、袈裟切りに奴の胸元へ剣を突き立て、そこで手を止めた。そのまま剣を振り抜かなかつた理由^{わけ}は、返り血や、剣から滴るトカゲの血を、口を開けて待っているフェルミにも注ぎ込むためだ。

モンスターの青臭い血は、強いアルカリ性であることが知られており、極僅かだが塩素臭を放っている。この独特な臭いが苦手な契約の装備もいるらしい。男の俺には、嗅ぎ慣れた臭いだが、それが彼女たちの戦闘への興奮を高めているなら、思う存分嗅がせてやる。「ああ、この匂いダメえ・・・わ、私、もうダメになっちゃいますっ」

フェルミの「ダメ」が否定の意味じゃないと気が付いたのは、装備の「ダメ」と「イヤ」が背徳心の現れであり、彼女のような信心深い装備なら総じて「イキそう」と捉えろと、ビンセント先生の教えからだ。つまり彼女は「この匂いイキそう、もうイキそう」と言いたいのだ。

「アル、お、お願いだ、これ以上焦らさないでくれ・・・頭がおかしくなりそうだ」

トカゲの胸奥に留まっていたシャーロットは、全身に青臭い血を^{からだ}被せられて、柄を揺らしてトカゲを引き裂くことを強請ってきた。

「まだまだ！」

俺は、剣を肉に突き立てたままで裏に返すと、さらに根元まで深く肉塊に差し込んだ。

「ひいつ！」

仰向けにされた彼女は、思いがけない俺の行動に、身を硬くして上体を逸らした。俺の攻撃に身を引いたつもりだろうが、彼女の逃げ込んだ先には、臭い袋（心臓）が待ち構えている。

ドツぱあああああつ！

んぐツ・・・ゴクリッ。

彼女たちの喉を鳴らす音に「零さず飲み込めよ」と、声をかけた。シャーロットは、溢れだす液体を切先から鐔まで大量に浴びると、恍惚の輝きを放った。

「シャーロット、ここから連続してスキルを発動するけど、大丈夫かい？」

俺の呼びかけに応える声は、聞えなかったものの、ピンと張りだした切先が、次の獲物を欲しがっているのは明らかだ。

マスター・グラスマンの前には、まだ二匹のグラスマンと、杖を高らかに上げて呪文を唱えるプリースト・グラスマンがいた。攻撃魔法の準備をしているトカゲから攻撃をするのが、単独戦闘の定石なのだが、俺の『鎧』は、司祭が唯一唱えられる麻痺呪文を無効化する。

「剣技ジャックナイフ！」

俺の放った剣技は、トカゲの下腹部に命中し、肉が引き裂いて赤黒い道を開いた。俺は、醜悪な臓物を掻き分けるように、懐から剣技ハヤブサで入口を左右に弄った。下腹部の痛みには耐えかねたトカゲは、ギiiiiiiiiッ！と、喉の奥の器官を擦って叫びをあげたが、抵抗する様子もなく死を覚悟していた。

「シャーロット、力を抜け！ 入れるぞ！」

彼女は、俺の口角を上げた笑みに気が付いて、ヌラヌラとした穴に、剣を突き立てることを拒んだ。

「い、いやっだ、そ、そんなボク、入れないでえっ!!」

俺は、くばあと開いた穴に、ずぶりと剣を差し込むと、より多くの血と臓物を求めて、身体からだの中で激しく剣を振った。俺は、トカゲが前屈みに崩れ落ちると、体ごと背中へと突き抜けた。

さすがのシャーロットも剣技の連続発動は、負担が大きかったようだ。反応の鈍くなった彼女は、血量を伴う臓物を頭から浴びても、荒い息遣いのまま、崩れたトカゲに三斜目を要求してこなかった。醜悪の極み。

「フェルミ、気持ちいいかい？」

「う、うん・・・気持ち良いよ」

と、フェルミが言う俺は、単調な戦闘の繰り返しで高みを目指すことが、難しいと悟った。

「やはり、テクニクを磨く必要があるのか・・・」

俺が三匹目のトカゲに向きを変えると、小刻みな空気の揺れを感じた。ブオオオオッブオオオオッブオオオオッと、むず痒くなる振動だ。

「しめたぞ、司祭様の麻痺呪文だ！」

背後にいたトカゲの司祭は、杖を回しながら麻痺呪文を俺たち目掛けて放っていた。だが、麻痺無効の特赦効果を付加しているフェルミには、この小刻みな振動が、敏感なところを刺激して、堪らなく気持ちがいらいらしい。腹の底にジンジンツと響く緩急ある振動が俺たちを貫くと、戦闘に緩慢になっていた彼女たちが、一斉に喘ぎ声をあげて輝きを取り戻した。

敵に塩を送るような司祭の攻撃は、まだまだ未熟者の俺にとって有難い。そのまま彼女たちの敏感なところに、麻痺呪文を当ててほしい。これは、俺の焦りだ。

「剣技リターンズオーター!!!」

俺は、次のトカゲとの距離を一気に駆け抜けて、剣を深く差し込むと股間まで引き下げた。

マスター・グラスマンは、オークより背が低いものの、身長二メートルのオークも、百九十センチのトカゲの長兄も大差がない。身長あまり高くない俺は、下から上への突上げる攻撃を身に付けていたが、無防備な下半身を晒すのを嫌がるフェルミの興を削いでしまふ。俺が、身長差二十センチのトカゲの長兄を上から攻撃するには、上段に構えて攻撃するしかない。ただ俺が上段に構えれば、やはり無防備な鎧を晒すことになる。

「負担の大きいジャンプ攻撃は、避けたいのだが・・・仕方ないか」俺は、ジャンプ攻撃からの浮遊感を好む、彼女たちの欲求に応えて、脚の付け根の痛みを我慢しながら大きくジャンプした。

俺は、トカゲの長兄の頭上に伸び乗ると、脳天に剣を突き刺して喉から脊髄に向かって大きなモーシヨンで引き裂いた。トカゲの長兄は、恨めしそうな目で俺を見上げてから、ドサツと倒れ込んだ。倒れ込む瞬間に飛びのけた俺は、体が浮き上がるような感覚に支配された。

相変わらずトカゲの司祭は、俺たちに心地よい振動にしかならぬ麻痺呪文を続けている。

「お嬢さんたち、こいつを生け捕りにして、毎晩愉しむかい？」

「ボクは、アルがそうしたいなら・・・」

「馬鹿言わないでよ」

「俺の戦闘より何倍も気持ちいいんだろう？」

俺の嫉妬心から出た台詞は、彼女たちを萎えさせたみたいだが、もう十分に快樂を貪ったはずだ。

意味のない攻撃を続けるトカゲの司祭は、なんだか気の毒でならない。

俺たちが戦闘を終えて、トカゲの死体から戦利品を剥いでいると、囃し立てる様な大勢の声が聞こえた。どうやら隣町までの乗合馬車の中から、俺たちの戦闘を観戦していた者がいたようだ。

「こつちに来て、武功を称えさせてくれ」

「その装備は、凄い美人だね」

「君は、見習いの騎士かい？」

観客たちは、安全な馬車の中から口々に賛美すると、俺の活躍に拍手を送ってくれた。

装備のままの彼女たちを「美人」と言ったのは、けしてお世辞ではない。乙女から精製される契約の装備を称える言葉は、「美人」が最上級の賛辞とされている。装備解除した乙女的美醜は、美人でなくても構わない。

「・・・あんな大勢に見られていたなんて、少し恥ずかしいです」
フェルミは、呼吸を整えながら言った。

俺は、装備を纏ったまま乗合馬車に近付くと、手を挙げて歓声に応えた。

「トカゲの家族を全滅させるとは、凄いじゃないか」

「ええ、そうですね」

褒められることに馴れていない俺は、頭を掻き揚げながら照れてしまった。

「冒険者になつて何年目だい？」

「まだ、二か月目の初心者なんです」

「初心者で、あんなマニアックな戦い方をするなんて、ずいぶんと好き者なんだな」

「俺の戦闘は、マニアックですか？」

俺は、ほかの冒険者の戦闘を見ていなかったの、何がマニアックなのかと聞いてみた。

「俺たちが通りかかったときアンタは、トカゲの腸に彼女を突き刺

して、グルグルと掻き回していただろう。男も知らない乙女に、モンスターの血（青臭い）を浸み込ますような戦い方は、普通しないよ」

「装備が血を好むんですよ。あの青臭さが好きみたいなんで・・・」

「装備から求めてきたなら、よほどマゾか、刺激に飢えた年増だよ」

「雑食のトカゲの臍物は、相当な悪臭だったろ？ 糞尿に塗れて悦ぶ装備なんて、俺たち『Tr』の刻印には、全く想像できないよ」

そう言って笑った彼らには、たぶん悪気があつたわけではないと思うが、マゾとか、年増扱いされて、フェルミが不機嫌になった。「スカトロ戦闘フレイを望んだのは、私じゃありませんよ」

「わ、分ってるよ・・・」

青臭さに夢見心地でいたシャーロットは、自分のことを言われたと思った。

「血の臭いには、興奮したけれど・・・ボクは、変態じゃないぞ」

「シャーロットは、ヒューヒュー悦んでいたではありませんか？」

「フェルミは、「うん、気持ち良いよ」って答えてた」

「二人とも俺が悪かったから・・・街に着いたらエラハイの元で修行して、もっとテクニクを磨くよ」

俺は、先ほどの戦闘で疲れており、二人の口喧嘩が煩わしかった。

「アンタたちも街まで行くなら、馬車に乗らないか？」

フェルミは、冒険者が安全を確保すべき、馬車での移動に反対した。街から街へと続く道は、冒険者にとって稼ぎを得る場所で、報奨金の一部が馬車組合の出資で成り立っているからだ。馬車は、冒険者が稼ぎを得るために守る物で、乗って楽に移動する物ではないとの持論があるのだ。

「それに馬車には、ほかの冒険者が護衛（仕事）のために乗車しているのよ。私たちが乗車したら、その冒険者に申し訳ないわ」

「べつに護衛（仕事）を横取りするわけではないから、気を悪くし

ないだろう?」

俺にも、彼女の言い分がよく解るのだが、ここ数日間、慣れないジャンプ攻撃を続けて痛めた腰は、彼女たちを支える歩くだけの余裕もなくなっていた。

「『鎧』のお嬢さん、ワシのことなら気にせず、後ろの荷馬車の護衛を頼むよ」

初老の冒険者は、乗合馬車の車列に付いてくる、荷馬車の護衛を依頼してくれた。定期運航されている乗合馬車は、客を運ぶ馬車と、荷物を輸送する荷馬車が車列を組んでいる。

「ワシからの仕事の依頼なら、遠慮することはないだろう?」

「は、はい。すみません、気を使って頂いて」

「ここから街までは、もう二、三時間で着くだろう。装備解除して体を休めておきなさい」

俺は、『魔法剣』を持った右手を前に出すと、シャーロットと握手をした状態で装備解除した。その様子を見ていた馬車の客たちは、彼女の想像以上の美しさに言葉を失った。契約者の装備解除は、一般的に目にする機会がないので、契約者でない『Tr』からすれば、それだけでも息を呑むシーンだ。

「び、びっくりしたな・・・本当に、美人さんで驚いたよ」

彼らの前で装備解除したのは、俺たちの戦闘を褒めてくれた観客へのカーテンコールだ。

シャーロットは、自分のプレイを見られていたことに、照れくささを感じていたが、彼らの称える言葉に、軽く手を振って応えた。

「あんな娘と契約が出来る契約者は、本当に羨ましい」

「戦闘中は、どんな感じなんだい?」

彼ら『Tr』は、戦闘中の彼女が快感を得ていると知っているが、実際にどんな様子なのか経験することがない。だからこそ、余計に興味津津なのだろう。

「どんな？ 剣の場合は、ふわツとしたり、グツとされたり・・・」
おいおい、素直に答えないでよるしい。

彼らの期待は、自ずとフェルミの装備解除に集まった。太陽の光に輝く純白の鎧は、そざかし美しい女性になるに違いないと、そう考えているのだろう。だが鎧の装備解除は、駅弁スタイルのため披露するに下品過ぎると、フェルミが頑なに拒んでいた。

「もしかして、鎧の女は・・・」

なかなか装備解除しない俺たちに、客がフェルミの容姿に疑いを持ち始めた。

「鎧は、人前での装備解除が恥かしみたいなんで、悪いけど目を閉じてもらえますか？」

客が面倒くさそうに、俺の指示に従った。

「そんなことまでして、彼らに気を使う必要はありません」

「違うよフェルミ。俺は、フェルミの美しさを大勢の人に知ってもらいたいんだ」

「・・・そういうことなら」

俺たちは、馬車に背を向けて装備解除した。

「はい、どうぞー！」

俺は、フェルミを前に立たせると、鈍臭い手品師のように、美しい彼女を披露した。

「おおおおお、剣にも負けず劣らず、美しいお嬢さんだ」

「あ、あんな綺麗な娘二人が、あんな戦闘を・・・」

「汁塗れの美少女とは・・・なんで俺の刻印は、『Tr』なんだよ
お」

「俺も、あんな娘（剣）に（を）ブチ込んでみてえよ」

お前らは、どんな想像をしてるんだ？

俺は、荷馬車の御者に挨拶を済ませてから、フェルミたちが先に待つ荷台へ向った。

「アル！ 聞いてくれよ。フェルミは、ボクのことを変態扱いするんだ」

「だってシャーロットは、あんな青臭い液体が甘いなんて言うんですよ」

「違うよ、甘く感じるときもあるよね？ って、聞いたただだよ」

「苦いです。喉越しも最悪です。シャーロットは、美味しいだなんてヘンタイさんですわ」

「ボクは、美味しいなんて一言も言ってないよ・・・」

装備の彼女たちに味覚があるとは、どこで味を感じているのか、俄かに信じられない話した。

「まあまあ、二人とも不味いなら無理に飲むことないよ」

「体液を飲み込むよう強要したのは、そもそもアルでしたよ」

「嫌がるボクらに体液を飲ませたのは、アルじゃないか！」

俺は、後方監視を彼女たちに言いつけると、旗色が悪くなる前に御者のところに逃げ出した。

「なんだよ、二人とも悦んでいたクセに」

御者の男は、俺が前に戻ると、隣に座らせていた女を両手を広げて慌てて隠した。

「な、なんだよ旦那は、荷台から護衛するんじゃないのか」

「連れが喧嘩の真っ最中で、前に逃げてきたんだが・・・」

俺が座ろうと思っていた空席に、腰を下ろしていた女は、黒皮のチューブトップとミニスカート、膝まであるロングブーツを履いており、素人女に見えなかった。しかし身の丈は、未成年と勘違いし

たユングよりも低く、ピンク色に近い赤毛は、幼さを漂わせている。顔を大きく隠したサングラスは、大人びた服装に比べて、どこか幼稚なセンスだ。

「この女は、俺の知り合い・・・って言っても、飲み屋の女だけど、無賃乗車なんだよ。ここに座っていいから、このことを見逃してくれ」

御者の男は、飲み屋のホステスにせがまれて、金も取らずに隣町まで乗せているらしい。本来なら護衛である俺は、見逃すことが出来ないのだが、護衛役は正式な依頼ではなかったし、俺自身が好意に甘えて乗せてもらった身だ。

「解ったけど、街の手前で女を降ろせよ」

御者の男は、もとよりその考えだと頷くと、俺のために席を寄せてくれた。

俺は、間近で女の顔を覗き込むと、サングラスに透けた細い瞳が俺を覗き返した。

彼女は、服装こそ大胆な装いだが、八重歯の可愛い普通の女の子に見える。

「アンタは、冒険者なのかにゃ？」

うん？　なんか聞きなれない方言に俺は、首を捻って聞き直した。

「アンタは、冒険者なのかと聞いているのにゃ」

「ああ、そうですよ・・・アンタではなく、アルフレッドと言います」

「名前なんか、どうでも良いにゃん」

世界って広いよな、どこの地方の方言だろう？

中部地方では、語尾が「みゃー」だと聞いたことがある、たぶん中部地方の女の子なのだろう。

「それよりアルは、何の適職を持ってるのにゃ？」

そう言うと彼女は、俺の太腿に手を置いて体を摺り寄せてきた。

不味いな・・・ここ数日、溜るだけ溜めてるから出ちやいそうだ。

契約者が適職を晒すのは、あまり好ましいことではなかったが、太腿に置かれた女の冷たい手に、思わず口から「剣士です」と出ちやいそうだ。

「ミーコには、適職を明かせないのにか〜ん？」

彼女の手は、次第に内腿を撫で回すようにクネクネと動き始めた。

「ミーコ？ ああ、お名前ですね・・・」

ミーコを名乗る夜の女は、ピタリと手を止めて、続きをしてほしければ、適職を明かせと囁いた。

「剣士ですッ！・・・はうッ」

俺は、意志の弱い男です。

思っていたより、色々と弱い男でした。

臭いは、モンスターの臭いで誤魔化せそうですが。

「これ、働くことになっている店の名刺だにゃん。ミーコに会いたくなったら、いつでも来てにゃん」

俺は、ミーコから受け取った名刺を内ポケット仕舞い込むと、なんだかスッキリした気分になった。そして、一連のやり取りを見ていた御者の男は、俺に親指を立てたので、俺も親指を立てて応えた。

「そうか、それで荷馬車は・・・モンスターの臭いがしていたのか」

俺と商売女ミーコとの偶然の出会い、これから巻き込まれる大事件の予兆だったのかもしれない。ミーコこと本名ミアン・Leg・コーデアルは、契約者を渡り歩くネコのような女だった。

12・勇者なんて凄いにゃん

ほどなく荷馬車は、隣街の外壁が見える小高い丘まで辿り着いた。ここから街の入り口となる門までは、草木の生えていない荒涼とした大地が続く。街の周囲五キロほどは、モンスターの接近を監視するため、わざと野に火を放って丸坊主になっているのだ。

「ミーコさん、ここまで来ればグラスマンも現れませんよ」

御者の男は、荷馬車を止めるとミーコに降りるように言った。

「え〜っ、こんなところから歩くの〜、モンスターに襲われたら困るにゃん」

「ですが、そろそろ日が暮れますから・・・ミーコさんなら大丈夫ですよ」

俺には、夜が訪れると何が大丈夫になのか解らなかったが、彼女は「仕方ないにゃん」と渋々従った。

「もう少し乗せてやれば良いだろう？」

馬に鞭を入れる御者の男は、手荷物一つで馬車から降りたミーコを無言のままに指差した。

振り返った俺は、彼女が大きく伸びをすると、サングラスを外した大きな目に、顔を出し始めた赤い月が反射して輝くのを見た。その瞳孔は、縦にスリットが入っており、まさに猫の瞳だった。

「お、おい、彼女は、いったい何なんだ？」

「旦那さん・・・ミーコは、本物の猫ですよ」

「猫？」

彼女は、俺と視線が合うと手を振った。

「二人とも起きろよ、街に着いたぞ」

ミーコの姿を見ていたはずの荷台にいた二人は、両手の指を絡ませて、寝息を立てていた。これは、口論の末に力比べ的なことをしたものの、戦闘の疲れからお互いに寝てしまったと、解釈すべきだろう。

「あ・・・おはよ」

シャーロットは、まだ眠い目を擦って荷台から降りてきた。

「おはようって、もう日が沈んでるぞ」

「ああ、おそよう?」

そんな挨拶があるものか。

彼女は、まだ寝ていたフェルミに声をかけると、エラハイの待つ街外れの教会へと歩き出した。

「七日間もお風呂に入っていないから、汗臭くて堪らないわ」

寝起きのフェルミは、自分の衣服が放つ異臭を気にして、ミント葉から抽出したオイルを襟元に吹きかけた。爽やかなはずのミントの香りも、汗に混じって重く感じる。

「そうかな? 毎日、ちゃんと体を拭いていたし、変な臭いはしないよ」

「シャーロットは、鼻が悪いのではないかしら?」

フェルミは、自分の持っていたミントオイルをシャーロットに手渡すと、俺に嫌われないように、脇の下に吹きかけておけと言った。シャーロットが「そ、そうだね」と、素直にフェルミの言うことに従ったのは、じつに可笑しかった。

自宅に浴室を持つフェルミは、少しの汗臭さも異臭に感じているようだが、二、三日に一度でも行水が出来れば贅沢だと言われる世界で、シャーロットぐらいの感覚でいる方が当り前だ。

何にせよ、二人が仲良く香水を分け合っているのなら、俺が余計な口を出す必要はない。

「ボクは、良い匂いがするかい?」

シャーロットは、俺の鼻に刻印を近付けたので「はいはい、良い

香りで良かったね」と、軽くあしらった。彼女は、満足したのか笑顔でフェルミに感謝していた。

「この街は、日が暮れても明るいな」

俺は、馬車の停留所の近くにあった、ランプのネオンが輝く歓楽街を見ていた。

停留所の付近には、訪れる旅人や、街を根城にモンスター退治を行う地回りの冒険者などを、相手にした宿屋や酒場が数多く集まっている。

「あんなところには、興味を持つてはいけません」

「俺たちは、成人しているんだから、酒場に興味が湧いても良いだろう？」

「お酒なら買って呑めば安くつきます。わざわざ店で呑むものではありません・・・それにアルは、成人式で酔払って、街の警備兵に補導されたことをお忘れですか？」

フェルミは、酒を呑むことが解禁される成人式で、俺が街のシンボル（馬の彫像）に跨って嚴重注意されたことを覚えていた。初めての酒の味は、確かに苦かったものの、冒険者の嗜み^{たしな}として覚えておきたいスキルだった。旅先で交す盃。

「南部では、冒険者同士で酒を酌み交わす風習もあるし、いつか必要になると思うんだ」

「では、ピンク酒場に行かないのであれば許可します」

ピンク酒場とは、普通の酒場と何が違うのだろうか？

「ボクらの街には、街条例で一軒も無かったけれど、禁欲を強いられている冒険者のために、女の子がお酌をしてくれたり、色んなサービスをしてくれる酒場のことだよ。店先の看板がピンクだから、ピンク酒場なんだ」

シャーロットは、首を捻っている俺に説明してくれた。

「しかし娼婦館は、法律で禁じられているから、街を出た村で非法に営業されるものだろう?」

「ピンク酒場は、その手のサービスを提供する店じゃないと思うよ。ボクら女性は、入店すら断られるから、どんなサービスなのか解らないけど、政府公認の酒場だよ」

彼女は、少し考えてから「ボクのお父さんは、常連だから詳しいよ」と、毎月隣町まで通っていると云った。

あのムツツリ魔法使いめえ、地下室に籠ってるくせにピンク酒場の常連なのかよ。

多くの装備と冒険をしても契約者は、彼女たちに手を出すことが出来ない。禁欲生活が続く冒険者には、こうした息抜きの場所が用意されているのか。

「余計なことをアルに教えてはいけません、逆に興味を抱いてしまうでしょう。ピンク酒場には、契約者との契約を狙っている田舎娘も大勢います。アルがお酒の勢いで、変な装備を持ち帰ったら困ります」

さすが幼馴染のフェルミ、俺のことなら何でもお見通しだ。

俺は、内ポケットからミーコにもらった名刺を取り出した。

押し花を漉すき込んだ桃色の名刺には、店名と源氏名だけが書かれていた。

ピンク酒場『魔女の館』ミーコ

俺たちの世界には、女の魔法使いが存在しない。

ミーコの魔法とは、どんな魔法なのか、この街にいる間に調査の必要があると思った。

「あの猫娘、俺に魔法をかけやがったぜ・・・」

俺は、ゴワゴワする股間を押さえて呟いた。

隣街は、俺たちの街が『はじめの街』と呼ばれたように、若い冒険者が各々の目的を持って、各地に旅立つことから『旅立ちの街』と呼ばれている。

ある者は、武勲を欲してモンスターの巢窟『Land of Adventure』を目指し、ある者は、サウスファイア王国の守護のため各地に散って行く。

この街は、王都サウスファイアに次いで冒険者で溢れかえっており、夜の街も賑わいを見せている。

俺たちは、そうした雑踏に逆らうように街外れの教会に辿り着いた。

「よお少年、ずいぶん待たせたじゃないか」

エラハイは、無精髭をあたりながら俺たちを玄関で迎えてくれた。部屋からは、シャボンの良い香りがした。

「もしかして、お風呂があるの？」

フェルミは、挨拶もせず部屋を覗き込んで言った。彼女は、一刻も早く汗を洗い落としたかったのだろ。

「いま、エイミーとユングが入っているから、お嬢さんたちは、一緒に浸かって旅の疲れを落としておいで・・・アルは、俺が監視しておいてやるよ」

べ、べつに覗かねえよ・・・チツ。

エラハイは、フェルミたちを浴室に案内してから、俺が待っていた暖炉の前に現れた。

大きな窓の傍にある季節外れの暖炉には、スープが冷めないように槓の熾火が焚かれていた。

「俺たちの到着を知っていたのか？」

「まさか、アルが街を出たと知らせを受けて七日間、いつ到着しても良いように、ウチの嫁さんが用意してたんだよ」

と、エラハイが言う俺は、神父の結婚が禁じられていることを思い出した。

「神父は、生涯結婚が出来ないはずだろ？」

「ウチは、教会の仕事を始める前に結婚していたからね。最近では、教会の戒律も緩くなっているんだよ。ウチの嫁ナルルは、教会で預かっている娘たちの世話で留守だから、明日の朝にでも紹介してあげよう」

エラハイは、椅子に腰かけてから、俺にも目の前の椅子を座るように言った。

「初めての旅を経験して、男同士でしか話せない話もあるだろう」

俺は、街を出てからの冒険談を聞かせて、自分の戦闘テクニクが未熟だったせいで、契約の装備の力を引き出せず悩んでいることを伝えた。

エラハイは、目標とする冒険者を思い描いて行動すると、自分の目指すスタイルに近付くと教えてくれた。最初は、スタイルから真似るのだと。

俺は、旅で出会った六人の装備と旅するビンセントのことを話し、彼のような冒険者になりたいと言った。

「アルは、『勇者になりたいビンセント』に会ったのかい？ 彼は、勇者の刻印を手に入れるために、幻と言われる契約の装備、アクセサリーの女を求めて彷徨う伝説の冒険者だよ」

「勇者の刻印だって！・・・勇者ってなんですか？」

俺は、勢いで驚いてしまったが、そんな刻印を見たことも聞いた

こともなかった。それに戦士のビンセントは、どんなに足掻こうと新たな刻印が刻まれることがないのは常識だ。

「勇者の刻印は、兜、鎧、籠手、盾、脚、武器の六人の契約を超えて、七人目のアクセサリーを身に付けた、フル装備の契約者に現れる刻印だと言いつたに聞かれています」

「でもアクセサリーは、突然変異的に誕生する契約の装備で、王都の騎士団長しか持っていないよな」

「おつ、良く知ってるね」

「では、騎士団長が勇者なんですか？ 彼が唯一のフル装備を手にした契約者だと、冒険学の授業で聞いています」

エラハイは、小さく首を振ると、もう一つの勇者の条件を教えてくださいました。

「勇者の条件は、清い体（童貞）であることだ。妻帯者で子供のいる彼には、その条件が満たせなかったと言われている・・・まあ勇者が実在しないのだから、その条件すら眉唾だがね」

「勇者の刻印の力スキルって・・・」

「魔法使いを含めて、全ての契約者のスキルが手に入る」

俺は、旅の目的を見つけた気がした。

勇者ならば、俺も『フェルミ鎧』に見合う男になれる。

魔王を倒すならば、誰よりも強い男になる必要がある。

「俺は、まずビンセントのような冒険者を目指します。そしてフル装備となって、魔法討伐を果たしたいと思います」

エラハイは、目を大きく見開くと、涙を流して大笑いした。

「アルつ、そうか勇者になるのか？ 勇者は、アレとか我慢しなきゃなれんだよつ。神父のウチが言うのも変な話だが、女を連れて旅する冒険者の禁欲生活は、想像以上に辛い選択だよつ」

「そ、そうかもしれないけど、今回の旅路だって我慢してきたんだ。それにビンセントだって、けっこう年上だったのに我慢してきたん

だろう・・・俺だって、フル装備になるまで我慢できるさ」

エラハイは、俺の股間を指差してから、さらに大声で笑った。

「少年っ、小娘たちは騙せてもっ、お前の股間から臭うモンスター臭は、じつはモンスター臭じゃないことくらい、男のウチには、お見通しなんだぜっ。若いお前は、お嬢たちの喘ぎ声だけで、イッチャったんだろっつ？」

「ち、違うよ！ これは、荷馬車で乗り合わせた商売女に、無理矢理手でされたんだよ！」

俺は、自分の名誉を守るために声を張り上げて『声だけでイッた説』を完全否定した。

「商売女とは、ピンク酒場の乙女のことか？」

ピンク酒場キターーーー！

エラハイは、立ち上がると笑い過ぎてよじれた腹を伸ばすように、大きく伸びをした。

「そ、その冒険者として聞きたいのだが、ピンク酒場のサービスとは、どんなサービスなのか教えてくれないか・・・お師匠様」

先ほどシャーロットの説明では、核心に迫れなかった話を聞いた。教会では、子供を作らない性行為を禁じており、娼婦館を取締っているが、ピンク酒場で働く女たちは、全て刻印を持つ乙女だけと決められている。つまり清らかな乙女でなければ、ピンク酒場で働けない。教会は、欲求不満の捌け口のために、合法的な性風俗を許可しているんだよ」

なるほど乙女（処女）だけのピンク酒場では、子作りの真似事ができない。ヤッてしまえば乙女の刻印が消えて、すぐに本番行為を行ったと教会にバレてしまう。

「ピンク酒場とは、本番禁止の性風俗と考えていいのか？」

「中には、『永遠の乙女』と呼ばれる、刻印を刺青した偽乙女がいるから、本番行為がないとも言い切れないが・・・勇者を目指すな

ら気を付けないとつ、アルの純潔が汚されてしまつよつっ」

エラハイは、笑いを堪えきれない様子で言った。

「手は、ノーカウントなんだよな？」

俺の真剣な質問にエラハイは、腹を抱えて笑い出した。

「たぶん、ノーカンだろうっ、しかしアルが勇者を目指すのならば、適度な息抜きも必要だっ。荷馬車で出会った女の店に行ってみたら、どうだい？」

赤い月を見て姿を変えた猫娘には、俺も少なからず興味があつた。
「どうして、荷馬車の女がいる店を勧めるんだ？」

「ピンク酒場の乙女、いわゆるピンサカ嬢は、気に入った相手にしか性サービスを提供しないんだよ。名目上は、冒険者と契約をした乙女が、冒険者を接客して出会いを得る場として、政府からの営業許可を得ているからね。荷馬車で相手をしてくれた女ならば、店でのサービスも期待できる」

そうかピンサカ嬢のミーコは、俺の適職を気にしていたが、特定の適職者との契約を望んでいるのかもしれない。

「お師匠様、お願いがございます・・・明日の晩ですが、俺の装備にバレぬようにピンク酒場『魔女の館』に連れて行って頂けませんか」

「初めての冒険では、少年も色々と苦勞しただろうから、息抜きのために案内してやろう」

俺は、エラハイに握手を求めると、彼は「童貞がうつる」と、手を引いて逃げた。

風呂上がりのシャーロットは、エイミーとユングに連れられて、俺たちが話していた暖炉の部屋にやってきた。彼女たちは、濡れた

髪をタオルで乾かすと、スープとパンで夕食の準備を始めた。

「フェルミは、まだ風呂なのか？」

と、俺が言うとエイミーは、いやらしい顔をして、

「彼女は、ずいぶん熱心に体を洗っていたわよ、久々にベッドで寝るんですもの、何か期待してるんじゃないのかしら」

と言った。

「少年は、勇者を目指しているらしいぞ」

「坊やは、勇者になるの・・・童貞がうつる」

エイミーは、指で十字を切りながら笑ったが、契約の装備（処女）は、俺と同類だろうがぁ！

「笑い声が浴室まで聞こえてきましたけど、男同士で何を話していたのですか？」

風呂から上がったフェルミは、金髪の髪を櫛で梳かしながら、笑いを噛み殺しているエラハイに聞いた。彼女からは、清々しいミントの香りがした。

「彼のバトルスカートは、モンスター臭が酷いって話だよ」

フェルミは、俺の下半身に顔を近付けると、クンクンと鼻を鳴らした。

「そうかしら？　むしろマロンケーキのような香がします」

そっちで来たか・・・。

栗の匂いだと聞いたシャーロットも、どれどれと俺の下半身を嗅ぎに飛んできた。

「ボクは、アルの匂いを嗅ぐと落ち着くよ」

シャーロット・・・俺の匂いとか言っちゃってるし。

お前ら知ってて知らんぷりかッ！

13・責任とってにゃん

俺は、エラハイが用意してくれた部屋で目を覚ますと、ドアの外からユングの声が聞こえた。

「フ、フェルミ・・・朝食の時間だから起きなさいって、シスターが呼んでいるよ」

ユングは、なぜかフェルミにしか声をかけなかった。内気な彼女は、男勝りなシャーロットよりも、物腰の柔らかいフェルミのことが気に入っているのだろう。

ベッドを装備に占拠された俺は、部屋のソファで寝ていたので、眠りが浅かった。久しぶりにフカフカの毛布に包まって寝ている彼女たちが、ユングのか細い声で目を覚ますはずもない。

「朝食の時間だから・・・」

彼女は、ドアの前で同じ台詞を何度繰り返していたのだろうか？

「俺が起こすからユングは、食堂に戻っていいよ」

俺の声に反応したユングは、しばらく静かにしていたが、いつまでもフェルミの応答がないと、再びドアをノックしながら、同じ台詞を繰り返した。

「ユング、もう大丈夫だから、部屋に戻っていいよ」

「だけどシスターが連れて来いって・・・」

俺がフェルミたちを起こして、ドアの前に連れ出すと、ようやく彼女も納得して食堂に戻っていった。

「ユングの融通が利かないところは、誰かさんに通じるものがあるぞうだ」

「そうかしら？ ユングは、とても素直で可愛らしいわ。あんな娘がアルの装備になるのなら、私も認めてあげますよ。彼女が『剣』でないのが、本当に残念です」

フェルミは、ユングの融通の無さを『素直で可愛い』と称賛したが、俺は、臨機応変に対処できない人間を『素直で可愛らしい』と評価できない。馬鹿正直である。

俺たちが食堂に入ると、配膳をしているユングの後ろに、彼女と同じくらいの背丈の修道女が立っていた。修道女は、ローブで髪を隠しており、台所から差し込む朝日で顔立ちもハッキリ確認できなかったが、ユングに負けず劣らずの童顔に見えた。

シスターと呼ばれている彼女は、エラハイの奥さんで『脚』の契約の装備、ナルル・L a g・ヒットマンだった。

「エラハイのやつ・・・ロリコンだと言ったのは、本当のだったのか」

ナルルは、ユングより五つ年上で、俺より七つ先輩だ。

女性の年齢を話題にするのは、野暮なことだが、大きな黒い瞳に小さな鼻、光沢を放つ厚い唇は、どう見てもエラハイの娘にしか見えなかった。中年オーラを放つ彼とは、釣り合いの取れる容姿ではない。

「アルくんの話は、夫たちから聞いていましたが、お若いのに二つも契約の装備を持っているなんて・・・凄い（スケベ野郎）ですね」

あれ？　なんか空耳かな？　笑顔のナルルに詰なられた気がする。

「俺は、まだまだです」

「アルくんは、二つじゃ飽き足らず、もっと契約の装備が欲しいの？　欲張り（変態）さんのね」

ナルルは、相変わらずニコニコとしていたが、彼女の言葉には、毒が含まれている気がする。

気のせいかもしれないが。

「ウチの嫁さんは、誰にでも口が悪いんだよ、気にしなさんな」

エラハイは、ナルルの横に立つと、エイミーとユングも呼んで並べた。

「改めてウチの装備を紹介するわ。ナルルは、ウチの嫁さんで『脚』の契約の装備、特殊効果に通常時の三倍で移動できる『神速』を常時発動できる。敵の遠隔攻撃に狙われ易い弓使いには、『神速』が非常に役に立つ」

ナルルは、ローブを下げると真直ぐな黒髪を手で梳かした。

「夫と最初に契約した装備で、遅咲きの彼（詐欺師）に「ウチの装備は、生涯お前だけ」と騙された哀れな女です」

と、笑顔で彼女が言うつとエラハイは、困った顔をした。

装備とのセックスレスな夫婦関係には、何か裏があると思ったが、口約束を理由に結婚を迫られたな。ご愁傷様。

「エイミーは、ウチの教会で斡旋していた契約の装備だったが、色々あってウチが貰い受けた。本来なら魔法使いの娘で、汎用性の高い『籠手』だから引く手数多なんだけどね」

エラハイがエイミーの肩を抱き寄せると、水筒を手にした彼女は、「アルコール中毒が災いしたのさ」

と、身も蓋もなく言った。

水筒の中身は、酒だったのか。どうりで彼女の白い肌は、いつも桜色に上気しているはずだ。今さらだが、エイミーやシャーロットみたいな魔法使いの娘は、透ける様な白い肌が特徴だ。戦闘直後に装備解除した彼女たちが、見事な桜色に肌を染めて美しいとは、好事家の鑑定士が口にした言葉だ。

エイミーの妖艶な姿に見惚れている俺は、好事家の意見に同意する。魔法装備バンザイ。

「それからユングは、子供を作ると刻印が消えてしまうナルルと、神父のウチの養女だ」

娘と契約？

近親相姦ッ！・・・違うのか？

「両親の顔を知らない十一歳のユングは、教会の施設から引取って（拾って）きました。幼く見えたので、私と五つ違いと思わなかった（騙された）わ。私は、夫との契約に反対でしたが、娘（エロ女）が仕事を手伝いたいと言うもので・・・」

奥さんの口撃は、家族にも無差別みたいなので、ちょっと安心した。俺が特別嫌われてるわけじゃないみたいだ。

「あれ？ でもユングのFネームは『ノイエガ』だよな？」

「戸籍上の親子は、契約が禁忌だからね。彼女とは、契約するとき戸籍を分けているんだよ」

「弓使いの夫は、いずれ『弓』との契約を望むでしょうし、ユングなら養父と契るようなこと（偏愛が）ないので、夫を安心して（エイミーの監視役を）任せられますわ」

だから奥さんは、ユングの『初夜』に付き添わなかったのですね。それでユングの特殊効果は・・・」

「ユングには、特殊効果がなかったよね？」

フェルミは、口を押えて驚いた顔をした。

「う、うん・・・『初夜』のときに、一つだけ開発されたんだ」

「そ、そうなんだ」

「娘は、幼く見えても十八歳ですから、こっそり練習（自慰）していたみたいですよ」

「そ、そうですね。私より二歳もお姉さんなんだから・・・」

フェルミだけが新しい特殊効果を開花できないことに、焦りを感じているようだ。

「フェルミも、自主練してみたら？」

俺は、真剣に悩んでいる彼女の肩を叩いた。

「うん」

うんなのかよっ！

「ボクも、寝る前なら手伝うぞ」

手伝うなよっ！

「ありがとう」

それで良いのかフェルミ？

俺は、二人の肩を抱いて咳払いをした。

「契約者の俺が、二人の練習に立ち会ってあげよう」

「童貞臭いアルの参加は、断固拒否します」

顔を真っ赤にして、肩の手を跳ね除けたフェルミは、まるで汚らわしいと言わんばかりだ。

しかし契約の装備のためーらは、俺と同類だって何度も言わせんなよっ！

朝食を済ませた俺たちは、フェルミとシャーロットが、ナルルに契約の装備としての心構えを、俺は、『弓』^{ユシケ}を装備したエラハイに彼らの仕事について、別れて講義を受けていた。

「俺は、エラハイの仕事（冒険）について、何も聞いていなかったな」

「まあ、そんな迂闊なところも含めて、実戦で身に付けていきなさいよ」

エラハイと俺は、庭に出ると弓矢の標的を適当な木に括り付けた。

『弓』スキルを発動できない剣士の俺は、まさか弓矢の指南から受けると思わなかった。

「俺が弓矢の練習するのは、仕事に関係があるの？」

「アルが本気で『勇者』を目指すのなら、美人が集まる王都を目指すのが良いだろう」

「王都には、アクセサリーの女がいるのかい？」

エラハイは、唯一の『アクセサリー』を手にした騎士団長に会って、話を聞くのが手掛かりになると教えてくれた。

「王都まで長い旅をするのなら、遠距離攻撃の技術も身に着いた方が良いだろうね。弓使いや魔法使いでもない限り遠距離攻撃は、スキルに頼らず技術を磨くものだよ」

「遠距離攻撃は、冒険者なら身に付ける技術なのか」

「ウチの仕事を手伝うなら、弓矢が必須だからね」

一体どんな仕事なんだろう？

「ウチの仕事は、望まぬ契約に縛られた契約の装備を、不当に所有する契約者から解放（契約解除）することだ」

「つまり敵は・・・対人戦ってことか」

「戦闘は、可能な限り回避しつつ、装備解除中の装備を連れ出して、神父の俺が契約解除を行う。もしものときは、相手が同じ契約者だから、モンスターよりも手ごわいよ」

契約解除は、契約者なら誰でも行えるものの、装備の命に係わることでなければ、神父以外の施しが許されない。エラハイの仕事は、神父らしい生業だ。

「俺には、難しそうな仕事だね」

「アルには、後方支援を頼みたいから、こうして弓矢を仕込もうと思ってる」

俺は、的に向かって両足を踏み込んだエラハイから離れた。

パンっ！　パンっ！　パンっ！

彼の放った三本の矢は、的の中央を射抜いた。

「弓使いが的を外すわけもないが、二射目からノーモーションで見事に三矢とも命中かよ」

「そうだ、せっかくだからユングの特殊効果『男嫌い』を見せてやるっ」

エラハイは、庭の隅にいたエイミーを的と自分の間に立たせた。

「ち、ちよっと、エイミーが危ないだろう？」

彼は、俺が止めるのも聞かずに、エイミーの胸元に矢を放った。

パンっ！

放たれた矢は、エイミーの身体を貫通して、彼女を傷つけることなく的に命中した。

「これが『男嫌い』の特殊効果だよ。女の体を透過して、男にだけ通常三倍のダメージを与える。このスキルで装備中の契約者を射れば、装備を傷つけずに契約者のみを攻撃することが可能なんだ。無属性だからアルの『鎧』が付加している攻撃耐性も無効になる」

「ユングは、初めてなのに、良い特殊効果を得ましたね」

エラハイとの訓練初日は、日が暮れるまで弓矢の練習で終わった。

彼には、俺の弓筋が良いと褒められ、近いうちに実戦で鍛えることになった。

俺は、夕食の後片付けをしている女性陣の様子を見ながら、エラハイにピンク酒場を案内する約束を確認した。彼は、ナルルが施設の手伝いに出かけるタイミングを見計らっていた。

「先ほどからジロジロと、何を見て（視姦して）いるんですか？」

「今夜は、施設の手伝いに行かないのかい」

「私が施設に行かないと、何か問題（疾しいこと）でもありますか

？」

「アルが酒を呑んでみたいって言うから、夜の街を案内しようかと思ってるねえ」

エラハイは、彼女と視線を合わさぬように、横を向いて話し始めた。

「俺、お酒弱いからエラハイに付き添ってもらおうかと思ってさ」

「アルは、さっそく歓楽街に興味を抱いていますね」

フェルミは、俺に疑いの眼差しを向けた。

「な、なんだよ、普通の酒場になら行っても構わないのだろう？」

「それは・・・確かに、そう言いましたけど」

「たまには、アルを一人にしてやりなよ。あまり契約で縛りつけると、契約者の心が離れてしまうよ」

エラハイは、皮の鞆を持って立ち上がると、ナルルに先に寝るように強い口調で命令した。

俺たちが出て行こうとするとナルルは、暗い顔で見送るフェルミに言った。

「アルたちが変な酒場に行くようなら、帰って来たら一緒に怒って（処刑して）あげるわ」

「うん、ナルルさんお願いします」

こんな短期間でフェルミを手懐けるなんて、ナルル恐ろしい女だ。俺は、女性陣に見送られて後ろめたい気分になったが、猫娘への好奇心が勝っていた。

歓楽街までの道すがら俺は、エラハイに猫娘の話に興奮気味に話していた。

「ミーコは、赤い月明かりに伸びをすると、身長までスウーっと伸

びた気がするんですよ。素性を知っていた御者の男に事情を聞いても、夜になると猫になるとしか答えないし、凄く気になる女です。あれは、モンスターの種類じゃないかと思っています」

俺の話を黙って聞いていたエラハイだったが、彼女をモンスター呼ばわりしたとき、大きな溜息を吐いた。

「男同士なんだからさあ、誤魔化す必要はないんだよ。手でイカされたくらいで、相手のピンサ力嬢をモンスターとか・・・若いんだから、恥かしいことじゃないよ。それとも、ミーコの良い女だった自慢？」

エラハイは、俺の話しを誤解している。

自分の女でもないピンサ力嬢を、誰が自慢なんてするかよ。

自慢する奴を知っているが、友達の友達で俺のことではない。

「本当なんだよ。最初は、チューブトップの上着が縮んでいると思っただけど、どんどん丈が上がると、ヘソまで見えてさあ。ユングより背が低かったのに、こちらに手を振っているとき、ヘソ出しルックで長身の良い女になってた」

月明かりのミーコは、二、三十センチ身長が伸びた気がする。

「ほら、最後に良い女と言ってるよ」

「乳臭いガキが、目の前で大人の女性になったんだよ。良い女っていうのは、大人の女性を意味してるんだ。夜の街でミーコに会えば、俺の見間違いなのかハッキリするよ」

俺は、赤い月が照らす夜道を歩きながら、彼女の話ばかりしていた。

「アルの話が本当ならば・・・」

本当に決まっている。

「ミーコは、魔族に属するモンスターだな」

魔族とは、城の番兵と呼ばれるモンスターで、人間に近い姿形と人語を解するだけの知能を持っている。ただ、長い歴史で交わらな

かった人間とモンスターには、お互いに理解して、協調するだけの言語を持ち合わせていなかった。

ただ言葉を理解できるだけで彼ら魔族の本質は、草むらで惰眠を貪り、悪戯に人間の命を奪うモンスターと何も変わらなかった。

「ミーコが魔族・・・」

俺は、あの猫のように甘える仕草を思い出して、自分の顔を叩いて否定した。

「政府公認のピンサカ嬢は、定期的に刻印を教会でチェックされている。魔族が街中で働いているなんて可能性は、万が一にもゼロだと思っね」

「刻印が刺青の可能性は？」

「それは、否定できないね」

ピンク酒場『魔女の館』には、驚くほど呆気なく辿り着いた。

歓楽街の入口、馬車の停留所の目の前にあるレンガ造りの『魔女の館』には、魔法使いの黒いローブを羽織った女たちが並んでいた。「この店が『魔女の館』だったのかあ。目立つ店だったけど、自分の街でピンク酒場に通う勇氣は、さすがにないから気にしてなかったよ・・・」

ピンク酒場に通うなら人目を避けて、隣町まで出かけるものだと教えてくれた。

「確かに入店を見られるのは、ちょっと恥ずかしいかも」

「・・・今日は、アルの案内だからね」

エラハイが店の前で、女の子を値踏みしていると、短髪で青い髪、胸の小さな少女に狙いを定めていた。ユングに似ている控えめな感じの娘だ。ド変態野郎。

「あれ？ 神父さまじゃないですか・・・どうしたんですか？」

声をかけてきた恰幅の良い紳士は、エラハイの知り合いだった。
「あぁっ！ この冒険者に道を尋ねられまして・・・ほら、アルフレッドくん、ここがピンク酒場ですよ・・・」
「どうですか、暇なら私と飲みませんか？ もちろん奢りますよ」
「そ、そうですかぁ・・・アル、一人で愉しんでみてくださいね」
「どうやら彼は、幼女っぽい女との、養女プレイを諦めたようだ。
俺は、紳士と街に消えて行く彼の後ろ姿に十字を切った。

アーメン

俺は、店の従業員に名刺を渡すと、本日から出勤なのに、もう指名が付いたと大喜びでミーコの席に案内してくれた。

席に座ると案内してくれた従業員が、酒とおしぼりを運んできて、前金に二万Gを支払った。

「彼女は、何処の出身なのか知っているのか？」

「ミーコさんは、街を渡り歩きながら仕事していますから、出身まで解りませんね・・・」

俺は、話しを渋った従業員のポケットに、一万Gを詰めると口の回りが良くなった。

金は、色んな物の潤滑油になる。

「昼間の顔を見たのだが、夜の顔と違って幼い女だった・・・ここに現れる女は、俺の見た幼い女と同一人物か？」

「ミーコさんには、色んな噂がありまして、どれが本当のことか解りません。ですが、旦那の見た幼い女は、ここに来る大人の色気ムンムンの女と同一人物です」

「そ、そうか・・・色んな噂とは？」

ミーコさんには、魔族の血が混じっている。

従業員は、それだけ言うとマイクを持って立ち上がった。

『ミーコさん、ミーコさん、番号十七番の御席で指名が入りましたあ！ 本日も魔女の皆さん張り切ってます、閉店までお客さんと冒険しちゃってくださいっ！ ハッスル、マッスル、頑張ってます』

なんだそれ。

馬鹿じゃねーの。

ちょっと引くわ。

と思った人は、ピンク酒場に行ったことない人。

「マジで、あんな恥かしい呼び出しするのか・・・勉強になるな」

俺の席には、呼び出しから十五分待たされて、会ったことのない長身の女が現れた。

ミーコだとしたら全くの別人しか見えなかった。

「どうも、ご指名頂きましたミーコです。本日は、宜しくお願いいたします」

女は、語尾に『にゃん』も付けなければ、礼儀正しく跪いて頭を下げた。

俺の知っているミーコは、もっとガサツな女だった。

「お、お前は、誰なんだ？」

「お客さんは、写真指名だったのかしら・・・ごめんなさい、あれ若い時の写真だから」

「それにしても違い過ぎるだろ？」

「オバさんには、興味がないのかしら。指名しておいて、チェンジは勘弁してくださいね」

ミーコは、俺の隣に座ると、足を組んでタバコに火をつけた。横柄な態度は、昼間のミーコと似た感じもする。

「いいや、前に会ったミーコと違いすぎるよ」

「何よ・・・貴方、もしかしてストーカーなの？」

夜のミーコは、ピンク色に近い赤毛と縦に開いた瞳孔こそ、昼のミーコに通じるものがあるが、身長は、俺よりも高く、胸は、フェルミ基準で三割増しだった。夜の女は、骨格から化けるなんて聞いたことがない。

ミーコは、混乱している俺を訝しげに覗くと、タバコを乱暴にもみ消した。

「私、一回目のお客さんには、サービスしませんよ・・・あれ？」

貴方どこかで会ってるわね？」

「昨日、荷馬車でお世話になった者です」

「ああ、そうだわ、あのときの剣士様ね」

「はい、その剣士です・・・」

「早く言って頂戴よお、お酒頂いても宜しくて？」

「何でも、好きな物飲んでください」

「ボーイさんあゝ、ドンのペリー提督一本持ってきてえゝ」

俺は、ミーコに財布を奪われると、黒船が大挙して来航した。つて、ぜんぜん上手くねーよ。

「だからねすね。俺だってえゝ、がんばっているのれすよ・・・うつ

閉店時間を過ぎてても居座った俺は、ミーコに肩を支えられてネオンの消えた歓楽街を彷徨っていた。

「はいはい、剣士様は、頑張ってますよ」

「ミーコさんっ!」

「は、はい」

「貴方は、いったい何者れすか？」

俺は、彼女の両肩に手を置いて正面に向き直った。

「私は、ミーコです。猫のような女ですよ」

「違いますっ！俺にだけは、隠し事しないでください」

「酔い過ぎですよ・・・聞いたら、私のこと守ってくださいですか？」

「全力で守りますよお」

「だったら、今からホテルに行きましょう」

ミーコ・・・ミアンの瞳は、赤い月が沈んでも輝きを止めなかった。

誰もいなくなった歓楽街の中央通りには、俺と彼女しかいなかった。

俺は、迂闊だったのかもしれない。

赤い月が沈んで太陽が昇るまでの数時間、魔物が支配する深闇の時間は、モンスターの魔力が跳ね上がる。

目を開けると薄暗い照明が、時間の感覚を鈍くさせた。

タバコの匂いが充満する部屋は、エラハイの教会でないのが明らかだ。

「また酒に吞まれてしまった・・・俺は、酒に弱いらしい」

ベッドの上で半裸の体を起こした俺は、赤い壁紙の部屋に見覚えが全くなかった。

そもそも旅立ちの街には、俺の知っているところの方が少ない。

俺は、シャワーの音が聞こえる方へと歩み寄ると、擦りガラス越しの人影に話しかけた。

「ミーコ・・・ミアンさん昨夜は、スミマセンでした」

シャワーを止めるキュツという音は、俺の過ちを責めている気がした。

「怒ってますか？」

人影は、首を大きく振っている。

俺は、どんな謗りを免れない。

俺は、浴室から出てくる彼女に背負向けて、棒立ちになってしまった。

「剣士様、責任とつてにゃん」

俺が振り向くと、胸の辺りから見上げる猫娘がいた。

エラハイのことをロリコン扱いしてスミマセンでした。

14・魔王はいるにゃん

俺は、教会の暖炉の部屋で、エラハイとナルルのヒットマン夫妻に事情を話していた。

「朝帰りしたと思えば、正体不明の娘を連れ帰るとは、どんな神経しているのだから。アルは、修行をしに来たのか、遊びに来たのか。お嬢ちゃんたちが買物から帰ってくる前に、何かしらの結論を出さないよ、刃傷沙汰になりかねないよ」

エラハイは、呆れた顔をして、庭でユングと遊んでいるミーコを窓から眺めていた。

幸いフェルミとシャーロットは、街に買物に出かけて留守だったので、ミーコの処遇について、夫妻に相談の最中だった。

「最初は、昼と夜で姿を変えるミーコの正体を探ろうと、色々話を聞くつもりでいたけど、あまりの変貌ぶりに混乱してしまって、知らず知らず酒も呑まされちゃって・・・」

「それで？」

ナルルは、ティーカップに紅茶を注ぎながら、俺の顔を見ずに言った。彼女は、言い訳を聞かないから、話を先に勧めると手を煽った。

「変身の謎については、解らなかつたです」

「それは、あとで本人から（拷問にかけて）聞き出しますから、まず彼女を連れてきた理由を説明しなさい。外（愛人）のことを家庭に持ち込む（連れ込む）のは、甲斐性なしのすることですよ」

「ミーコは、誰かに命を狙われていて、ピンサ力嬢をしながら王国全土を逃亡中らしいです」

「犯罪者じゃないのかい？」

エラハイは、台所の食器棚の奥から緑色の液体が入った小瓶を取り出して、机の上に置いた。

「あんな商売をしていますから、犯罪絡みかもしれませんね。だけ

ど、命を狙われてると聞いて、無視できないじゃないですか？」

ナルルは、小瓶の液体を注射器に移しながら、命を狙われる原因が問題だと言った。

「刻印を失った責任を取れて・・・責任取って、衣食住の面倒みるって・・・」

エラハイは、肘掛け椅子に俺の両手を縛りつけた。

「アルは、ミーコの刻印（処女）を奪った見返りに、結婚を迫られたわけだ？」

「正直、刻印を奪ったのかも記憶が曖昧なんだけど」

「酒を呑んで酔った拳句、裸のピンサ力嬢と一夜を過ごしたのだから、何かあった（ヤツた）と考えるべきです」

ナルルは、注射器のガラス管を指で弾いて気泡を抜いた。

「お師匠様、その注射器は、何でしょうか？」

「これは、ラツパ草から抽出したクスリだよ」

「原料じゃなくて、何をするつもりですか？」

「ラツパ草は、別名『しゃべりそう』と呼ばれている。主には、契約の装備おんなに不当な暴力を振るう契約者が罪を認めない場合、その罪を告白させるため使用するんだ・・・ようは、自白剤のようなものだね」

エラハイは、庭の見える大きな窓のカーテンを引くと、暗い方が効果的なんだと笑った。

「そのクスリで昨晚の記憶を呼び覚まそうとか、そういうことですね・・・痛くないですか？」

「盗賊の拷問にも使用するから、死ぬほど痛いよ」

「きつとエラハイも注射を先にしたら、後ろに「死ぬほど痛かった」と報告するタイプだ。」

「そうであってほしい。」

ナルルは、あまり脅かしたら可哀想だと、注射器と同じ液体を紅茶に落として希釈した。彼女は、その紅茶を俺の口元に持つてくると、ニッコリと笑った。

「アルくん（エロガキ）、注射前に経口投与することで、体内に入ったときの痛みが緩和されますわ」

「そ、そうなんですかつ、有難うございます」

「ちょっと（死ぬほど）苦いですよ・・・神罰を喰らいやがれ」

お、奥さん、本音出ちゃってますよ。

ゴクゴク・・・んがッ！

これは、後から聞いた話だが、盗賊の拷問に用いるとき、気負失うほど苦いラッパ草を煎じて飲ませるそうだ。これは、フェルミに偽って、ピンク酒場に行った俺への拷問だ。

「剣士様、先にシャワー浴びてください」

ピンク酒場を出た俺たちは、深闇の歓楽街を彷徨った末に、なぜかホテルの一室にいた。

俺は、昼と夜の顔を持つ彼女の秘密が知りたくて、『魔女の館』に会いに行ったはずだ。

出会ったばかりの女に誘われてホテルまで来た俺に、疾しい考えがなかったと言えば嘘だ。

しかし勇者になると決めた俺は、純潔を守ると固く誓ったばかりだ。

フェルミとシャーロットの顔が一瞬過った。

「だが手は、ノーカウントだっ！」

俺は、ピンク酒場で浴びるほど酒を呑んでいたの、意識が朦朧せうろうとしていたが、エラハイの言った「ノーカンだろっ」との言葉を信

じて、欲情のままに行動することにした。

そもそも酔払っている男が、ピンサ力嬢にアフターを誘われて、断れるはずがないのだ。俺の意思が特別弱いわけじゃない。

「いいかアルっ！俺は、勇者になるんだっ！だから本番はなしだぞ・・・いいな、ちよつとだけは、絶対になしだぞ」

俺は、自分に強く言い聞かせていた。ちよつともなしだ、ちよつとだけだぞ。悩ましい。

「シャワー浴びないのなら、私が先に浴びちゃうわよ？」

ミーコ・・・いや、夜の彼女には、ミアンの呼び名の方が似合っている。彼女は、羽織っていたコートを脱ぐと、黒いセパレート水着のような服装になった。

「その服は、荷馬車で見たときと同じ服なのか？」

「ええ、昼間の私と共用出来る服装は、こんな服しかないのよ。べつに露出狂とか、見せたがりではないのよ」

俺は、頬を赤らめて言い訳する年上の女を前にすると、自分も大人になった気がした。

「ミアンとミーコは、同一人物に見えないね」

「・・・気になるかしら」

「俺は、ミアンの方が美人だと思うよ」

「昼間の私もミアンよ？」

「夜のミアンが好きだ」

ミアンは、本気にするわよと笑ったが、俺が彼女の肩を引き寄せ、乱暴にベッドに叩きつけるように倒すと、笑顔が消えた。

俺の気持ちに偽りはない、夜のミアンの方が色々としてくれそう
で好きだった。

まあ、そつち的な方向で大好きだ。

「剣士様は、本気で魔王を討伐してくれる？」

ミアンは、ベッドの上でロングブーツのファスナーを下しながら、仁王立ちする俺を見上げた。

俺は、彼女の真剣な眼差しに、思わず顔を背けてしまった。

「いずれは、伝説の大剣豪ルロイド・S W・コーデアルを超える剣士となる」

「ルロイドを超える・・・懐かしい名前ね」

大剣豪ルロイドは、俺たち『剣士』の契約者の憧れであり、魔王討伐を目指して『Land of Adventure』に進軍した冒険者のリーダーだった。彼は、一介の剣士でありながら、騎士や英雄などの契約者にも一目置かれる剣の腕前で、モンスターを総べる魔王の存在を信じて、世界を旅した伝説の男だ。

魔王討伐は、冒険者究極の目標と言われながら、魔王の姿を見た者も、その居城すら発見した者もない。

ただ古の^{いにしえ}經典には『神と人間を分つ怪物の王は、二と三月交わる真闇^{しんやみ}の城にて詭計^{きげい}を弄する』と、魔王がモンスターで人間を襲っていると綴られている。

「魔王はいる。そして、俺が倒す」

ウエディングでは、少なくともサウスフィア王国では、教会の教えが全てである。

魔王討伐は、俺みたいな剣士と契約してくれたフェルミの夢だから、必ず叶えてやると決めている。

「初心者の剣士にしては、ずいぶんと自信があるのね？ ルロイドは、魔人メエリドにも勝てなかったのに、何か秘策でもあるのかしら？」

素足のミアンは、衣擦れの音を鳴らしてシルクの布団に潜り込んだ。

ちよっとも我慢できないかもっ。

「お、俺は、魔王討伐を目指して勇者になるつもりだ・・・メエリドって誰？ 魔人って何？」

「私を本気で愛してるのなら、こちらを振り向いてください」

俺は、ゆっくりとミアンに視線を落とすと、ベッドの上には脱いだ衣服や下着が散乱していた。彼女は、胸を腕組みで隠しており、下半身をシルクの下に忍ばせていた。彼女の鼻腔を擦るアルコールの甘い匂いと、タバコの香りは、フェルミのミントの香りとも、シヤールツテの太陽の匂いとも違った。

「勇者になるには、その・・・清い体で・・・」

て、手、手以外もノーカウントだろうか？

勇者の夢をキャンセルするべきだろうか？

「大剣豪ルロイドは、私の夫だった男です」

「この際、元旦那のことは、忘れられて・・・大剣豪の奥さん？」
大剣豪ルロイドの冒険談を聞かされたのは、俺が十歳になり刻印が刻まれたときだ。彼の冒険談は、『剣士』の刻印を持つ者が教会に集められ、契約者名簿に登録すると、必ず渡される教本に書かれた物語だった。彼の生きた時代は、俺のオヤジが鍛冶屋を始めた頃だから、三十年前のはずだが。

ミアン・Leg・コーデアルは、確かにルロイド・SW・コーデアルと同じFネームだが、彼の娘ではなく、妻だと言うのなら、いったい何歳なんだよ。

「私は、彼の契約の装備であり、プライベートな関係でもあったのよ。彼は、私との約束を守って、魔王討伐の旅に出たわ」

「ミアンとの約束？」

「私は、ある男に命を狙われているのよ。ルロイドは、その男と戦って死んだ・・・魔人メエリドは、魔王の息子よ」

「だけど契約者が死んだのなら、ミアンだって・・・」

「そうね、一度は死んだわ」

「死んだ人間が生き返る？」

ミアンの話は、夢物語を聞かされている気分だ。

ミアンは、俺の股間の辺りに左足を伸ばした。

「剣士様は、私を守ってくれるのよね？」

不用意な約束は、後々の後悔を招く。

「ああ・・・俺は、ミアンを守る」

不意に電気が消えて、ホテルの窓辺に青い月光と紫の月光がクロ
スした。

自分の思い通りに体が動かない。

「魔王を倒してくれるのよね？」

薄明かりの中で彼女の眼だけが赤く輝いていた。嘘が吐けない。

「ま、魔王を倒すのが、俺の目標だ」

「剣士様の本音を聞かせてもらったわ・・・私の左足の甲を見て」

ミアンは、本物の魔女かもしれないと思った。なぜなら俺は、このとき彼女の言葉に逆らうように、目を瞑ろうとしたものの、目蓋まぶたを切り取られたかのように、瞑ることが出来なかった。深闇は、モンスターモンスターの魔力を跳ね上げる。『魔女の館』の従業員は「ミーコさんには、魔族の血が混じっている」と忠告していたのに、迂闊な男だ。

ミアンの左足の甲には、ペンタグラムの刻印があった。それは、フェルミヤシャーロットのように、中央の五角形に俺の名前だけが刻まれた、美しい刻印ではない。

ペンタグラムの角にある三角形には、歴代五人の所有者の名前が痛々しく刻まれている。まるで契約者が去り際に、憎しみを込めて掻き筆かきつたようだ。彼女のペンタグラムは、現所有者の名前が刻まれるべき、中央の五角形のみが空白だった。

「契約の装備は、契約解除ができる人数が、生涯五人と決まっているのよ」

「・・・六人ではないのか？」

俺は、遠退く意識を引き留めようと、必死だった。

「六人目は、契約解除が出来ない。契約解除するには、べつの契約者のキスにより、契約者の刻印を消去するのだけど、契約者が逃げ込む先は、契約の装備の思い出の中、五芒星の隅っこ」

「六人目の契約者は、逃げ込むところがない・・・六人目の契約者は、どうなるんだ？」

「六人目の契約解除すれば、その契約者は、死ぬまで地獄の業火に焼かれ、死んでからの安寧も約束されない。そして六人目の契約者は、契約の装備と『死』も共有することになる」

「装備の『死』が、契約者の『死』だと・・・聞いたことがなかったよ」

「大剣豪ルロイドが死んだ日、ピンサカ嬢として、魔王から逃げ回ると決めていたのに・・・お前の望みが確かなら、最後にもう一度だけ、父と兄に反抗してみようと思った」

俺は、ミアンの刻印に吸い込まれる様に、彼女の左足の甲に顔を近付けると、締めりのない口は唾液を垂らしながら、真っ赤な舌を伸ばした。彼女は、俺の舌が親指に触れると、シルクの下に隠された脚と脚の間を手で押えて恍惚の表情を浮かべた。

「お前は、私との契約により、大剣豪が目覚めさせた七つのスキルを手に入れる・・・」

大剣豪の七つのスキル・・・。

「私は、お前を最後の契約者にするわ。そして、愛しのルロイドの仇、兄の魔人メエリドを討つッ！」

彼女は、激しく指を動かすと、俺の口元に刻印を乱暴に押し付けた。

「舐めなッ！ この豚野郎ッ！」

輝く刻印は、俺の名前をペンタグラムに浮かび上がらせた。

俺は、下半身を生温い湯に浸けたような、失禁をしてしまったような感覚になった。

『L a g』は、脚の装備だ。

庭から聞こえるユングとミーコの笑い声・・・フェルミの声も聞こえた。

契約の装備の三人は、窓の外で仲良さ気に話していた。

内容までは聞えなかったが、時折の笑い声で、そう感じた。

シャーロットは？ 彼女は、子供好きなのに子供に好かれない。不器用なところは、幼い頃から相変わらずだ。

「・・・魔王の娘・・・とにかく彼女の刻印を確かめて・・・」

俺は、ぼんやりと目を開けると、近くて遠い場所からエラハイの声が聞こえた。夫妻は、ミーコの正体に気が付いたようだ。俺にだつて理解できた。

だけど、ピンサカ嬢の彼女は、男を誑たし込む術を心得ており、勇者だ、魔王討伐だと誇大妄想に取りつかれた俺に、夢物語を聞かせただけかもしれない。

でも酔った勢いでミーコの刻印を奪ったのは、紛れもない事実で、彼女は、俺の契約の装備だ。

「そんなことは、解っているさ」

俺は、ズキズキと痛む頭を叩くと、慌てる夫妻に言った。

「アルくん、魔王が実在しており、ミーコさんが魔王の娘であるの

なら、事は重大です。私たち夫婦では、どうにも判断がつきかねます。すぐに中央教会の大司教に知らせて、あの娘は、神の名のもとに神罰を与えるべきです」

ナルルの言葉は、本気だろう。

ミーコを裁くとは、モンスターとして処理すると言うことだ。

エラハイは、険しい顔でカーテンの隙間から庭にいるミーコを見ていた。

「なあエラハイ・・・俺が話したことだけど、俺の懺悔だと思ってくれないか」

「懺悔・・・ウチに赦しを求めているのか？」

「ここは教会で、エラハイは神父だろう。俺の告白が懺悔ならば、神父のエラハイは、口外できないはずだよ。ミーコは、俺が酔払った拳句に契約した、哀れな女の子だ・・・」

ナルルは、胸の前で十字架を切ると、俺の頭に手を置いた。

「アルくんは、彼女のことを守りたいのね。けれど、フェルミさんたちは、それを受け入れてくれるかしら？ 彼女の話が本当ならば、魔王や魔人の標的となりますよ・・・辛い選択は、アルくんを求道者にするわ」

俺は、小さく頷くと両手を組んで祈りの言葉を囁いた。

「アルの心意気は、よく解ったけれど。お嬢ちゃんたちには、なんて話すつもりだ？」

「彼女たちには、そのまま話すよ」

「それでは、アルがピンク酒場に行ったことも？」

「そもそも嘘を吐いて、隠れて行動したのは、間違いだったよ。装備と契約者は、同じ旅の仲間だもんな・・・契約者の俺は、そんなことすら忘れていたよ」

エラハイは、顔を手で覆うと「俺から事情を説明しよう」と言うてくれた。

フェルミは、ミーコを施設の子供だと思っていた。
だから彼女と笑って遊んでいたのだ。
シャーロットは、話を聞いても驚かなかったようだ。
彼女がフェルミを慰めたと聞いて、切なかった。

「だから、歓楽街に興味を持つてはいけなさと注意したのです」
フェルミは、ナルルと夕食の準備をしながら、『反省』と書かれた札を首から下げて、正座している俺に言った。台所で包丁を片手立つ彼女を見るのは、初めてだったので、包丁の用途を間違えないでほしいと思った。

「す、すみません。反省しております」

「魔王を倒すはずが、なんで魔王の娘と契約しているのですか？」

アルは、馬鹿ですか？」

彼女は、俺の方に向き直ると、包丁の切先を上下に振った。

「馬鹿かもしれませんが」

「だいたいミーちゃんとの契約では、大剣豪の七つのスキルが手に入ると言ったのに、無音歩行『忍び足』はともかく、『逃げ足』なんて旅人でも発動できる特殊効果しかなかったのでしょうか？ アルは、お調子に乗って勇者になるとか、魔王を倒すとか、夢みたいなこと言うから騙されたのです・・・ミーちゃんが」

ミーちゃんって、まんま猫の名前じゃないか？ それに魔王討伐は、フェルミの夢だろう。騙されたのは、ミーコの方なのかよ。なんとも切り返しづらい話だな。

「ミーコは、嘘なんかついてないよ。魔王はいるにやん」

ミーコは、肉球のようなプニプニした掌で、フェルミの足を撫で回している。フェルミは、ユングのように、自分より幼く見えるミーコのことにも、気に入っている様子だ。保母さん気質なのか、掌（肉球）の魅力に負けたのか。ミーコは、人垂らしの術に長けているのかもしれない。

「ミーちゃんは、悪くないわよ・・・悪いのは、無計画に契約したアルだけですっ!」

彼女は、シャーロットとの距離感が埋まらないのに、新人に優しいのが不思議だ。

「エラハイと鑑定士が、もう一度『脚』を鑑定したいと、聖堂で呼んでいるよ」

シャーロットが廊下から声をかけてきたので、俺は、ミーコを呼び寄せると、痺れた脚を引き摺りながら聖堂に向かった。シャーロットは、ミーコを手と足で追い払うと、俺を廊下の壁に押し付けた。「お願いがあるんだ・・・ミーコとの契約解除する方法を探して、すぐに契約を解除すべきだ。ボクは、嫌な女だと思われても仕方がないが、嫌な予感がするんだよ」

彼女には、六人目の契約が解除不可能だと告げてから、肩を引寄せて背中に腕を回した。

「どうした？ あんな猫娘が怖いのか？」

シャーロットは、俺の腰に手を回したので、しっかりと抱き合う形になった。

兄妹のような関係だった俺たちが、人目を忍んで抱き合うなんて

「ボクは、怖いんだよ」

彼女は、俺の胸に顔を埋めて呟いた。

「シャーロットは、俺よりも強いだろ？」

「ボクは、フェルミも、ミーコも、エイミーも、ユングも怖いよ」

「女嫌いなのか？ だけどモーリたちとは・・・」

「アルは、ボクのこと何も解っていないね」

シャーロットは、首を少し傾げると、目を瞑って唇を軽く開いた。俺の鼻息が前髪を揺らすと、背伸びをした彼女を小さく感じた。子供の頃は、彼女の身長の方が、少しだけ高かった気がする。剣を手に持っているときの彼女は、俺よりも堂々としている。

「・・・好きだと告白されていない」

「もちろんシャーロットのことは、大好きだよ」

シャーロットは、俺にとって大切な人で、大事な人で、本当の妹のように愛している。

「それは、ボクが言わせたことだ。ボクには、夢があると言っただけど・・・それは、叶いそうもないね。フェルミは、アルのために慣れない料理も頑張っているのに、こんなやり方は、フェアじゃないかな。ボクは、いやらしい女だよ」

シャーロットは、俺に背を向けて立ち去った。

「手は、ノーカウントでいいよね・・・ごめん」

俺は、迂闊な行動を慎むよう自分に言い聞かせた。

「剣士様、どうかしたにゃん？」

ミーコは、聖堂の入口で待っていた。

「いいや、何でもないよ」

「けど、寂しい顔しているにゃん」

彼女は、俺の手を握って自分の胸に当てた。

「ミーコは、オッパイが小さいけど、形が良いと言われているよ。」

剣士様の気分が落ち込んでいるなら、慰めてあげる。好きなだけ、ミーコのオツパイを触ると良いにゃん。それとも触ってほしいのかにゃあ〜」

幼く見えても彼女は、年齢不詳の魔女なのだ。

だけど今は、シャーロットのことが気になって、甘える気になれない。

それにミーコは、魔王から逃げるためにピンサカ嬢に身を賣っていたが、大剣豪の妻だった女だ。

「ミーコの気持ちは有難いけど、自ら進んで、慰み者になる必要はない」

俺は、ミーコの猫っ毛を更にクシャクシャした。

「剣士様は、優しいよ。けどスッキリしたいときは、いつでもお姉さんに相談するにゃん」

そのときは、よろしくお願いします。

聖堂に赤い月光が差し込むと、四つん這いのミーコは、猫が伸びをするように尻を持ち上げた。太陽に細めていた目を大きく開けると、縦に開いた瞳孔が輝き始めた。

間近で見た変化は、想像以上にモンスターのそれだったので、話しを聞いていたエラハイも、彼の馴染みの鑑定士も、腰の剣に手を当てて身構えた。

「ふう〜っ」

立ち上がったのは、ミアンだった。

「これは・・・与太話だと思ったが、さすがに信じるしかないか」
エラハイは、顎の無精髭を撫でると、困り果てた顔で言った。

彼の連れてきた鑑定士は、昔からの知り合いで口の堅い男だと紹介された。鑑定士は、装備となったミアンの『脚』に呪文をかけた。「昼間は、『忍び足』と『逃げ足』だった特殊効果が、エラハイ殿

の言つとおり変化していませんな・・・移動系は、全部で四つで、神速を超える『超神速』、ジャンプ時の滞空時間を延ばす『飛行脚』、水上歩行のできる『水上脚』、ボックスステップの距離を延ばす『背面脚』です」

鑑定士は、見たことのないスキルを鑑定するのに言葉を慎重に選び、ハンカチで流れる汗を拭いていた。

「ミアンは、本当に大剣豪の『脚』だったね」

と、俺が言つとミアンは、当然だと言わんばかりに、ググツと脚を締めつけた。サド気がある装備だ。

「次に攻撃系ですが・・・『悪魔の嘆き』『悪魔の怒り』『悪魔の誇り』・・・残念ながら名前しか解りません」

鑑定士は、申し訳なさそうに呟いた。

「あとは、もう結構だ。彼女が大剣豪ルロイドの契約の装備ならば、アルを裏切ることはないだろう」

なるほど、それを調べていたのか。

「これでミアンは、正式に俺の装備だよな？」

俺たちが装備解除するとエラハイは、神父の服装に着替えた。

彼の神父姿は、お世辞にも似合っている言い難かった。

「簡単ではあるけれど、これから契約式を行おう・・・ここは教会で、俺は神父だからね」

鑑定士が見届け人となり、四人だけの契約式だった。

ミアンが誓いの言葉に涙したのは、少し意外だった。

事件は、ミーコとの契約から三カ月後、エラハイと山賊の根城に盗品回収の冒険出かけるときに起こった。

仔羊のような少年は、生き別れた家族を捜して、旅立ちの街の雑

踏に怯えながら、人々に妹の消息を訪ね歩いていた。

15・お兄ちゃん怖いにゃん

「今日の山賊討伐は、お嬢ちゃんたちを装備して戦闘するから、二人を呼んでおいで」

俺は、エラハイの盗品奪還の仕事（冒険）を手伝い始めて、もう三カ月が過ぎていた。今日までは、契約の装備を一切身に付けず、己の技術のみで戦闘してきた。なぜフェルミには、新たな特殊効果を開発できなかったのか？ 原因が俺のテクニクの不熟さだけに、起因しないことがヒットマン夫妻の見立てで解った。

「敵が弱すぎる？」

フェルミは、生まれつき高難度の特殊効果を付加しており、森や草原のレベルのモンスターでは、オーバースキルとなっており、『鎧』の練度を向上する刺激的な戦闘が不可能だった。つまり敵が雑魚過ぎて、何匹狩ってもレベルをあげることが出来ないのだ。

一方、武器『魔法剣』であるシャーロットは、彼女自身の練度ではなく、契約者が新たな剣技を得ていく。彼女をはじめて装備にしたとき、二つの剣技を手に入れたのは、そもそも俺の練度が低く、盗賊との戦闘で練度が二つも上がったのだ。

このことからヒットマン夫妻は、ここでの修行を契約者である俺の技術レベルを引き上げて、より高い経験値が得られるモンスターとの戦闘を可能にすること。契約の装備である彼女たちには、戦闘の快感を得るために必要な所作を教え込むことになった。

「戦闘中の契約者を勃たせる？」

俺は、一度だけ彼女たちの講義に立ち会ったものの、ナルルの講義は、凄まじくエグイ内容だった。契約の装備にとっては、戦闘中

に快感を得て、新たな特殊効果を得ることが重要だが、あのようなエグイ内容を冒険学の授業で教えるわけにいかないだろう。社会に出てからが本当の勉強。

ともかく三カ月の修行により俺は、対人戦への恐怖心も取り除かれ、並みの契約者であれば装備なしで戦えるまでに成長した。そして彼女たちもナルルに鍛えられた腕前を、本日の山賊討伐で披露してくれるらしい。

俺は、ナルルに仕込まれた二人を身に付ける、期待に逸る気持ちを抑えて、フェルミとシャーロットを部屋に迎えに行った。ちなみにミーコは、更に段違いにレベルが高く、彼女を身に付けて戦闘すると、象が蟻を踏みつける様な戦闘になり、『鎧』『魔法剣』の出番が無くなると言うので、しばらくお留守番だ。

「私は、ミーちゃんを認めています」

「魔王の娘かもしれないの？　ボクは、契約解除の方法を探すべきだと思う」

ドアの前に立った俺は、フェルミとシャーロットの言い争う声を聞いた。

「魔王討伐には、大剣豪の七つのスキルが欠かせない戦力になります」

「ボクら二人が頑張れば、もう装備なんて要らないよ」

「それは違います。魔王の存在が確かになった今、アルにも、フル装備を身に付けて『勇者』になる目標が出来ました・・・これから、もつと沢山の優秀な装備を手に入れなければなりません」

フェルミは、ミーコの話聞いてから、俺の勇者になるといふ夢を積極的に応援してくれている。もともとシャーロットより彼女の方が、装備を充実させるのに消極的だったはずだが。

「フェルミは、ボクらより優秀な『剣』や『鎧』と、アルが契約し

ても良いのか？」

さすがのフェルミも言い返せないだろう。

魔王討伐は、フェルミの夢でもあるのだ。

「そんな例え話は、成立しません。私は、アルのために優秀で在り続けます。いいえ、私たちは、優秀で在り続けなければなりません」

そうきたか。

ちよつと嬉しい。

「そうか。フェルミは、強いんだな・・・」

「私は、シャーロットが弱い女の子だと思っと思っています。だから手紙なんかで、ミリアムに弱音を吐くは、見つとも無いから止めになさい」

どうやら口論の発端は、シャーロットが元級長のミリアムと文通しており、その文面で悩み事を打ち明けているのが、同じ冒険仲間のフェルミのプライドを傷付けたようだ。とはいえ、彼女自身がシャーロットを遠ざけているのに、ずいぶん勝手な意見だと思った。

「フェルミには、相談できないこともあるよ」

「こつちに来て、私の隣に座りなさい」

シャーロットは、声を殺していたが、泣いているようだった。

どういう展開だ？ 彼女たちがベッドに腰掛けて軋む音が聞えた。

と、とにかく部屋に入って止めるべきか否か、ここで事態を見守るべきか否か。

「ボクは、アルに女の子が近づく度に、凄く疲れるんだよ」

「どうして？ アルは、シャーロットが一番大切だと言っているわ」

「ボクは、フェルミのように契約式で、愛を誓ってもらってない。

アルは、ミーコにも好きだと言ったのに」

「ミーちゃんには、下心で言っただけです。スケベ心でしかありません」

仰る通りです。

「な、何をするんだい？ 上に乗られたら動けないよ・・・」

「シャーロットは、自分がどれだけ可愛いのか理解していません」「ボクが可愛い？」

これから山賊討伐に出かけようというのに、喧嘩が始まったら困る。俺は、止めに入るべきだと判断してドアノブに手をかけた。

「・・・毎晩の自主練の成果を魅せてあげるわ」

な、なんだと本当に練習してたのか！ って、毎晩は、さすがに体に毒だろう。

俺は、部屋から漏れる猫がミルクを飲むような音に、ドアノブを回す手を止めた。

「フェルミ・・・く、くすぐりたいよ・・・あッ！ そんなあ・・・」

シャーロットの吐息と、いやらしい音が静かな室内に響き渡った。

「こんなに濡らしても駄目なのね・・・ちゅ」

「お、女の子同士で出来るわけないよ・・・」

「ヤッてみなければ、解りません・・・ちゅ」

「濡れるほどキスしても、イケないんだから」

え、えッ、フェルミは、こんな早朝にシャーロットに何してるの？

俺は、鍵穴から部屋の様子を覗いた。シャーロットに馬乗りになっているフェルミは、ベットに押さえつけた彼女に顔を埋めていた。彼女は、懸命に顔を上下しており、その度にシャーロットの足が小刻みに反応している。

「どう？ 何か感じるものは、ないのかしら」

「フェルミ・・・いくら刻印にキスしても、ボクの装備解除は出来ないよ？」

フェルミは、シャーロットの刻印が唾液で濡れるほど、キスをし

ていたようだ・・・契約者のキス以外は無効なのに。というか、そんなオチかよ。

フェルミは、ハンカチで口元を拭くと起き上がって、シャーロットの脇の下も拭いてやった。

「解っています・・・ちよつと試しただけです」

「フェルミは、ボクが可愛いと言ってくれたのに、なんでボクばかり目の仇にするんだい？」

「憎たらしいからです。アルに一番愛されてるくせに、そのことを自覚していません」

「えっ、そ、そんなことないよ。契約者のはじめての契約には、好きな女性を選ぶものだし、け、結婚相手も最初の装備と決まってる・・・エラハイとナルルも、そうじゃないか」

ウエディングでは、契約者の多くが装備と結婚するが、そのほとんどが最初に契約した装備と結ばれる。この理由には、諸説あるものの、契約者と一番長く冒険を共にした最初の装備は、戦闘で多くの信頼を勝ち得るからだと言う。また最初の装備は、自分以上の装備をいびり出すと、最初の装備をカツコウの雛に例える異説もある。「私は、自分から告白しましたが、シャーロットは、アルから望まれて装備になりました。それに剣士は、総じて『剣』と結婚するものです・・・エイミーやユング、ましてミーちゃんなど眼中にありません。私のライバルは、目下のところシャーロットだけですよ」

次いで多いのは、適職の武器と結婚する契約者だが、汎用性の高い防具に比べて、自分に適合する武器が限定されているからだ。最初の装備には、まず武器を選ぶ契約者も多いので、結婚相手の一位二位の条件が重なれば、ほぼ結婚間違いなしなのだ。

「けどアルは、エラハイの『籠手』エイミーのことを、いつも気にしているよ」

当然、自分の装備と結婚せずに、他人の装備と結婚する契約者も稀にいる。俺は、確かにエイミーのことを気にしているが、年上の女性に対する憧れと言う感じで、べつに恋愛感情を抱いているわけ

ではない。

「これ以上、敵に塩を送るのは、あまり面白くありませんが・・・同じ魔法装備のエイミーは、どこかシャーロットに似ています」

「だけど、だけど・・・！」

フェルミは、シャーロットの唇を塞いだ。

シャーロットの唇には、刻印なんてないのに・・・ということ？
「すぐにアルが呼びに来るので、お喋りは、もうお仕舞にします」
フェルミは、ベッドから立ち上がって襟元を整えると、唇を押さえて放心しているシャーロットに出掛ける準備を促した。彼女は、のたのたと服を着替えるシャーロットの後ろ姿に「貴女、やっぱり可愛いわ」と言った。

どういうことだ？

俺とエラハイは、彼女たちを装備してから馬車の停留所に向かった。山賊の隠れ家までは、近くを通っている馬車で移動するのだが、装備化しておけば運賃が二人分で済むからだ。

「ナルルは、いつも留守番なんだね？」

「彼女は、ウチの嫁になってから、契約の装備としての引退宣言しているからね」

「なるほど、てっきりミーコの監視のために留守番をしてるのかと思っただよ」

そもそも夫妻がセックスレスなのは、ナルルの刻印を保持する目的より、神父と修道女の宗教上の理由からだった。

馬車の停留所に近付くと大勢の人々が集まっており、周囲が焦げ臭くなった。群衆の見つめる先には、まだ煙が立ち上る火災現場があった。どうやらミーコが務めていたピンク酒場『魔女の館』が、

何者かに放火されたようだ。

『私は、今日ここに引退いたしますが、我が『魔女の館』は永久に不滅ですッ!』

放火現場でマイクを持った従業員は、相変わらずのテンションで実況していた。

「悪い予感がする・・・」

エラハイは、放火現場を検証している火消しに、事情を聞いてくると立ち去った。命を狙われているミークの務めていた店が、何者かに放火されたのだ。俺でさえ、無関係だと思えなかった。

「山賊討伐では、練習の成果を披露したかったのですが、中止も仕方ありません」

フェルミは、残念そうに言ったが、練習の成果ならさつき見た気がする。

俺が苦笑いをしていると、袖口を下に引っ張る男の子がいた。歳は、五、六歳。頭には、とぐろを巻いた角が二本付いた帽子を被っており、大きなサングラスの下から、上目使いで見上げている目つきの悪い男の子だ。

「お兄さんたちは、この街の冒険者だろうか？」

男の子は、ラメでキラキラと輝いている黒髪を後ろに跳ねあげると、甘い香水の香りがした。それに左の三白眼の下には、鳶の絡まるような刺青が彫られており、化粧気のある顔をしている。ずいぶんと色気づいたクソガキである。

「お母さんは、どうした？」

俺は、しゃがみ込んで男の子に視線を合わせた。

男の子は、帽子を目深に被ってから「知らない」と、ぶつきら棒に答えた。その物言いは、まるで母親の存在自体「知らない」と言

った口ぶりだ。

「僕は、いなくなった家族を探しているんだ……この娘なんだけど、この辺りで見掛けなかったかい？」

男の子は、どうにか人間の顔だと判断できる程度のラクガキを、ポケットから取り出して俺たちに渡した。画材は、クレヨンだろうか？ 肌色の大きな丸の中に、赤い丸が二つ並んで、その下に真一文字の黒い線……。

「これは人間か？」

俺は、思わず素直な感想を口に出した。

「！」

男の子は、俺からラクガキを取り上げて、一步下がった。

「アル、男の子に謝るべきです。家族を探している子供の人相書きを侮辱してはいけません」

フェルミは、俺が子供のラクガキを馬鹿にしたことに、謝罪するように言った。

「お兄さんの名前は？」

「俺の名前は、アルフレッドだけど……残念ながら俺は、この街の住民ではなく、魔王討伐のため修行の身なのだ。お前さんの役に立てなくて申し訳ない」

俺は、男の子の頭を帽子の上から撫でてやった。

「うちの主人が変なこと言いましたか？」

走り寄って来た三人のメイド服の女の子は、男の子を後ろに隠すように言った。最初に声をかけてきたメイドさんは、頭にウサギ耳の飾りが付いており、ほかの二人に男の子の安全を確保するように指示したことから、リーダー格と思われる。

「いいや、べつに……その子は、何処かの貴族なのか？」

「えーと、貴族っぽい感じの家の子です」

メイドさんの一人は、男の子が羽織っていたマントをクンクンと

嗅ぎながら、舌を出してニコニコしていた。ご主人様に会えたのが嬉しくて、興奮した犬っぽい仕草だ。

「私たちは、先を急ぎますので失礼いたします・・・トラは、前方に警戒しながら、坊ちゃんを安全な場所に誘導して・・・では、さようなら」

虎と呼ばれたメイドさんは、腰に携えた剣の柄を握ると、姿勢を低くして移動を開始した・・・どんなメイド軍団だ。

「兎、犬、虎では、何の繋がりもないじゃん」

俺は、三人のメイドさんを動物に例えて笑った。

「そうですね、猿、犬、キジなら御伽噺の主人公ですね」

フェルミは、俺の話を茶化したか、シャーロットは、無言のままだった。

「どうした？ シャーロットも話しに加われよ」

「・・・あの人相書きだけど、見覚えがある気がする」

「あんなチビツ子ホストのラクガキで人物が特定出来たら、エスパ―だぞ？」

シャーロットは、少し躊躇してから小さな声で、

「あの赤い目は、たぶんミーコだ」

ミーコを探し回っているチビツ子ホストは、彼女の兄貴に見えなかった。弟？ 俺は、サングラスの薄暗い中で金色に輝く瞳を思い出した。横長に開いた瞳孔は、羊のような乾いた目をしていた。猫のようなミーコと共通点があるのなら、そんなものだ。

エラハイが戻ってくると俺は、男の子の話の話を聞かせたが、彼は、今日の山賊討伐が各地の盗品が集められる『泥棒市』開催日だとの情報を掴んでおり、教会へ引き返すことが出来ないと言った。代わりにエイミーを装備解除すると、ナルルたちに教会の周囲を警戒す

るように伝言をした。

「もしチビツ子ホストが、ミーコの兄貴だとしたら、大剣豪ルロイドすら倒した強敵だ。俺は、疾風シルフィーネ零式も持ってきているし、シャーロットも警護に回した方が良くないか？」

「アルの話が確かだとしても、お嬢ちゃんが一人増えたくらいで戦況も変わらんだろう・・・それに、エイミーには、ウチらが戻るまで身を隠すように伝えた。今日は、アルたちの卒業試験でもあるからね」

「俺たちの卒業試験？」

「勇者を目指すなら、そろそろ王都に向かって旅立つ方が良いだろう。ミーコが逃亡者で、追っ手の気配が迫っているのなら尚更だよ」

「そうか、今日の山賊討伐が終われば、俺たち本当の冒険が始まる。彼の言うとおりミーコに追手がいるのなら、一つの街に長居は無用だ。俺たちは、予定通りに山賊討伐に向った。」

王都サウスファイアに続く街の外の馬車道は、険しい山間部を縫うように谷底に砂利を敷き詰めて作られた王国最古の馬車道。俺は、山賊討伐に向かう馬車に揺られて、『中央貿易行路』と呼ばれる道の最果てにある王都のことを考えていた。今日の冒険が終われば俺たちは、この道を通って王都を目指すのだ。

「アルは、戦闘中に装備のことばかり気にしていたらどう？」

「エラハイは、ニヤニヤと妄想に耽^{ひげ}っていた俺に言った。」

「ああ・・・でも、この三カ月の戦闘では、装備のことなんて気にしなかったよ」

「作られた装備で戦闘していたアルは、戦闘にのみ集中できただろうね。けどね、契約の装備を身に付けての戦闘も基本的には、自分で装備を手足のように動かすんだ」

「そんな自分善がりの戦闘では、装備が快感を得られないんじゃないな」

いの？」

「そんなことはないさ。モンスターの攻撃を華麗に避けたとき、相手の息の根を一撃で奪ったとき、装備の快感っていうのは、性的興奮に似ているが、異なるところもあるんだ。装備の快感は、死と対峙する緊張と、生に対する執着、それら抑圧された感情の解放にあると言われている」

俺は、無意識に『鎧』の胸の辺りを擦っていた。

「フェルミが上手くイケないのは？」

「本来、人前で自らの快感に従うのは、恥かしい行為だからね。『鎧』のお嬢ちゃんは、よほど道徳心が強いのだろうね。もともと『鎧』は、特殊効果の開発に時間のかかる装備だから、気長に育てるんだな」

馬車を途中下車すると俺たちは、山道を数時間ほど歩いて山賊たちの根城に到着した。エラハイの掴んだ情報通り『泥棒市』に集まった山賊や武器商人は、建物の前に契約の装備おんなを並べて商談中だった。

「武器商人たちのほとんどは、契約者じゃないから殺してしまっただ構わないよ。ただし山賊のうち数人は、契約者として盗品を装備している可能性があるから、俺がユングの『男嫌い』で麻痺矢を撃ちこんで、装備たちの装備解除するまで殺やるなよ」

エラハイは、木陰から山賊たちに向かって、波状に矢を繰り出す『弓技レインマスター』を放った。慌てた山賊たち二人が『斧』を装備すると、初手を生き延びた武器商人たちの数人が作られた剣を手に取って、こちらに向かってきた。

「契約者は、二人だけみたいだね。アルは、あの二人を相手に出来

るかな？」

「もちろんだよ」

「ウチらは、その他大勢を倒して、適当なところで二人を麻痺矢で気絶させるから、それまで殺さぬように弄っておいてくれ……くれぐれも殺すなよ」

俺は、剣の鐔を強く掴むと、微かな汗で湿ってきた。

そこは、脚と脚の間、シャーロツテの一番敏感な場所だ。

戦闘を前にした二人の荒くなる息遣いは、これから始まる戦闘への期待感を高めてくれる。

興奮を抑えきれない俺は、右手の人差し指と中指で汗を拭い取ると、指で絡ませた粘度の高い液体を舌で舐めた。山賊の二人が茂みに踏み込んだら、戦闘開始の合図だ。緊張感にフェルミの早まる鼓動は、俺の胸の辺りをドクドクと愛撫しているようだ。

「三カ月ぶり戦闘だから……少し怖いです」

フェルミは、何も知らない少女のように怖がって見せたが、これがナルル仕込みだとしたら、なかなか良い演出だ。

隣にいたエラハイは、弓の中心部に指を宛がいながら、次々に弓矢を放っている。俺は、大人しいユングが、喘ぎ声をあげて悶えていると想像すると興奮した。実際ユングは、閉じることが許されない脚に力を入れて、武器商人たちの眉間目掛けて強弓の矢を放っていた。養父に無理矢理に脚を抉じ開けられた養女は、自分の攻撃で武器商人が倒れる度に、快感が脳を突き抜けて悶え苦しんでいた。

「養父に犯されるような背徳心は、ユングを良い女にするんだよ」

エラハイは、見惚れていた俺に言うと、矢を放ちながら後ろの木陰に消えた。

「あれは、オヤジの趣味の世界だろう……俺たちから隠れて、ユングを舐めまくるつもりだぜ」

エラハイの消えた場所から、ユングの喘ぎ声が聞えた気もするが、

『聞き耳』のスキルがない限り他人の装備の声は聞こえない。幻聴。

背の低い山楢草の茂みに入った山賊の二人は、俺の放つ殺気を感じて斧を振り上げて、こちらにスキルを発動しようとしていた。

「二人は、殺さないようにして、他の山賊が加勢するようなら、容赦なくぶっ殺すぜツ！」

俺は、敵の懐に駆け寄ると、剣の柄を当身にして一人目の上体を後ろに反らした。斧を振り上げていた山賊は、不意の攻撃にバランスを欠いて右脚を高く上げたので、上段に逃がしていた剣を、その右脚に振り落とした。右脚には、装備の刻印がないので、適当に切ったとしても刻印を傷つけて、契約の装備を殺す心配もない。

「お、俺の脚がツ！」

脚を押さえて転げまわる山賊は、持っていた斧を俺目掛けて投げつけた。俺は、両足を抱えて飛び越えると、着地する刹那に、五体満足まんじくの山賊がスキル『戦士の嘆き』を発動して、俺の足元の地面に亀裂を入れた。

「おツ！」

バランスを崩した俺は、膝に力を入れて体勢を立て直そうと踏ん張ったが、揃えた両足で上体を起こすのは不可能だった。不恰好に天を見上げて地面に倒れた俺は、脚を失った山賊の後ろに、剣を構えた数人の山賊が見えた。援軍である。

「これは、かなりの乱交戦になるよ・・・シャーロツテ、覚悟はいね」

地面突き刺さった足を引き抜くと俺は、剣の柄をきつく握りしめてから、口元に寄せて鏢の部分を舐めた。鏢は、泥の味に混じって、微かに甘い蜜の味がした。

「剣技インクリースナイフツ！」

何本もの光の剣が山賊たちを切り裂くと、一人ずつ身体からだを寄せて

丁寧に切り殺した。エラハイの教えに従って自分本位に戦ってみたものの、装備の快感が死に対峙する緊張感と、解放にあるのなら、遠距離攻撃ばかりで戦うのは、いつも耐忍んでいるフェルミに申し訳ない。

雑魚を一通り切裂くと、背後にいた『斧』を持った山賊の気配に冷や汗をかいた。

「若き冒険者よおおお死ねッ！」

背中に振り下ろされた斧は、鎧に命中した。

「はうッ！」

しまったッ！ と思うと同時に、鈍い痛みが脊髄を大きく揺らした。首筋から骨盤に響くような痛みは、背中から大量の血飛沫ちしぶきを撒き散らしたに違いないと、山賊の方に振り返ると、すぐに足元を確認した。

ガッ、血飛沫どころか、一滴の血も地面を汚していなかった。

「ああ気持ち・・・いわ・・・」

フェルミの擦れる言葉は、もちろん「気持ち良い」なので気にしない。だが今回は、続く言葉が「気持ち良いわ・・・濡れちゃった・・・もう入れてください」だったのは、ナルル仕込み。鎧の何処に何を入れると？

「お、お前の『鎧』は、化け物かよッ！」

「俺のフェルミは、凄い優秀な鎧だよ」

血に汚れた顔は、フェルミの凄さに思わず笑っていた。

戦意を失った山賊は、エラハイの麻痺矢で気を失い、神父の装備解除により盗品回収をされた後に殺された。俺たちは、盗賊と武器商人たちから戦利品の目玉を切り貫くと、武器商人たちの馬車に盗品を乗せて、街に帰ることになった。

馬車の用意が済むまでフェルミは、エラハイと盗品たちの名簿を確認し、俺とシャーロットは、山賊たちの遺体を処分することになった。装備解除したシャーロットは、浮かない顔で山賊たちの遺体に火を放つと、炎の中に焼き栗でも探すように棒で突いて遊んでいた。

「シャーロット・・・焚火に悪戯すると、おねしょするって言われたことないか？」

「子供の頃に言われた気がするよ」

「その歳でおねしょは、ちょっと恥ずかしいだろう？　悩み事があるなら相談しろよ」

俺は、遺体を弄ぶシャーロットから棒を取り上げると、話を聞くことにした。たぶん悩みの原因は、俺のことなので、愚痴を聞かされても対処できるか解らないけど・・・。

「教会にミリアムから手紙が届いてね」

「級長から？」

「彼女は、ボクが契約出来たことを喜んでくれていた」

ミリアムは、シャーロットが乙女だったことを喜んでおり、俺との契約にも喜んでくれたそうだ。お互いの心境を綴った文通が続くうちに、級長の秘めた想いも知ったと言う。

「ミリアムには、意中の契約者がいたのだが、その彼が別の『剣』と契約してしまった。彼女は、副装備として契約することも考えたそうだが、やはり気持ちの整理が付かないようだ」

「しかし級長は、まだ未契約のままなのか。元クラスメイトの女子で未契約なのは、級長だけじゃないのか？」

「器量良しの彼女のことだから契約申込みは、一人や二人じゃないと思うけどね」

「その意中の契約者と冒険がしたいのなら、副装備でも良いじゃない

いか？」

「副装備は、女の子から進んで契約を切り出せないよ」

「なんで？」

「女の子は、二番目になるのが嫌だから・・・」

シャーロットは、小さな声で呟いた。

それは、ミアムの気持を代弁しているのか。

「べつに契約せずに、交際を申し込めばいいだろう？」

「契約者の多くは、冒険の終わりに契約の装備と結ばれる・・・だろっ？」

シャーロットは、俺の顔を見上げながら真っ赤な顔をしている。

夕日が反射しているのか、焚火の熱に火照っているのか。

静かに目を閉じたシャーロットは何を望んでいるのか、俺は、知っていたはずだ。

「やっぱりさ・・・装備したからって彼女面は、なんか違う気がする」

俺は、男として汚い発言をした。

彼女の想いを知っている俺は、この言葉を言わない方が良かった。彼女の好意に甘えていた俺は、こんな薄汚い言い分も受け入れてくれると思っていた。

「そうだな、アルの言うとおりだよ。ミアムには、ボクから伝えておくよ」

シャーロットは、しゃがみ込んで焚火に、震える手を翳して温めていた。

俺は、隣に座ると彼女の頬を指で叩いた。

「なんだい？」

俺は、振り返ったシャーロットの唇にキスをした。

もちろんシャーロットの唇に刻印はない。

ほんの些細なことで大切な物を失う。
羊の皮を被った男は、無慈悲に生贄を喰らう。

16・俺がみんなを守る 前編

シャーロットは、唇を指で抑えると、目を閉じて口を突き出した。俺は、彼女の唇を掌で押し返してから、目を開けるように言った。

「このキスは、まだ本物じゃないと思う・・・いつかシャーロットの夢が叶う日が来たら、そのとき続きをしよう」

シャーロットは、にっこり微笑んで立ち上がり、遠くを見ながら「そうだな」と納得してくれたようだ。俺は、落ち込んでいる彼女を想像できないし、想像なんてしなくなかった。俺たちのキスは、恋人の約束でもなくて、兄妹のそれでもなかった。

「いつか夢が叶うと良いね・・・」
俺は、無責任な言葉で彼女を励ました。

街に戻る馬車の用意が整うとエラハイとフェルミは、焚火の傍にやってきて四人で、山賊たちの亡骸に祈りを捧げた。神父は、悪党も死んでしまえば、罪が赦されると言った。山賊や武器商人など盗品の命と尊厳を弄ぶ連中は、死を以てしか懺悔出来ないけれど、そんな下賤に身をやつした彼らにも、人生の最後くらい神の施しが必要だ。

盗品を扱う連中は、人間として扱われないが、自分の姉妹や友人が見知らぬ男に凌辱されたのなら、ほとんどの人間が俺たちの気持ちを理解できるだろう。

シャーロットは、ニコニコと両手を振って馬車に乗り込んだが、俺が乗り込もうとすると、後ろ首をフェルミに掴まれた。

「シャーロットの様子が違います。何があったのか白状しなさい」

フェルミの動物的な直感は、二人の間に芽生えた微妙な心境の変

化を感じ取っていた。彼女の責めるような眼差しには、嘘が付けなくなる。

「えーと、ミリアムのことと相談を受けまして・・・」

「シャーロットは、他人様の色恋沙汰に介入できるほど、精神的な余裕があると思えません」

「女の子は、二番目じゃ嫌だと言うもので・・・」

「二号さんでも、三号さんでも構わないと言った愛人の台詞じゃありません」

「仰る通りなんですけど、それで落ち込んでいたみたいです」

「私がアルの最初の装備なのが、そんなに悔しいんですかね・・・それで何て励ましたら、あそこまで態度が変わるのですか？」

俺は、キスのことを正直に話すのを躊躇った。

気丈に振る舞うフェルミだが、俺のファーストキスを奪われたと知れば、彼女にどんな仕打ちするか解らないからだ。

「えーと・・・いつか夢が叶うと良いねって励ましました」
なるべく感情を排して事実だけを述べた。

俺は、嘘を吐いていないと自分に言い聞かせた。

「シャーロットの夢が何なのか、解った上で言ったのかしら？」

「将来は、お花屋さんになりたいと」

「あのお転婆は、花屋になりたいの？」

シャーロットは子供の頃、花が好きで花屋になりたいと言っていたから、これも嘘じゃないはずだ。

エラハイは、馬の用意が出来たから早く乗り込めと急かしたが、フェルミが掴んだ手を離さない。

「早く乗れって、どうするの？」

フェルミは、手を強く引いて俺の顔を引き下げた。

「シャーロットの匂いがします・・・汚い男です。落ち込んでいる女の子に、キスをしましたね」

俺は、彼女に心臓を鷲掴みされた気がした。

「それは・・・彼女が望んでいたことだよ」

「アルは、頼まれれば誰にでもキスするんですか？」

「そうだな、フェルミもキスしてほしいのなら・・・」

俺の心無い一言に、フェルミの強烈なビンタが飛んだ。

「私に嘘を吐きなですッ！」

彼女は、頬を抑えて目を丸くしていた俺を見下した。

俺は、彼女が泣くかもしれないと思ったが。

予想以上に迫力のある張り手だった。

「・・・ごめんなさい」

「私には、アルがしたいときにキスをすれば良いのです」

「はあ？」

「私は、お情けのキスなど欲しくないと言っていますよ」

俺は、フェルミの顔を引寄せると、おでこにキスをした。

「な、なにをするんですか？」

「だって、俺の好きなときにキスして良いって言ったよ」

「・・・おでこですか？」

俺は、シャーロットの感触が残る唇で、フェルミの唇を重ねるのに抵抗があった。それでも彼女の強がりや愛おしく思っ、思わずおでこにキスをしてしまった。

フェルミのミントの香りは、俺の荒んだ心を癒してくれた。

「私は、一番でも満足しません。アルの唯一無二の存在になります・・・それが私の夢です」

フェルミは、どこかの歌手が歌い出しそうな台詞を残して馬車に消えた。

草原の景色が荒涼とした大地に変わると、旅立ちの街が近付いた証だ。

馬車の荷台から外を眺めていた俺は、赤い月がゆっくりと地平から登る様子に胸騒ぎを覚えた。

馬の脚を止めるエラハイの叫び声がして、辺りの異変に気付いた。「アル・・・ここに来るまでに、トカゲー一匹見なかったよね」

シャーロットは、秘剣スイートソードを鞘から抜くと、立ち上がって耳を澄ませた。

俺は、フェルミに荷台に積まれた盗品の娘たちを任せると、シャーロットと二人で荷台から飛び下りた。グラスマン系のモンスターは、日陰のない草原に生息しており、太陽の光にも順応した数少ないモンスターだ。馬車を襲ってくるような習性はなくても、一匹も見掛けずに走行できるほど、珍しいモンスターでもない。

「エラハイが馬車を止めたのなら、何かあったのだろう」

俺は、馬車の後方に彼女を残して、馬車の先頭に回り込んだ。

エラハイは、夜空を夕焼けのように焦がす街を指差した。

「火事かな・・・それにしても派手に燃えてるな」

「昨晚の放火騒ぎでは、全身黒尽くめの契約者が手配されたらしいが、それが猫娘の言っている魔人の仕業なら、あの火事もそいつの仕業じゃないのかね・・・ウチは、このまま街の正面から侵入して、街の様子を見てくる。アルたちは、教会に盗品の娘たちを運んでくれないか？」

俺は、頷くとシャーロットに荷台に戻るように指示をして、エラハイから手綱を預かった。

「街の外周に沿って裏門から入れば、教会まで辿り着ける・・・ナルルに会えたら停留所まで、来るように伝えてくれ」

エラハイは、ユングを装備すると街に向かって走り去った。

「何かありましたか？」

荷台から顔を出したフェルミには、簡単に説明をしてから俺の隣で監視を頼んだ。

「あのチビツ子ホストがミーコの兄貴なら、あんなクソガキが騒ぎの中心なのか？」

「たぶん今は、八頭身のイケメンになっているはずですよ」

フェルミは、ミーコの兄ならば夜の姿が別にあると言った。

確かに魔王の息子で、大剣豪を倒した魔人の狂気は、昼間の男の子から感じなかった。魔人メエリドが噂通りの男なら、夜の姿があったとしても不思議ではない。

教会に着いた俺たちは、盗品の娘たちを聖堂で保護すると、ほかにも中心街から逃げてきた人々で溢れかえっていた。街外れの教会は、彼らの退避場所にもなっていた。

「ミーコさんならエイミーと安全な場所に隠れています」

ナルルは、必死の形相でミーコを探し、聖堂を歩き回っていた俺に話しかけた。

「何が起こってるんですか？」

「それが・・・」

ナルルが口籠っていると聖堂にいた男は、俺の肩を掴むように言った。

「黒く禍々しい光沢を放った鎧を着た契約者が、トカゲの大軍を連れて歓楽街で暴れ回っているんだよっ！」

「そ、その男は、確かに契約者なのか？」

「俺は、目の前で三人の女が、契約の装備になる瞬間を見たんだ・・・『鎧』の胸には大きな虎の顔が、『剣』には吠えるオオカミの紋章、『兜』には尖った耳と羊のような角が生えていた」

三人の契約の装備は、昏間見たメイド服の三人に違いなかった。

ナルルは、修道服のまま靴だけ履きかえると、馬車から馬を一頭外して跨った。

「貴方たちは、ここで街の皆を守ってなさい」

彼女は、手綱を引くと手慣れた様子で馬の腹を蹴って、あつという間に飛び出して行った。

フェルミは、聖堂の人々を手際良く整理して、各班毎に役割を与えた。

盗品だった女たちは、彼女をサポートするように動き回っている。何事にも動じないフェルミは、こんなとき中心になって働いてくれる。

「シャーロットは、何処に行くつもりだ？」

俺は、一人で聖堂を出て行ったシャーロットの後を付けて聞いた。「ボクは、あそこに居てもフェルミみたいに役立てそうにないからね」

「だから、一人で魔人を倒せると？」

「アルは、皆を守ってやればいいよ……アルは、ボクが守ってやる」

「シャーロットが、俺を守ってくれる？」

俺は、疾風シルフィーネ零式を鞘から浮かせた。

「ボクは、強いよ……ここで試してみるかい？」

シャーロットは、腰の剣に手を当てた。

「疾風シルフィーネ零式の刃長は、不可視効果で見えないが、二・五メートルあるんだぜ。この間合いで、秘剣スイートソードと勝負になるものか」

俺は、死地に赴こうとするシャーロットを力付くでも止めたかった。

魔人との無謀な戦いを挑もうとするシャーロットは、以前のような輝きを取り戻していた。

あのキスが自信を取り戻すきっかけになっているのなら、俺の責任でもある。

「アルは、まだ『剣』の性能に頼ろうとしている。アルには、『剣』性能の差が、戦力の決定的な差でないことを教えてあげよう」

シャーロットは、秘剣スイートソートを正面に構えた。

「脚を切り落としても行かせないよ・・・死ぬよりマシだろう？」

「ボクの脚を切り落として、アルの慰み者にするのかい？」

「フェルミと一緒に、一生面倒を見てやるよ」

俺は、疾風シルフィーネ零式の見えない刃を捨てて、鞘を右手に持って下段に構えた。

俺には、見えない剣でシャーロットの脚を切り落とせるはずがなかった。

「その鞘で、ボクの脚を切り落とせるはずがないだろう？」

「本気だと思ったのか？俺にシャーロットの脚を切り落とせるものか」

彼女は、微笑むと自分も鞘に持ち替えた。

「アル・・・勝負は一度きり、ボクが勝ったら行かせてもらおうよ」

学校での剣技の成績が、常にトップランカーだったシャーロットに凄まれた俺は、勝てる気がしなかった。それでも実戦経験で勝っている俺は、ここで自分の『剣』に挑まれた勝負を投出すわけにいかない。

ガッ！ ガッ！ ガッツ！ 鞘のぶつかり合う音は、薄暗い教会の渡り廊下に響き渡った。

俺の下段から突上げる攻撃は、彼女の鼻先で空を切り、踵返しに

振り下ろされる攻撃を躲すことで精一杯だった。彼女は、剣技の最中に何度も蹴りを繰り出して、俺に間合いを詰めさせなかった。

「ボクらを装備できないと、以前のように敵を見上げて攻撃するの
か？」

シャーロットは、姿勢を低くして下段に構えている俺に、見下した態度で言った。最近、彼女たちに気を使って慣れない上段に攻撃に徹していたが、この卑屈な格好こそ俺本来の構えだ。

「俺は、契約の装備がなければ、いつでも敗走できる格好がお似合
いなんだよ……だから、行かないでほしい」

「女々しいなッ！」

シャーロットの攻撃は、俺の右肩を狙って振り落とされたが、俺は、左手に持ち替えた鞘で防いだ。これが真剣だったら、今頃俺の指は、剣の刃で血だらけだったろう。俺は、鞘を持つての戦いに咄嗟の機転を利かせたのだ。

「解った俺の負けだよ。やっぱりシャーロットは、凄い女の子だよ
俺は、立ち上がったって剣を鞘に戻した。」

「アル……」

俺は、シャーロットの剣を拾い上げて彼女に手渡した。

「ただし一人では、行かせられない。魔人と戦うのなら、俺たち三
人で冒険者として戦う」

聖堂のドアが開くと、逆光の中でフェルミが立っていた。

「二人とも見事な決闘でした。それでこそ私の仲間です」

どうやら彼女は、事の一部始終を見ていたようだ。

「今は、深間の時間ですが、もうすぐ夜が明けます。街を襲っているのが、ミーちゃんのお兄さんならば、夜明けとともに昼間の男の子に姿を変えるでしょう」

「そのときを狙えば・・・」

「少し卑怯ではありますが、私たちにも勝機があります」
俺は、二人を装備すると馬に跨って中心街を目指した。

馬の背で上下に揺られた契約の装備は、戦闘前の興奮を高めるのに心地よい快楽を与えてくれる。

「ああアル・・・ボクは、本当に悪い娘らったよ・・・許しておくれッ」

そんな悪い装備には、お仕置が必要だ。

俺は、柄の根元にある突起した部分を指で強く摘まんでいた。

そこは、シャーロットのムフフな場所だ。

歓楽街では、『魔法使い』が懸命に建物の消火活動を手伝っており、ほかに数人の冒険者が戦闘で負傷した傷を手当てしていた。

「大丈夫か？」

と、俺が言っていると頭から血を流す冒険者は、静かに首を振った。彼は、自分の容態に返事をしたわけではなく、目の前に転がる折れた『剣』を指差した。その『剣』は、きつと彼の契約の装備だった元旅の仲間の成れの果て。

「トカゲの大軍は、むしろ街の冒険者でも倒せるが、トカゲの群れを率いてきた契約者には、到底歯が立たなかつた・・・近くの騎士団に早馬で連絡したが、早くても明日の晩まで加勢に來れないだろう・・・あの男に、このまま明日の晩まで暴れられたら、この街はもうお仕舞じゃて」

息も絶え絶えに訴えてきたのは、馬車の護衛をしていた初老の冒険者だった。彼のように年老いた冒険者は、街の仕事を請け負う『街の冒険者』と呼ばれていた。彼は、作られた兜『ピーピングトム』を手渡して、他人の契約の装備の声が聞こえる『聞き耳』を付加し

ているから、役立ててほしいと言った。

「エラハイたちは、無事だろうか？」

俺は、馬車の停留所に向って走り出すと、事態の深刻さが増してきた。ミーコは、自分の兄を魔人メエリドと言っていた。彼の仕業だとしたら、大剣豪を打ち破った魔王の息子との話しは、本当のことだろう。

俺の横を風がすり抜けると、目の前に黒い影が立ち塞がった。

「彼の狙いがミーコならアルたちは、ここに来ない方が良かったのだけれど・・・今は、ウチら数人の『弓使い』で、どうにか遠距離攻撃を仕掛けているが、全く歯が立たないんだ。正直、加勢に来てくれて助かったよ」

風のように走り抜けたのは、『^{ナルル}脚』の特殊効果『神速』を使ったエラハイだった。

「近接戦闘の冒険者は？」

「あんな化け物と鏑迫り合いで勝てる冒険者は、王都の騎士団くらいなものだよ。できれば足止めしてくれば、『弓使い』の集中砲火で仕留められるのだが」

「契約者の適職は？」

「それが『剣』を装備しているが、魔法攻撃まで使ってくるからね・・・そんな適職は聞いたことがないが、何でもアリの『魔人』だと思っね」

「やはり魔人メエリドか・・・」

「あなた・・・足を止めないでえ・・・後生だから・・・もっと地面に私を擦りつけてえ・・・」

「えーと、奥さん久々で感じまくってるみたいなんで、あとは、適当に戦いますから行ってください」

<私は、エロガキに醜態を晒しているのね・・・いやらしい子だわ
あ>

お前の方が、いやらしい奥さんだわ。

「本当に、なんか貞淑なナルルのイメージ壊れるんで、すぐに行つてもらえますか」

エラハイは、強く踵を地面に擦ると、苦笑いをして走り去った。

「アル、ボクも・・・もう変になっちゃうから、そろそろ許して・・・」

しまったッ！ 興奮していて教会から今まで、ずっとシャーロットの突起を弄んでいた。

相変わらず『魔法剣』は、粘度の高い液体で俺の指をヌトヌトにする。鏢の部分がヌラヌラなのに、剣を握る柄が滑らないのは、不思議でならない。まるで指に吸い付いて離さない。

「シャーロット、これからは、勝手に行動しないで俺の言うことを聞くんだよ」

「う、うん」

「では、もう少し遊んでから止めてあげる」

俺たちは、『魔女の館』の跡地に立っていた魔人メエリドに近付いて、『聞き耳』のスキルを使って彼らの会話に耳を傾けた。

「これだけ暴れたのに、アルフレッドとか言う冒険者は、まだ現れないのかッ！ 奴は、俺の人相書きを見て、妹のミアンを人間じゃないと言った男だぞッ。奴は、妹のことを知っているに違いないッ」
やはり昼間の男の子が、ミーコの兄だった。

哀れな子供の人相書きを人間と判断するのは、みんなお前に気を使っているからだと言つてやりたかった。まあ、そんなツマラン登場の仕方もないけどね。

<メエリド様・・・そろそろ夜が明けますう・・・ピヨンたちも何度

もイッてしまつて、このままだと体力持ちまへんぬうう>

『兜』の女は、魔人に懇願するように言っている。

「ピュン又は、そう言っているが、ワーオンの疼きは、まだ納まっ
ていないようだぞッ」

魔人は、『剣』を地面に突き立てると、地面にブルブルと振動が
伝わってきた。ワーオンと呼ばれた『剣』からは、ヘエツ、ヘエツ、
エヘエツと、舌を出した犬のような息遣いしか聞こえない。

<今夜は、激しすぎますよお・・・もう何人と殺^やつたかしらあ・・・
三十九人もですよお・・・もうピュンのお腹は、人間の汚いお汁でい
っぱいですうう>

どうやら『兜』は、頭部を保護するほか、戦闘情報を管理する装
備らしい。

「契約の装備とは、下品な生き物だな・・・同じ魔人とは、認めた
くないものだよッ」

メリドは、兜から染みだした液体を髪に撫で付けると、俺たち
の方を向いた。

<そんなことないわ・・・ねえ、アルフレッド様・・・>

ば、ばれてるッ！ 『兜』は、俺が『聞き耳』を使っていること
を知っていた。

「よ、よお・・・妹は、見つかったのかい？」

「どうだろうなッ」

魔人は、『剣』の切先を俺の下半身に向けた。

<クククッ、オスの匂いがするう・・・鼻が曲がりそうな良い匂
いだあ・・・微かにミアン様の匂いもするうう>

魔人がご褒美だと言わんばかりに、『剣』柄に開いた穴に人差し
指を挿入すると、喘ぎ声と共にその穴から液体が噴出した。嬉シヨ
ン？。

「貴様が妹の契約者ならば、その左足を切り落として持ち帰ろッ」

魔人の『鎧』に浮き彫りにされた虎は、ググツと口を開いて、赤い閃光が俺の足元の地面を抉り取った。

「ちよっ、魔法攻撃とか有り得ないでしょう？」

俺は、上体を逸らして後ろに回転すると、そのまま背を向けて走り出した。

「ア、アル・・・魔法攻撃に距離をとるのは、返って不利になりますよ・・・それに魔法攻撃なら、私の『魔法耐性』で致命傷を負いません」

とはいえ、頭で理解できても本能的に怖いものは、なかなか克服できませんよ。

「ボクスキル『魔法吸収』で、魔法攻撃が無効化できるよ」

「確かシャーロットの初期スキルには、『体力吸収』もあつたね」

「罅迫り合いになれば、『体力吸収』で敵のスタミナも奪える」

「剣技リターンズオータアで、間合いを詰めて接近戦に持ち込もう」
俺が急反転をしたので、一瞬怯んだ魔人は、『剣』で身を固めて防御した。

「剣技リターンズオータア！」

俺たちは、大地の起伏を無視して、直線上にある全てを薙倒しながら魔人との距離を一気に詰めた。俺の剣圧に押された魔人は、数メートルほど土煙を巻き上げながら飛ばされたが、身の守りに徹した奴を一撃で倒すことは出来なかった。

「アルフレッドッ、人間にしては、面白い『魔法剣』を持っているなッ」

罅迫り合いになった魔人は、シャーロットから剣先を通じて体力を奪われていたが、顔色一つ変えなかった。

「アル・・・こいつの精力は、無尽蔵だよ・・・うつぶ、も、もう飲めない・・・飲みたくないよおお」

魔人は、長い舌を伸ばすと、俺の刃を舐め上げた。

「赤く輝く契約の装備は、魔法使いの娘だなッ。魔法使いは、魔人の出来そこないの末裔だよッ。お前みたいなシヨンベン臭い人間には、少し勿体ない装備だと思わないかッ」

シャーロットが魔人の末裔？ 俺は？ 母方の親戚だから鍛冶屋の息子か。

魔人の契約の装備は、ダラダラと締めりなくモンスター独特の塩素臭を放っている。

「シャーロットが魔人の末裔？ てめーのクセー装備おんなと一緒にするんじゃねえ！」

「いいや、お前の指を濡らしている『魔法剣』は、我が眷属と同じ匂いがするよッ。お前の装備は、なかなか趣味の良い装備おんなじゃないかッ」

俺は、魔人の発した突発的な闘気に気圧されて、後ろに跳ね退いた。

魔人の横長の瞳孔が広がると、瞳そのものが真っ黒く染まった。顔の中心に二つ穴が開いたような形相は、人の原型を留めていなかった。

「お前の『魔法剣』は、恋人か？」

悪党どもは、俺がフェルミの前で聞かれたくない質問ばかりする。

「・・・妹みたいなものだよ」

「俺たち魔人の嗅覚は、人間の何倍も鋭いのだぞッ、お前は、妹に劣情を抱くのかッ？」

「シスコンは、お互いさまじゃねえか！ このロリコンホスト野郎が」

「面白いッ、じつに面白い人間だッ。お前にも、俺と同じ苦しみを味あわせてやるうッ・・・」

魔人の真っ黒な瞳は、獰猛なサメのように無慈悲な輝きをしていた。

「アル・・・何か悪い予感がします。夜明けまで逃げ回しましょう」

普段、絶対に敗走を許さないフェルミは、魔人の放とうとしている得体の知れない剣技に、怯えているようだ。

「ボクが・・あんな悍ましい魔人の末裔だって・・・」

「シャーロット、しつかりしろッ！」

「もう間に合いません！ 剣で防いでください！」

魔人の『剣』が遠吠えを上げると、呼応するように『鎧』の虎が目を開いた。

「刈り取れッ！ 剣技オープン・ザ・ウインドッ！」

魔人の縦一文字に振り下ろされた『剣』を、シャーロットが受け止めると、眩い光で目が眩んだ。それは、朝日が差し込んだ窓のような光だった。

「愚かなるアルフレッドッ、己が半身を失う痛みを教えてやるッ！」

俺は、閃光の中でシャーロットの後ろ姿を見た気がした。

俺は、向かい風に立つ彼女の後ろ姿を見たことがある。

俺は、太陽のようなシャーロットを知っている。

『アルは、ボクが守ってやる』

「シャーロット、大丈夫か？」

『ボクのことには気にするなよ』

「気にしちゃいけないのか？」

『気にしてほしいけど・・・アルの夢を叶えるのためにボクは、重荷になりたくないんだ』

「なに言ってるんだよ？」

俺がシャーロットを守ってやるし、俺が皆の夢を守ってやる」

『ボクは、アルのそういうところが好きだった』
「なんで過去形なんだよ」

『ボクの夢は、もう叶いそうもない』
「馬鹿言つなよ。シャーロットは、強いんだろっ？」

『ボクは、よく泣くし、本当は、弱虫なんだ・・・』

俺は、閃光の光に一瞬気を失っていたようだ。

「な、なんでえッ、いやあああ！」

フェルミは、取り乱していたが、俺には、彼女が何に慌ているのかさえ把握できなかつた。

<メエリド様・・・もう夜が明けますわあ・・・>

「アルフレッドッ、ミアンの契約者のお前を殺せば、妹も死んでしまっつ。今日のところは、痛み分けにしておいてやろう」

痛み分け？ なに言ってるのホスト野郎が、夜が明けるから敗走するんだろっ、格好付けて馬鹿じゃねえの？ 俺が強気なのは理由があつた。

何がトリガーで発動したのか解らないが、先ほどフェルミが混乱の中で、新たなスキル『女神の時間』を手に入れている。不思議なもので契約者には、特殊効果の内容が一瞬で伝わるらしい。『女神の時間』は、ウェディングの自転周期一回（一日）で、三秒間だけ時間を止められる。

俺は、『鎧』の左側、フェルミの頭を撫でると、落ち着くように言った。

魔人が無防備な背中を向けている今、時間を止めてシャーロットを突き立ててやるッ！

俺は、左手を魔人に翳かざした。

「戦いの女神よ！ 時間を支配せよッ！」

今、この地上で動けるのは、俺たちのみ完全なる静の世界。
三秒間もあれば魔人の体をシャーロットで貫ける。

俺は、脇を締めて剣を握りしめると、魔人の背中目掛けて力いっぱい突きをした。

が・・・俺の手には、大きな岩を鉄の棒で殴りつけたような、ジンジンとした痺れだけが伝わってきた。

「い、いくら何でも硬すぎるだろう・・・」

動き出す時間の中で、魔人の『鎧』が固いのではなく、俺の剣が鈍なまくらだと悟った。

背中を押された魔人は、前のめりに膝を着いた。

<よくも下等なる人間の分際で、メリド様に土を付けるとは・・・殺やつちやいましょう>

『兜』の言葉に反応した『鎧』の虎は、こちらを睨み付けて口を開いた。

あの閃光を放たれても俺には、もう逃げる気力が残っていないかった。

完全なる敗北。

「ガオリ・・・アルフレッドには、妹を失う辛さを経験させるッ。
然るに彼は、自らミアンを差し出してくれようッ」

魔人は、そう呟くと深闇の彼方へと俺たちを残して消え去った。

「み、見逃してくれたのか？」

俺は、地面に大の字になって横たわると、エラハイの声が遠くで聞こえた。

「フェルミ・・・新しい特殊効果が手に入って良かったね・・・」

「アルは・・・まだ・・・気が付かないの？」

嗚咽にする彼女は、微かに聞き取れる声で言った。

死の淵に立ったフェルミは、時間を支配する凄い特殊効果を得ていた。

朝日が頬を照らすと、心地よい風邪が太陽の香りを運んできた。

輝きを失ったシャーロットは、戦闘が終わって何時間経っても装備解除しなかった。

剣技オープン・ザ・ウィンドは、契約の装備から魂を刈り取る禁術だった。

俺の手には、赤黒い『魔法剣』だった物体が残された。

17・俺がみんなを守る 後編

俺は、魔人メリドとの対決から一週間が経っても、王都サウスファイアを目指す気持ちになれず、まだ『旅立ちの街』で日がな寝て過ごしていた。赤黒く変色した『魔法剣』は、聖布に包まれて教会の祭壇に安置されていたが、そこにシャーロットの魂が無いのなら、俺は、何に安寧を願えば良いのだろうか。

『アル、ボクを助けてほしい』

思い出すのは、契約を催促するはにかんだ笑顔と、彼女の前で醜態を晒してばかりの俺の姿だ。俺は、冒険者となってから数カ月間で、彼女たち契約の装備が誇れる大義を果たしたのだろうか？ 今でこそ街を救った『剣士』として、生まれ故郷の街まで名前が轟いているらしいが、誰が俺の手柄だと信じるのだろうか。

「今日は、ミリアムが街を訪れる日です。少しは、シャンとして停留所まで迎えに行きなさい」

フェルミは、俺を前に歩かせようと、何事もなかったかのように振る舞っている。意外なことに彼女は、シャーロットを失ったことに、誰よりも動揺していた。たぶん涙一つ流せなかった俺は、誰よりも事実を冷静に受け止めていたはずだった。

「えーと・・・シャーロットの両親は、いつ遺品を取りに来るんだっけ？」

「彼女の遺品は、ほとんど衣類だから処分してほしいと言われていきます。この話しは、もう何度もしていますよ」

「『魔法剣』はどうするの？ いつまでも教会に置いていくわけにいかないよ。俺たちも、そろそろ冒険に出かけなきゃいけないし・・・」

・ここにいたら、また魔人が襲ってくるかもしれないよ」

「旅立ちの街には、王都の一個師団が常駐しているのよ。ここより安全な街があるかしら？」

彼女は、俺の寝ていたベッドのシーツを剥がすと、ミーコと一緒にミリラムを迎えに行けと言った。

「剣士様は、シャーロツテのことを妹だと言ってたけれど、普通のお兄ちゃんは、妹のことを好きになつたりするかにゃん？」

ミーコは、停留所に向かう道を俺の前や後ろになりながら、クルクルと回りながら歩いている。

「好きになつたりするよ・・・お前の馬鹿兄貴も、お前のが好きなんだろっ？」

「お兄ちゃんは、変態だにゃん」

俺は、魔人の言っていた半身を失った悲しみと、恋しい気持ちを味わっていた。あの魔人がミーコを取り戻そうと必死なのは、今の俺がシャーロツテをこの手で抱きしめたい気持ちと同じではないか？ だからと言って彼女を奪ったシスコン魔人に、同情する気持ちなど一切ない。

「あつ、剣士様、あのホテル営業が再開してるにゃん」

ミーコが指差したのは、俺と彼女が契約した連れ込みホテルだった。俺がピンク酒場で酔った挙句、ピンサカ嬢と契約したことが、こんな事態に陥った原因だ。冒険に浮かれた俺は、旅で出会った猫娘に劣情を抱き、大切な物を失ったのだ。

「お友達の馬車が到着するのは、夕方なんだから、ちよつとご休憩していこうよ。剣士様が、毎晩ベッドで、シャーロツテの洋服を抱いて自主練してるの知ってるにゃん」

ミーコは、俺の手を握った。

契約者の場合、自主練とは言わない・・・言うかな？

「俺の部屋を覗くの禁止だからね。アレは、プライベートな行為だからね」

「そんなこと、どうでも良いにゃん」

「どうでも良くねえよ。」

俺は「手はノーカン、手はノーカンにゃん」と繰返す、猫娘に催眠術をかけられて、ホテルへと入ってしまった。意思が弱すぎる。

赤い壁紙の部屋で俺は、ベッドに仰向けになると馬乗りになったミーコにされるがまま、上着を脱がされた。さすが元ピンサ力嬢、服を脱がすのが手慣れている。彼女は、俺の腹筋に両手を乗せると尻を浮かせて顔を胸元に寄せた。猫がミルクを掬い上げるピチャピチャと、唾液のいやらしい音が聞こえた。

「なあミーコは、なんでピンク酒場で働いていたんだ？ それに乙女なのに、誰にでもこんなことしているのか？」

「最近では、禁忌タブーになっていているけど、長い冒険の旅で装備は、契約者の性的欲求も満たしてやったにゃん。ピンク酒場は、そうした悪習を模した、契約者と装備の出会いの場なのにゃん。王国中のピンク酒場を巡って、強い『剣士』を探していたにゃん」

「なんで『剣士』限定なの？ 『英雄』の方が・・・」

ミーコは、大剣豪ルロイドの未亡人だった。

「しかし昔の悪習って。ミーコは、いったい何歳なんだよ？」

「女の子に歳を聞いては、嫌われるにゃん」

ミーコの目は、薄暗い部屋で赤く輝いていた。

それは『魔法剣』の輝きに酷似していて、俺の心を困惑させる。

「なんで・・・装備の『死』は、契約者の『死』じゃないだろう？」

「装備中に契約の装備が死ぬ理由は、二つあるのよ。一つは、契約者の刻印や装備が破壊されて、『装備』と『肉体』の入れ替えが不可能になったとき。契約者の『死』も刻印が破壊されたと同義であ

り、現世に『肉体』を呼び戻せなくなるにゃん」

「なるほど、乙女の装備化は、神様との契約により『肉体』を生贄に、『神の力（装備）』を譲り受けることだと・・・冒険学の授業が苦手だったから、そんなことも忘れていた」

「契約者は、恩恵を受けても、生贄は、乙女なのだから失うものはない。だから装備が死んでも、契約者は、何の不利益も被らないのにゃん」

「もう一つの装備の『死』は？」

「シャーロットのように『魂』を神様に捧げられてしまった場合。装備化している彼女の『魂』は、本来『魔法剣』に乗り移っているけれど・・・」

「だから契約の装備には、彼女たちの意識がある。『魂』を現世に固着して『肉体』と『装備』だけを入れ替えるだけだからね」

「お兄ちゃんの剣技オープン・ザ・ウィンドは、その『魂』を『肉体』の保管されている、神様のもとに送るにゃん。現世と神様の世界は、『肉体』と『装備』しか通れない壁があるけど、その壁に窓を開けて『魂』を本来不可分であるべき『肉体』のもとに届けるにゃん」

「現世と神様の世界を分つ壁に、窓を開ける剣技・・・」

> i 3 4 6 0 7 — 3 7 0 8 <

あのととき眩い光の中で俺は、シャーロットと最後の別れを聞いた気がしたが、あれが幻ではなく、神様の世界に旅立つ彼女の遺言だったのではないか。

『ボクの夢は、もう叶いそうもない』

シャーロットは、剣技オープン・ザ・ウインドを受けたとき、あの一瞬で永遠の別れを悟っていた。彼女は、最後まで俺の心配をしてくれていた。俺は愚か者だ。

「剣士様……そろそろミーコもお願いするにゃん」

ミーコは、俺の脚の付け根を親指と人差し指で確認すると、いつの間にか裸になっていた上半身を密着させてきた。俺は、彼女の冷たい肌の感触と、縋るような上目使いに、やるせない気持ちになった。

「俺は、何をやってるんだ？」

俺は、ミーコのおでこにキスをすると、立ち上がって洋服を着た。頬つぺたを膨らませてご機嫌斜めの様子の子のミーコは、裸のままでシルクの下に潜り込んだ。

「大剣豪ルロイドが死んだとき、ミーコは一度死んでいると言ったね」

「うんう？ ま、まだミーコは、イッてないけど、確かに言ったにゃん」

シルクの下でモソモソしているミーコは、いったい何処にイこうと言っのか？

「刻印が破壊されたミーコの『魂』は、『肉体』に戻って現世に帰ってきた……『装備』が原型を留めていれば、生き返ることが可能なんだね」

「んっ……あん、あん……そうにゃんっ」

ミーコは、艶かしい吐息で応えた。

さかりのついた猫のような、フーフギヤーという喘ぎ声には、正直ドン引きだ。

「ど、何処に行けば、シャーロットの『肉体』を取り戻せる？」

「も、もうすぐ……イ、イクから、ちよっと待やってるみゃ」

「おみやさんはッ！ さつきから一人で何処にイこうとしとるんだぎゃッ！」

俺がシルクを無理矢理はぎ取ると、自分の胸に両手を当てて、白い顔を真っ赤に染めたミーコがいた・・・はうッ！・・・『見ただけでイツちゃった伝説』を作っちゃいました。

お下品で、すいませんでした。

バスの停留所では、ミーコに見ちゃってすみませんでしたの意味を込めて、焼き芋を買ってやった。彼女は、ちっとも気にしていなかった様子で、美味しそうに芋を頬張っている。

「魔人の契約の装備は、常在戦場に対応するため、すごく敏感な体に作られてるにゃん・・・いつでもヌレヌレ発情期だから、あまり気にするにゃん」

「そう言われても・・・そんな年中発情している女の子が隣にいるのは、気になりますよ」

「剣士様が『勇者』になる条件は、童貞だもんね。まあ手はノーカンなんだから、手以外でもノーカンだと思うよ。旅に出たら、ちゃんと相手をしてやるにゃん」

「そういうものですかね・・・では、犬に噛まれたと思って忘れませす」

むしろ俺が、慰められているのが変な感じだが。

「それより話しの続きを聞かせてやるにゃん」

ミーコは、指に付いた芋の食べかすを舌で掬いとった。

「ああ、シャーロットの『肉体』と『魂』を取り戻す方法を聞かせてくれ」

「魂の抜けた『魔法剣』を神様に返せば、『肉体』と『魂』は現世に帰ってくるにゃん」

・・・それだけ？

俺は、天上界で神様と戦って取り戻すとか、物凄い手間のかかる壮絶な冒険を予想していたのだが、借りた物を返すだけなら、けっこう簡単な条件だと思った。

「だけど現世と神様の世界には、『魂』が通れない壁があるんだろっ？」

「浸透圧って知ってるかにゃ？」

「理化学分野の成績は、優秀な方だからね」

「もともと人間の『魂』は、神様の世界から現世に送られた物だから、『魂』が現世に帰る分には、壁の効果なんてないにゃん」

「『魔法剣』を神様に返す方法は？」

「北半球の『ヤパング』という神々を祀る国がある。ヤパングには鍛冶屋の派生『刀工』という刻印を持つ者がいる。彼らの『奉納』のスキルで、壁に穴を開けて返すにゃん・・・お兄ちゃんの剣技才ーブン・ザ・ウインドと同じようなスキルだにゃん」

「北半球か・・・モンスターの巣窟『Land of Adventure』を抜けて行く必要があるね」

「『勇者』を目指して王都に行くか、シャーロットを取り戻しに北半球に行くのか？ 私の剣士様なら答えは、決まっているにゃん」

「ミーコッ！ 俺たちは、北半球に向かうぞッ！」

ミーコは、何処から取り出したのか、紙吹雪とパフパフと鳴るラッパで、俺の決意を盛り上げてくれた。俺は、ベンチの上に立ち上がると、左手を腰に当てて、たぶん北に向かって右人差し指を差した。

「待ってるシャーロット、すぐに迎えに行つてやるぞッ！」

・・・まあ、宣言したのは、気分の問題なんだけど。
興奮すると周りが見えなくなるのは、俺の悪い癖。

「アル・・・お出迎えご苦労様」

俺とミーコの馬鹿騒ぎを遠巻きにしていた群衆から、装備を身に纏ったカインが現れた。

「えーと、ミーコ・・・カインを紙吹雪で迎えてやれ」

ミーコは、意味も解らずカインの頭の上に紙吹雪を散らした。

「ところでカインは、ミアムの護衛かな？」

「うん。冒険者の初仕事が、馬車で移動する友人の護衛だなんて、街を救ったアルには、ちょっと恥かしくて自慢できないね」

カインは、照れ笑いをしているが、護衛任務も立派な仕事だ。

街を救ったなんて俺のことを持ち上げると、『鎧』のモーリが発狂するんじゃないか？

シャーロットの親友だった彼女は、誰が本当に街を救ったのか解っているだろう。

「アルくん、シャーロットさんのこと気を落とせないでね・・・彼女は、アルくんを守って死んだこと、後悔してないと思うんだ」

カインに遅れて大きなリュックを背負ったミアムは、会うときなかり捲し立てた。

「い、いや級長、シャーロットは、まだ助かるかも知れないんだ」

「それでね、私は、色々と考えただけど、彼女のお願いを聞くことにしたのよ」

「落ちて着け級長、俺の話をちゃんと聞けよ」

ミアムは、ハンカチで涙で曇ったメガネを拭くと、俺にウィンクをした。

相変わらず人の話しを聞かない女だ。

というか、なんでウインクしてるの？

「ほら・・・ねっ、アルくんなら解るよね・・・ほら・・・ねっ」

ミリアムは、目にゴミでも入ってるの？ とか言っただけなのだろうか。

まったくもって理解し難い女の子だ。

「もうっ、メガネだよ・・・私は、今メガネしてないでしょう」

「ああ、なるへそ」

俺は、意味が解らなかったが、とりあえず適当な返事で誤魔化した。

「良かったよ、忘れちゃったかと思った。では、契約成立ということ・・・」

ミリアムは、愛想笑いしている俺の唇に、自分の右掌のペンタグラムを押し付けた。

彼女は、大勢の観衆が見守る中、俺と契約をした。

「な、なんで級長が？」

「『ここぞというときは、契約者の前でメガネを取れ、どんな男も契約を申し込むだろう』って、アルくんが言った台詞だよ？」

言った！ 確かに言ったけど、俺は契約申し込んでねえじゃん。

こいつ全く人の話し聞いてねえよ！

「アルくん、わ、私初めてだから痛くしないでね・・・ひッ、ひたあッひいたいよお・ら、らめえッ！」

立ち登る白炎は、フェルミと同じ純白の装備を意味している。

俺も久々の痛みで掌が焼けるように痛かった。

俺は、夕焼けを反射してオレンジ色に煌めく純白の『剣』を手に入れた。

ここにきて、何となく新しい契約の装備を手に入れてしまった。

「何者にも染まらないフェルミの白さもいいけど、どんな色にも染まるミリアムの白も良いね」

カインは、顎に手を当てて『剣』をマジマジと見た。

「ミリーコは、ほかの装備の初契約に、立ち会っても良かったのかにや？」

「まあ成り行きだからね・・・というか、級長は、成り行きが初めてで良かったのか？」

「・・・うん・・・ごめんね、私みたいな行き遅れが、シャーロットの代わりで・・・」

なるほどミリアムは、シャーロットを失った俺を慰めるため、契約を名乗り出てくれたのか。

俺は、『剣』の刃にキスをすると、高らかに掲げた。

「『押しかけ女房ミリアム』ここに誕生ッ！」

・・・。

「それは、あまりと言えば、あまりだろう」

カインは、ネーミングセンスの悪さに手で顔を覆い隠した。

まあ通り名は、あとでゆっくり考えてあげよう。

教会に皆を連れて帰るとフェルミは、ミリアムと契約してしまった俺の不甲斐なさを責めた。

「案の定と言うか、今回ばかりは、予想外の出来事に開いた口が塞がりません」

「本当に不慮の事故だったんだよっ」

「アルは、嘔吐きです。ミリアムみたいな真面目な娘が、初契約を勢いだけでさせるはありますか。きっとシャーロットを口実に、

契約したい〜とか、させろ〜とか、口説き落としたに違いありません」

と、フェルミが言うとミアムは、手を挙げて発言を求めた。

「私、てつきりシャーロットさんが死んじゃったのかと思って・・・彼女から手紙を貰っていたから、彼女の代わりにアルくんの『剣』にならなきゃって思ったの」

「手紙？」

シャーロットの手紙には、彼女が契約の装備としての葛藤が綴られていた。

『アルは、ボクのことを強い娘だと思っっているが、本当は、すぐ泣くし、弱虫なんだ。素直になれないボクが悪いことは、よく解っているつもりだけど、ボクが本音を漏らせば、優しいアルのことだから、それを重荷に感じるかもしれない。』

アルは「刻印だけで資質が計れないから、みんな成りたい自分を追いかけられる」と言ったが、それをボクは「運命を切り開くのは自分自身を信じる心だ」と解釈した。もしかすると、本当のボクを知ったら、アルの気持ちは離れてしまうかもしれない。

だけれど、ミアムの言うとおり、アルやフェルミには、ほんの少しだけ甘えてみようと思う。自分自身を信じてみよう。ボクのせいでアルたちを傷付ける結果になったら、そのときミアムが慰めてやってほしい。

君の友人シャーロット・S W・ライダー』

級長の読み上げた手紙の内容にカインは、号泣しているが、ほかの皆も似たようなものだろう。また俺だけが涙を流せなかった。たぶんシャーロットは、俺を誤解している・・・俺は、女の子を食い物にする汚い男で、彼女の言うとおり、女の子を盾にして戦う卑怯者だ。

「おばえら、なんでえ泣いてるのよお・・・シャーロットは、まだいぎているんだぜえ？」

不思議なことに俺は、悲しいことがあると鼻水が止まらない奇病を持っている。

そして鼻水止まらない病を発症すると、いつもフェルミが抱きしめてくれる。

「アル、泣きたいときは、泣けばいいのです・・・鼻水を拭きなさい」

人前でけして涙を流さない代わりに、目からも大量の鼻水が出る。「フェルびい、いつも有難うね」

俺は、異常なほど強がりな男である。

俺は、けして人ばえでば泣かない男だ。

シャーロットを取り戻すと決めた俺たちは、王都サウスファイアを経由して、モンスターの巣窟『Land of Adventure』を縦断して北半球にあるヤングを目指すことになった。王都から北半球へは、冒険者たちが切り開いた北半球まで伸びる街道があり、比較的安全に目的地を目指すからだ。王都では、唯一アクセサリーを手にした騎士団長との謁見も、先日の街を救った功勞に約束を取り付けた。

またカインたちは、自ら冒険を求めて王都まで同行することになり、山賊から接收した馬車を改装して、俺たち七人の冒険の脚に使うことになった。

冒険に出発する朝を迎えると俺は、早朝からエラハイに修行の成果を披露していた。

「最初にアルとお嬢ちゃんを森で見かけたとき、冒険者に向いてないだろうと、二人を引き離すつもりだった。ウチの人を見る目も、まだまだ曇っているようだね・・・合格だよ」

エラハイは、俺が正面に構えた剣を軽くないすと、口角を上げて笑った。

「合格と言われても俺は、まだ一太刀だってエラハイに届いてないじゃないか？」

「ウチが教えられるのは、冒険者としての気構えだけだよ。正面に構えた剣は、十分様になってきてるし、以前のように逃げ腰でもなくなった。アルの剣には、みんなを守るんだとの強い想いが籠められている」

「剣に想いが籠っている。そうかもしれないね」

俺は、シャーロットの剣技と同じように、正面の構えに変えていた。

「アル、ちょっと良いかしら？」

フェルミは、手招きをして俺を呼んだ。

「どうしたの？ モーリたちと馬車の荷台に部屋を作ってるんだろっ？」

「部屋は、モーリたちの趣味に仕上がりました」

「ピンク色？」

モーリとマーシャは、街でピンク色の布地を大量に買い込んで、荷台に作られた部屋をピンク色一色にデコレーションしようとして企んでいた。フェルミは、その趣味の悪さに耐えかねて、昨晚からモーリたちの作業を監視していたのだが、どうやら押し切られたようだ。「あんな趣味の悪い部屋で、毎日寝起きするかと思うと気が滅入ります」

「それで、俺に愚痴をこぼしに来たの？」

「それもあります・・・人が増えてから、二人で話す機会もなか

ったので、何か話でもないかと思いました。アルは、私に何か話したいこととかありませんか？」

自分で呼び出して相手に話題を望むとは、どんな話題を期待してるんだ？」

「そうだな・・・とくにない」

「では、何かお願いごととか・・・私にして欲しいことは、ありませんか？」

俺は、首を捻って考えた。

フェルミの物言いは、遠回しに何かを要求している気がする。

「フェルミは、俺にお願いがあるんじゃないのか？」

彼女は、顔を赤くして大きく横に振った。

なんで照れてるんだろう？

「と、とにかく私は、最近頑張っている、アルに何かしてあげたいと思っています」

俺は、少し屈んで頬つぺたを突き出した。

「では、ご褒美にチューしてください」

フェルミは、俺の頬を両手でしっかり掴むと、唇にキスをした。

頬つぺたにチューで良かったのに・・・まあ・・・良いか。

お互いの舌を絡みつける大人のキスは、俺の思考を奪った。

っていうか、上手く息が出来なくて苦しい。

「ぶっはあ〜」

「なんですか、その息止めてましたみたいなりアクションは、私に恥をかかせるつもりかしら？」

フェルミは、上気した顔を背けた。

「あ、有難うございました」

「アルがどうしてもキスがしたいと言うから、ご褒美にキスしてあ

げました」

彼女も俺に負けず劣らず強がりだ。

「今のキスは、俺から頼んだの？」

「・・・キスで良かったです。手はノーカウントだと言われたら、殴ってやるうと思いました」

「そんなこと朝っぱらから、頼むわけないでしょう」

フェルミは、口を両手で覆い隠して、驚いた表情で睨み付けた。

「よ、夜っぱらなら、手でしろと」

「た、頼むかよ・・・頼むかも？」

フェルミの強烈なビンタを喰らった俺は、腫れた頬を押さえながら馬車に向かった。

馬車の荷台では、フェルミが偉そうに「殿方のキスと言うものは」と、モーリたちに異性ととのキスを講釈していた。こういうフェルミは、本当に可愛いと思う。

俺は、手綱を取るカインの横で、見送りに出てきたエラハイ夫妻とユングに手を振った。

街の裏門から『中央貿易行路』に向かう途中、外壁近くにある酒場から、水筒を抱えて出てきたエイミーを見掛けた。

一人で酒ばかり飲んでいる彼女とは、あまり話す機会が無かったが、やはり俺の憧れる大人の色気があった。いつも彼女を目で追っていた俺は、フェルミの言うとおり色白の肌に、シャーロツテの面影を抱いていたのかもしれない。

長いようで短かった『旅立ちの街』に別れを告げると、少し感傷的になった。

「昨晚、教会の渡り廊下で、フェルミとミリアムがキスを交していたよ」

「ど、どうして？ フェルミには、レズ気があるのかな？」

カインは、俺の言葉を笑い飛ばすと、

「古参の装備は、新しい装備を認めたときに、キスを交す風習があるんだよ。フェルミは、冒険に先立ってミリアムを仲間と認めたと言うことだ。モーリは、マーシャを永遠に認めないらしいけど・・・。マーシャは、それを放置プレイだと、喜んでいるのだから始末に負えないよ」

「そうか・・・だから、あるときシャーロッテにキスしたのか」

「アルは、本当に冒険学の授業を、何も聞いていなかったんだね」
カインは、再び豪快に笑ってから真顔になった。

「シャーロッテを取り戻した後、アルは、道案内役のミーコとの関係をどうするんだい？ 彼女がいる限りアルたちは、魔人の標的になるだろう。酷な言い方だけれど、ミーコと契約を維持している限り、何度でも今回のような不幸が付きまとう。僕は、ミーコの装備解除の方法を見つけるべきだと思う」

カインは、シャーロッテと同じことを忠告してきた。

優等生の考えることは、だいたいにして同じ。

「まあ結局は、魔王を倒せば、不幸の連鎖を断ち切れるってことだよ」

「過去に魔王討伐を口にした冒険者は、非業の死を遂げている・・・。アルには、関係のない話だったね」

カインは、俺が晴天に向かって笑顔でいたので、それ以上の忠告を止めた。

「俺は、フェルミの夢も、シャーロッテの夢も叶えてやりたい。ミーコが安心して暮らしていける世界も作りたい。級長にも意中の男性と幸せになつてほしい。もちろんモーリ、マーシャ、リリイ、エラハイ、ナルル、ユングにも幸せになつてほしい・・・。エイミーのアルコール中毒も、いつか治してやりたいんだ。なあカイン、俺の夢は叶うだろうか？」

「アルの夢なら、きっと絶対に叶うだろう」

カインは、無責任に言った。

俺の背中で聖布に包まれた『魔法剣』は、何も話さないけれど、きっと同じことを言うだろう。なぜなら優等生の考えることは、だいたいにして同じ。

『ボクにも幼い頃からの夢があるんだ……それは、叶うだろうか？』

「シャーロットの夢なら、いつか叶うよ」

「いつか……」

あとがき&mp・予告【おまけ】

【おまけ】 魔人メエリド SIDE

「アルフレッドのやつ、僕のミアンと契約しやがってえ!」

「坊ちゃん、まだ背中を小突かれたことに腹を立ててるんですか?」

「うるさい! 生意気な口を聞くんじゃない!」

「けど人間の街を襲ってから、毎日イライラしてますよ・・・男の子にも、メンスがあるのかしら?」

僕が生意気なピュンヌをメイド長に取り立ててやったのは、ピュンヌの赤い目が、末の妹ミアンに似ていたからだ。そうでなければ、誰がバニーガールの出来そこないをメイド長に取り立てるものか。

ただど悔しいことにピュンヌが指摘したことで、一つだけ正しいことがある・・・当然、男の子の僕に、生理がくるわけがない。アルフレッドに喰らった最後の一撃は、下等な人間どもの『神速』を遥かに超えていた。やつの動きを目で追えなかったことが悔しくて、苛立ちを覚えている。

「あの、しゅばって移動するスキルは、ミアンの『超神速』よりも早かった・・・あのスキルを僕も欲しい」

「剣士様が最後に使ったスキルは・・・」

ピュンヌは、左右の長い耳を交互に動かすと、瞑想状態に入った。彼女は、『兜』の分析力でアルフレッドが最後に使ったスキルを解析しているのだ。

「『鎧』の特殊効果『女神の時間』ですね」

「ガオリの『鎧』に付加できるスキルなの?」

「ガオリ、こつちにいらして下さいませ」

ピュンヌは、腰に剣を携えたガオリを呼び付けた。

「拙者に何のようだ？」

ピヨン又は、おもむろにガオリのメイド服の上着をたくし上げると、ガオリの胸の谷間にある刻印を舌で舐めまわした。

「お主・・・また、このように破廉恥な真似を・・・あ」

ガオリに限らず魔人は、総じて敏感なので、舌で舐め回されただけで腰を抜かしてへたり込んだ。

「坊ちゃん、残念ですがガオリのアーカイブには、『女神の時間』が記録されておりません」

「あのしゅばつってスキル欲しかったのに・・・虎のお姉ちゃんは、ぜんぜん使えないよお」

ガオリは、僕のメイドたちの中で一番年上のお姉さんだけど、ぜんぜん使えない奴だ。

「アルフレッドは、凄いスキルを沢山持つてるんだよ・・・なのに僕の『装備』ときたら、口うるさい『兜』と、使えない『鎧』と、犬臭い『剣』しかないなんて、なんかズルくない？」

僕は、友達が僕の持っていない玩具を持っていたら、不貞腐れるタイプだった。

あわよくば盗んでも良いと思っている・・・魔人だからね。

「せっかくミアンの居場所が解つても、街の警備も厳しくなつて、グラスマン程度で襲撃しても街の中まで入れないよ」

「だけど人間の街を襲うには、太陽に苦手なモンスターで、日陰のない草原を行軍しなきゃダメなんですよ・・・夜に移動しても街に着く頃には、夜が明けてしまっし、結局グラスマン頼りですよね」

「ピュンヌ、パンツを下げてお尻を向ける」

彼女は、なんのことやらと思ったが、主人の僕の言うことに逆らえなかった。

「ガオリ、この生意気な女の尻に噛み付いてやれ・・・僕だって、人間の街をモンスターで襲えないことぐらい、知ってるんだよ！」

ガオリは、先ほどのお返しとばかりに噛み付いた。

「い、ひいたいいいい、お許してくださいませえええ」

泣き叫ぶピヨン又の dashi ない顔を見るのは、愉快、愉快。

俺は、足元で昼寝をしているワオンを叩き起こして、散歩に連れて行くことにした。

「坊ちゃん・・・出掛けるなら、私たちも一緒にイキますよおおお
お」

「犬の姉ちゃんは、お前たちみたいに口うるさくも、馬鹿でもない・
・犬臭いけど、けっこう利口だからね」

僕は、ガオリにピヨン又の尻が千切れるまで噛んでいると命令して、メイド服のワオンの首輪に縄を付けて、草原に散歩に出かけた。

おっと、サングラスとスコップと紙袋を忘れるところだった。

では、改めてお散歩に出かけよう。

「どうして僕たち魔人は、太陽の光を浴びると力が減退するんだろ
う・・・」

僕は、蝶々を追いかけて走り回るワオンに聞いた。

彼女は、行動こそ犬と変わらないが、こう見えてなかなか賢いな
女だ。

「太陽は、私たちと人間を分つために存在するんですのん」

「こんなに綺麗なウエディングを、下等生物に我が物顔で歩き回られるのが気に喰わない・・・奴らは、無辜のモンスターの土地を荒らして、あまつさえ命まで奪うハイエナだ」

僕は、サングラスで薄暗い草原を見渡した。

「坊ちゃん、太陽が嫌いなのん？」

「太陽は、好きだ・・・妹のミアンも大好きだったからね」

僕は、落ちていた棒を遠くに投げた。

ワーオンが棒を取ってくると、もう一度投げた。

そんなことを飽きるまで繰り返した。

「ワーオンは、坊ちゃんのこと大好きなのん」

走って汗をかいた彼女は、僕の足元で仰向けに足を上げて寝転がった。

お腹を撫でて欲しいのオネダリポーズだ。

「わしゃしゃしゃッ、わしゃしゃしゃッ」

ワーオンは「わしゃわしゃ」言いながら、ヘソの辺りをくすぐるように撫で回すと、本物の犬のように舌を出して悦ぶ。これで犬臭くなければ、毎晩の慰み者にしてやるところだ。僕の中では、下から三番目の妹ワーオンが、ミアンの次に可愛い。

「坊ちゃん・・・ワーオンは、坊ちゃんが大好きなのん」

「僕は、大が付かない好きだよ」

「ワーオンは、下から二番目の妹なのん」

彼女たち姉妹は、腹違いのミアンを妹だと認めていない。

僕は、ワーオンのスカートの中に手を忍ばせると、パンツをずり下げて、脚の付け根をわしゃわしゃしてやった。

彼女は、ワンワンうるさく吠えた。

「いいかいワーオン、僕の妹を侮辱するのは、僕を侮辱することだ、今度ミアンを侮辱するのなら、このまま何時間でもわしゃわしゃするよ」

こんな拷問めいた悪戯は、彼女たち生粋の魔人を悦ばせるだけだ。僕とミアンは、サングラスなしで太陽の光を見ることが出来ない。僕とミアンは、太陽の下で夜の魔人（大人）の姿を維持できない。

魔王が契約者の子供を欲したとき、生み落されたのが僕ら二人だ。

僕は、呪われた人間の血が流れているだけでも、嫌悪感に死にたくなる。

「坊ちゃん、ワーオンは、わしゃわしゃ大好きです・・・坊ちゃんのも、わしゃわしゃしてあげますのん」

「子供の僕は、わしゃわしゃされても気持ち良くないから、夜にベツドでわしゃわしゃしてもらおうかな・・・」

「坊ちゃんスケベエですのん」

まあ結局、犬臭いワーオンは、夜の慰み者なんだけどね。

> i 3 4 7 0 4 — 3 7 0 8 <

以上、第二部に繋がるオマケエピソードでした。

【予告】

シャーロットを救うために旅立ったアルたちは、王都サウスファイアで唯一アクセサリーを手にした騎士団長と謁見して、『勇者』となるため欠かせないアクセサリーと契約出来るのか？そしてモンスターの巣窟『Land of Adventure』では、『籠手』の刻印を持つ美人姉妹に出会い（予定）ます。姉妹の持つ特異な刻印が第二部の物語で重要な鍵になります。物語の見どころは、シャーロットが登場するのか！（します）魔王と魔人メリドの関係が明らかに！アルフレッドはフル装備になるのか！

また完結しましたが、設定とイラストは第二部の資料用に、本文も若干の改稿続けると思っています。たまに覗いてやってください。そして需要があるのか解りませんが、『ちーかの』の設定で小説が書きたい方がいたら、設定持っていてもらって構いません。私も他の

作家さんの書いた『ちーかの』読んでみたいので、一声かけてくれたら嬉しいです。

最後に宣伝させてください。私は『超常科学研究会・未来少女工ビアン・』という作品も発表しております『エビアン』で検索すると、すぐに見つかるかと存じます、お目汚しにもならないかもしれませんが、ご一読頂ければ幸いです。

第二部『北半球編』は、年内こっそり発表を目指そうと思います。乞うご期待くださいませ。ご愛読ありがとうございました。

悠久剣士 11/11/2011

第二部 設定資料【随時更新】（前書き）

第二部本編は12月1日0時更新予定です。
宜しくお願いいたしますm m

第二部 設定資料【随時更新】

契約者（登場順）

【名前】アルフレッド・S W・ライダー

【刻印】右手の甲『S W』：剣士

【スキル（ はミリアム装備時のみ発動可）】

「風」剣技ハヤブサ

「風」剣技ジャックナイフ

【契約の防具】

兜：「作られた装備」ピーピングトム「聞き耳」

鎧：フェルミ・A r・オシリス「魔法耐性／全属性攻撃耐性／毒・

麻痺無効／【N E W】女神の時間」

脚：ミアン・L a g・コーデアル【昼】「忍び足／逃げ足」【夜】

「超神速／飛行脚／水上脚／背面脚／悪魔の嘆き／悪魔の怒り／悪

魔の誇り」

盾：

籠手：

アクセサリー：

【武器：剣】

「剣」轟くC W W

「剣」疾風シルフィーネ零式「不可視」

「剣」ミリアム・S W・ハイム「開発」

「剣」赤黒い魔法剣 現在使用不可

【名前】カイン・H e・フォンダ

【刻印】右手の甲『H e』：英雄

【スキル（ はリリイ装備時のみ発動可）】

「火」体技ファイヤ

「風」剣技ハヤブサ

「風」剣技ジャックナイフ

「水」体技ウォーター

「土」体技ニードルタツクル

「」剣技魅惑

「」剣技毒

【契約の防具】

兜：

鎧：モーリ・A r・バレキオス「開発中」

脚：

盾：マーシャ・Sh i・ガンティ「耐忍ぶ」

籠手：

アクセサリー：

【武器】剣／大剣／斧／槍／弓】

「剣」無名の刀

「剣」リリイ・S W・ブランドン「毒／魅惑」

契約の装備（契約者順）

【名前】フェルミ・A r・オシリス

【契約】アルフレッド・S W・ライダー

【血統】父：騎士／母：槍

【刻印】胸の谷間：鎧

【特徴】純白の鎧／金髪／碧眼／頑固／安産タイプ

【名前】シャーロット・S W・ライダー 現在使用不可

【契約】アルフレッド・S W・ライダー

【血統】父：魔法使い／母：剣

【刻印】右脇の下：魔法剣

【特徴】薄紅色に輝く魔法剣／剣技トップランカー／清純／強がり

【名前】ミアン・L a g・コーデアル
【契約】アルフレッド・S W・ライダー
【血統】父：魔王/母：不明
【刻印】左足の甲：脚
【特徴】艶やかな漆黒/昼夜二つの顔を持つ/ピンサカ嬢/性に対してオープン/というかエロい/手技が上手いらしい/大剣豪の未亡人/猫娘/魔王の娘

【名前】ミリアム・S W・ハイム
【契約】アルフレッド・S W・ライダー
【血統】父：剣士/母：盾
【刻印】右掌：剣
【特徴】白い剣/級長/世話焼き/メガネ

【名前】モーリ・A r・バレキオス
【契約】カイン・H e・フォンダ
【血統】父：旅人/母：弓
【刻印】胸の谷間：鎧
【特徴】真紅の鎧/コギヤル/女王様タイプ

【名前】マーシャ・S h i・ガンティ
【契約】カイン・H e・フォンダ
【血統】父：戦士/母：盾
【刻印】左鎖骨：盾
【特徴】ピンクの盾/変質者/M嬢

【名前】リリイ・S W・ブランダン
【契約】カイン・H e・フォンダ
【血統】父：剣士/母：剣

【刻印】 右掌：剣

【特徴】 藍色の剣 / 元盗品 / 礼儀正しい / カインより年上

今までに登場したモンスター（強さ順）

【鳥】 ピンジンマン

【鳥】 ピンジンマン長

【森】 リーフ・オーク

【森】 アーチャ・オーク

【森】 アーチャ・ゴブリン

【草】 グラスワーム

【草】 グラスワーム・セレクト

【草】 クラワーム・キング

【草】 グラスマン

【草】 プリースト・グラスマン

【草】 マスター・グラスマン

【人】 盗賊

【人】 山賊

【魔】 魔人メエリド

【魔】 魔王（？）

盗賊・山族・海賊などは、モンスターと同じ扱い（殺しても可）。

契約者の刻印 契約の装備装着可

【剣士】 右手の甲『S W』 【武器：剣】

【戦士】 右手の甲『W a r』 【武器：剣 / 大剣 / 斧】

【英雄】 右手の甲『H e』 【武器：剣 / 大剣 / 斧 / 槍 / 弓】

【弓使い】 右手の甲『A r c』 【武器：剣 / 弓】

【魔法使い】 右手の甲『M a』 【武器：剣 / 杖 / 本】

職人及の刻印 契約の装備装着不可

【旅人】 左手の甲『Tr』 【逃げ足】

【鍛冶屋】 左手の甲『Bl a』 【装備への特殊効果付加】

【刀工】 左手の甲『Bl a』 【装備への特殊効果付加/奉納】

北半球の鍛冶屋

【調理師】 左手の甲『Ch e f』 【食材鑑定/神の味覚】

【マメ知識】

主に第一部終盤から登場した設定解説。

契約の装備（女の子）は、刻印にキスをされることで『肉体』と『装備（剣や鎧など）』を交換して戦います。そもそも装備は『神様の国』にあり、乙女の肉体を捧げることで、装備を『神様』からお借りするものです。女の子は、装備になって『肉体』を捧げてしまっても、精神のみ現世（装備の中）に残っています。

メエーリドの『オープン・ザ・ウィンド』とは、現世に残っている女の子の魂を肉体を捧げている『神様の国』に飛ばしてしまう剣技です。同剣技を受けてしまうと、契約者の手元には、『装備』だけが残り、女の子の肉体も精神も失ってしまいます。

フェルミの『女神の時間』は、自転周期一回（一日）に一回だけ三秒間時間を止めることができるフェルミの固有スキルです。スキル発動中は、物体が固定されていますが、剣先や手で触れるものだけフェルミたちの同じ時間の流れになります。つまり空間が固定されていても切れいたり、殴ったりできません。

第一部終盤でミーコの説明に登場した『刀工』は、北半球の鍛冶屋だと言われています。南半球の鍛冶屋が使用できない固有スキル

『奉納』により、『神様の国』へ装備をお返しすることが出来ます。シャーロットの肉体と精神を、お借りしている『装備』を奉納することで、取り戻せます。

『神様の国』と呼ばれる虚数空間に『剣』や『鎧』があるのは、北半球の刀工たちが『奉納』のスキルを使って、神様に捧げてきた『装備』だとの説があります。つまり『契約の装備』は、もともと刀工たちが作って奉納してきた『装備』だということです。諸説あり。

1・登場したかもしれない

「聖夜の祝い事は、何処にいてもするべきです」

魔王討伐の旅を続ける俺に幼馴染のフェルミは、宗教行事を疎かにすると神罰が下ると、口を尖らせている。彼女の言い分は、正しいのかもしれないが、王都サウスフィアに向かう何も無い野原の真ん中で、どうやって七面鳥を調達すれば良いのか？ どうやって彼女達への贈り物を調達すれば良いのか？

俺は、一緒に旅を続けている親友のカインに相談すると、それら聖夜を彩る飾りに過ぎず、心を込めて祈りを捧げれば、とくに必須なアイテムじゃないと言った。

俺たちが住んでいるウェディングには、聖人の誕生を祝う『クリスマス』という宗教行事あり、その聖夜には、家族で集まって彼の誕生日を祝う。俺とカインのような契約者は、契約の装備である女の子たちを養うお父さんみたいな存在で、彼女たちにプレゼントの一つも送り、一年の活躍を労ってやるのが常識だった。

だが今年のクリスマスは、立ち寄る村もなく、王都まで道半ばとあって何も無いところで、馬車で過ごすことになるだろう。カインは、何も特別な用意など要らないと俺に言うが、旅立ちの街を出る際に、自分の装備たちには、一人づつクリスマスプレゼントを用意していた。

「プレゼント買うのなら、俺にも一声かけてくれれば良かったのに」
「僕の用意したプレゼントは、モーリが買い揃えてきたものだよ」

カインの装備であるモーリ・Ar・バレキオスは、『鎧』の契約の装備。なぜか俺に対しては、暴言を吐きまくる女で、けばけばしいメイクや、語尾を上げる話し方など癪に障る。なぜカインが彼女と契約をしたのか、全く理解に苦しむ。

「あの女は、自分用のプレゼントを自分で買い揃えたのか」

「僕は、そういうの疎いからね。モーリは、マーシャやリリーの分も見繕ってきたので、本当に助かるよ」

「そうなると同じパーティで、パーティするのに？ 紛らわしいな・
・一緒に冒険している仲間なのに、カインの装備だけサンタが来て、俺の装備にサンタが来ないのは、ちょっと気まずい」

俺は、しばらく考えてから聖夜の前日から、別行動にしようと思し出た。王都に続く『中央貿易行路』は、モンスターが生息する森や魔王の支払する土地『Land of Adventure』から離れており、複数の装備を持つ契約者ならば、ソロ（契約者一人）で行動しても危なくない。

カインは、申し出に頷くと聖夜前日から三日間だけ、別行動をすることに承服した。

「でも、彼女たちが一緒に過ごすつもりだったら・・・」

「少なくともフェルミは、モーリたちと仲良くしているわけじゃないし、モーリだって俺と聖夜を過ごしたくないだろう。彼女たちには、それぞれに別れて甘い夜を過ごすことにしたと、言い訳しておいてくれよ」

「ならば僕らは、聖夜前日に場所を変えずにモンスター退治をするよ。アルたちは、そのまま二日間先に進んで、三日目に移動せずに待っていてくれ」

「馬車は、後から追い付けるようにカインたちが使えば・・・三日目には、先行している俺たちに確実に追付ける。聖夜は、お互いに

別れて過ごそう」

俺は、プレゼントを用意できなかった代わりに、何かを用意しなければと思った。それが高価なものでもなくとも、彼女たちが喜んでくれそうなもの。とはいえ、俺の身体にリボンを巻いても仕方ないが。

俺たちが住んでいる世界『ウエディング』の夜は、青と紫の二つの月と、死期が近付いた赤い月（太陽）のせいで、薄ぼんやりと明るい。野宿をしている俺たちは、順番で野営に立っており、モンスターに夜襲に備えている。カインは、寝ている俺を揺り起こすと、代わりに馬車の荷台に作られたベッドに身体を横にした。

「うう、さぶい」

そして太陽は、ウエディングの回りを回っている衛星で、年間を通して公転周期が一定であり、地方毎に気温や湿度に差があるものの、太陽の四季に対する影響は、とても少ない。しかしウエディングは、赤い月を周回する軌道が楕円であり、夜間の気温は、四季によつて異なり、その影響が微妙な変化を作り出していた。今は、赤い月から最も遠い冬である。

ことし春先に、クラスメイトの誰よりも早く成人した俺は、生まれ育った街で幼馴染フェルミと契約して冒険者となった。胸に『鎧』の刻印を持つ彼女は、爵位を持つ騎士の家系で育った優秀な『鎧』だ。

この世界の乙女たちは、体の何処かに『武器』や『防具』を意味するペンタグラムの刻印が浮かび上がる。このときの刻印の位置が、

彼女たちが何の武具であるか決めている。例えば『鎧』である幼馴染のフェルミの刻印は、カインの『鎧』であるモーリと同じ、胸の谷間にある。

この刻印の位置には、ある種の法則があり、接近戦用の武器は、腕の何処かに刻印が現れ、もつともポピュラーな『剣』が右の掌、『斧』が右二の腕にある。遠距離用の場合は、背中など背面に現れ、師匠の弓使いエラハイの契約の装備『弓』は、うなじに刻印があった。

装備系は、『鎧』が胸、『籠手』が左右の二の腕に別れて、『盾』が鎖骨、『脚』が足の甲など、それに見合った場所に刻印が刻まれる。そして未婚の女性であれば、何かしらの刻印が10歳を過ぎた頃に浮かび上がり、十六歳になり成人した場合に、契約者と呼ばれる俺のような男性と契約して、冒険の旅に出る。

女性が何かしらの有益な刻印を得るのに対して男性は、左右どちらかの手の甲に刻印が浮かび上がるものの、多くの者は、特別な意味を持たない旅人『Tr』の刻印が刻まれる。契約者として冒険が出来るのは、俺やカインのように、モンスターと戦うのに有効な刻印を持つ者だけだ。

俺は、グローブを外して右手の甲に刻まれた剣士『SW』を見て、それが持つ意味を考えていた。契約者である俺は、穢れを知らない乙女の刻印にキスをして、彼女たちを装備してモンスターと戦ったり、盗賊たちに無理矢理契約を強いられている女性の刻印にキスをして、解放したり出来る。

英雄の刻印を持つカインは、接近戦用の武器を全て使いこなすことも、それら契約の装備が持っている固有スキルを覚えることが出来るが、剣士の俺は、『剣』しか使いこなせず、覚えられる固有ス

キルも剣技スキルのみだ。契約者の中では、『剣士』の刻印が最も多く、それほど珍しい刻印ではなかった。

優秀な鎧だった幼馴染のフェルミは、俺と契約して魔王を倒すと言っている。理由は、一介の剣士である俺が魔王を倒したのなら、自分が優秀な『鎧』だと証明できると言うのだ。それが本当の理由なのか、正直今のところ不明だ。

フェルミは、毒や麻痺を無効化したり、一日三秒だけ時間も止められるスキル『女神の時間』も獲得しているので、優秀であることは間違いない。俺には、勿体ない契約の装備だ。

「剣士様、見張り番は、退屈でしょう？」

馬車の屋根に設置した見張り台にいた俺は、梯子はしの下から声をかけたミアンを覗いた。彼女は、魔王の娘であり、昼と夜で姿の変わる女の子だ。今は、色気のあるお姉さんの姿をしている。

ミアンは、梯子を昇ってくると、俺と背中合わせに見張りを手伝ってくれた。俺は、彼女がグッスリ寝ているところを見たことがなかった。背中越しに伝わる彼女の体温で、寒さが和らいだ。

「今さら、こんなこと聞くのは、忍びないんだけど・・・なんで俺と契約したの？」

「剣士様は、私の旦那似ていたから」

「俺が大剣豪ルロイドに？」

大剣豪ルロイドは、魔王討伐を公言した数少ない冒険者だ。俺たちの世界には『世界三大大口』という冒険者が語ると、大笑いされる旅の目的がある。「魔王を討伐する」「勇者になる」「海賊王になる」。

魔王の存在は、教会の経典に描かれていたものの、その姿を見た

者も、何処にいるのかさえ不明だった。そんな眉唾な存在を探して旅をするのは、酔狂だと言うのだ。

大剣豪ルドルフは、周囲の馬鹿にするのも気にせず、大勢の冒険者のリーダーとして、魔人なる存在を発見した。大口野郎と揶揄されていた彼は、その功績を称える銅像が王都中心部に立つほどの一角の人物となった。

勇者には、大勢の冒険者が挑んでいるが、未だに達成した者がいなかった。そして「勇者になる」と宣言することは、条件である童貞を守り抜くとの誓いであり、本来こっそり目指すものらしい。俺は、公言して憚らないが・・・口に出さないと決心が揺らぐからだ。あとウェディングには、三つの衛星による潮位変動の激しさから「海賊王」とか、そんな奴いないから。「海賊王になる」と言ったら笑われますよ。

「旦那のルロイドは、私と出会う前から魔王討伐を口にする、ちょっと変わった男だったわ」

「魔人の存在が明らかになった今でも、魔王の存在を疑う人は、多いからね」

「彼は、私の身体のコピーを知ってなお、契約をしてくれた・・・剣士様と同じ」

ミアンは、首を後ろに傾げると、俺の耳にキスをした。俺も同じように首を傾げたが、べつに唇を奪おうとしたわけじゃない。彼女がどんな表情をしているのか、気になった。

「俺は、魔王を倒すよ」

「だから契約したの」

俺は、羽織っていた毛布をミアンに渡すと、何も言わずに馬車の屋根から飛び降りた。

ミアンは、走り去る俺の姿を、悲しげな目で追っていた。俺が慌てている理由は、寒かったのでおトイレのためだ。

王都に続く中央貿易行路は、道のような明確な標識もなければ、ロードサイドに商店が立ち並んでもいない。行路沿い幅十キロほど木々が刈り取られ、モンスターが身を隠せないように整備されているが、永遠に続く野原みたいなものだった。

「しまったな・・・ミアンのやつ、まだ俺の方を向いてやがる」

俺は、背中越しにミアン視線を感じると、出る物も出ないと思っただ。ちゃんと伝えてから飛び出せば良かったが、なんとなく雰囲気的に「ちよつとトイレ」と言い出しにくかった。

日中ならテントを立てて、簡易トイレで用を足すのだが、夜だから面倒臭がったのが敗因だ。とりあえず俺は、小高い丘の向こう側を目指して全力疾走した。

「んっ？ こんなところに村があるぞ」

行路沿いは、王立騎士団により安全が確保されているため、地図に載っていない場所に集落を築く者たちがいる。丘の向こう側に見える村は、ひっそりとしており、人の気配がしなかった。

俺は、携帯式の松明を付けると、その村の入り口に立った。人影も、明かりも見えない。手前の商店らしき建物には、窓ガラスの破片が散乱しており、壁に血飛沫の跡もあった。どうやらモンスターに襲撃され、村人たちに放棄された廃村のようだ。

「どこでも良いのだが、せつかくだからおトイレを探そう・・・」

大だし」

真暗な商店のドアを開けると、店内に並んでいた商品は、何一つ残っていないかったが、トイレには、ちゃんと紙が残されていた。俺は「武士の情けとは、まさにこのこと」と呟いて用を足した。しかし、その紙は、モンスターが用意していた卑劣な罠だったッ！

ドヤドヤと聞こえる足音は、トイレの個室の前で止った。ポルルルルと喉を鳴らすような複数の呻き声は、鳩の頭と人間の身体を持つモンスター、ピジンマンだ。奴らは、人間を襲った際に、衣服を剥ぎ取り自分たちが着用すると、遠目なら人間のように見える仕草で、冒険者たちの目を欺く。

ピジンマンたちは、廃村となった村を根城に、訪れる旅行者たちを捕食していた。ここは、モンスターの住む村だった。俺は、まさに窮地に追い込まれていた。

コンコンと扉を叩く音は、俺がまだ気が付いてないと思って、人間の習慣を演じているピジンマンの奏でるデスコール。

「……すいません、隣が空いてると思うんですけど……」

俺は、静かにズボンをあげると、腰に差してあった轟くCWWを鯉口から浮かせた。一応、疾風シルフィーネ零式も帯刀していたが、狭いトイレなら刃長の短いCWWの方が小回りが効く。

俺は、痺れを切らした一匹がトイレの扉を蹴破ったので、同時に天井近くまで飛びあがった。奴らは、しゃがんでいたであろう俺の姿が見えないと、鳩のように首を小刻みに横に振って探した。俺は、個室の枠を乗り越えると、扉を蹴破った後ろのピジンマンの脳天から下顎までCWWを突き刺した。

頭を串刺しにされた鳩は、クウーウウと断末魔の叫びすら情けな

く、膝を付いて倒れた。個室を覗いていた鳩は、なぜか後方に現れた俺に驚くと、首を前後に振って威嚇してきた。

「鳩が豆鉄砲を喰らうとはッ！ このことだッ！」

俺は、そいつの嘴にCWWを突っ込むと、そのまま剣技ハヤブサで顔を左右に切り刻んだ。弾け飛ぶように顔面を失った鳩は、後ろ向きに便器へと倒れ込んだ。

人型のモンスターは、格の違いを感じると敗走するもので、二匹を一瞬で倒した俺から、一斉に逃げるようにトイレの入り口に向かった。トイレの入り口では、パニックを起こした鳩共が、我先にと押し合いへし合いで、出られなくなっていた。

俺は、個室に戻って松明を持って戻ると、一番手前の鳩が着ていた洋服の裾に火を付けた。鳥の焼ける匂いは、なんとも香ばしいかったが、このまま戦わず焼け死ぬ鳩が哀れな気がした。俺は、洗面所の水道の蛇口を指で抑えると、鳩に付いた火を消してやった。マツチポンプ。

「俺は・・・何やってんだか」

鳩は、何事かと事態を見守る様に静かになった。俺は、最初に火をつけた一匹の手を強く引つ張って、奴らを解してやった。ますます鳩たちは、首を捻っている。俺も自分の行動に首を捻った。

一番立派な服を着ている鳩が背後から現れ、俺の背中の匂いを嗅ぐと、なぜか握手を求めてきた。

「二匹ほど殺しちゃったけど、これで手打ちにしようぜ。引き分け、もう終わり・・・解るかな？」

人型のモンスターは、単語程度なら人語を解する。鳩共は、俺の言葉を理解したのか、道を譲ってくれた。鳩は、好戦的なモンスターではなく、捕食（人間を喰う）するため人間を襲うが、この時期の彼らは、冬籠りの準備が済んでおり、人を無暗に襲わない。

俺が商店から出ると、数えきれない何百の鳩が取り囲んでいた。彼らは、冬籠りのため廃村に集合していたらしい。正直、この数で襲われたら勝てる気がしない。

彼らは、紳士的に俺を解放した。

俺が馬車に戻るとミアンは、顔に付いていた鳩の血をハンカチで拭ってくれた。彼女は、何事があったのかと聞くので、丘の向こうにピジンマンの巣があったと教えた。

「戦ったの？」

「一匹ほど」

「この時期、鳩が人を襲うのは、珍しいわね」

ミアンは、たぶん俺が寝込みを襲って虐殺したと思うたのだろう。愁いのある表情を浮かべた。魔王の娘である彼女には、半分モンスターの血が流れている。モンスターとの無益な争いを好むとは思えなかった。俺は、彼らに解放された事実も伝えた。

「モンスターの衝動は、赤い月からの波動が影響していると考えられています」

「今は、一年で最も赤い月から離れているからね」

「魔王を倒せば、彼らとの共存もあり得ると思う？」

「モンスターが人間を喰らう・・・それが魔王に操られての行動な

らば、彼らとの関係は、元凶を断つた後で考えよう」

背の高いミアンは、俺を上から包むように抱き着いた。

俺は、今夜の戦いを教訓にしようと思った。

モンスターは、人間の敵。

しかしミアンの同胞。

聖夜前日の朝になると俺たちは、それぞれ別行動の準備をしていた。後から追い掛けるカインは、馬車から馬を一頭外すと、そこにテントや三日分食料など野営用の一式を積んでくれていた。

「今夜のパーティは、アルの顔見ないで済むと思うと、凄く楽しみだわ」

「本当に楽しみですよ」

モーリとアーシヤは、荷物を整理している俺のところへ、わざわざ嫌味を言いに来た。彼女たちは、ニヤニヤと意味あり気に笑うと、俺の荷物を覗き込んだ。

「あれれ、アルのパーティには、サンタさんが来ないみたいよ」

なるほどモーリは、俺がプレゼントを用意出来なかったので、別々に聖夜を過ごそうと提案した真意を見抜いているようだ。マーシヤも、荷物の中にプレゼントらしきものがないかと、覗き込んでいる。

「目に見えるものだけが、サンタの贈物じゃないよ」

「アンタ、相変わらず馬鹿よね」

「なんで馬鹿なんだよ」

「クリスマスにそんな台詞が言えるのは、馬鹿に決まってるじゃん」

モーリは、目に見えないプレゼントの方が難しいと言った。確かに俺は、現時点において、プレゼントを何にするのか決めあぐねていた。俺は一応、それぞれに宛てたクリスマスカードと、装備の手入れをするためのローション（モンスターから抽出精製）を用意していた。

「猫娘はともかく、フェルミと級長は、親御さんから預かってるわけでしょう。適当なプレゼントで済ませたら、三行半で契約解除されるわよ」

「そうですね、ローションなんか渡されたら、どんなプレイを要求されるのやら・・・ああ夜な夜な、ローションを塗られたら・・・」

「ローションは、ローションが欲しいみたいだぞ？」

マーシャは、俺の荷物にローションを見つけてから、それで磨き上げられる自分を想像して、感じちゃったらしい・・・相変わらずマーシャは変態だ。しかしローションは、なかなかナイスなプレゼントみたいだ。クリスマスに下着を送るバカツプルもいるし、まあローションは有りだな。

「アホかよ、サンタがローションを送っていいのは、上級者カップルだけだつうのッ」

「そう言われてみれば、女の子にローションを配るのも、なんか変だな・・・」

俺は、ローションを取り出すと、物欲しそうにしていたマーシャにあげた。彼女は、何度もお礼を言ったので「カインに見つかるな

よ・・・あいつにローシヨンプレイとかさせたら、壊れるまで磨かれちゃうぞ」と忠告した。

マーシャは、ともかくモーリまで顔を真っ赤にして礼を言ったのは、愉快だった。エロガキ二人組がいなくなると俺は、ローシヨンに変わるプレゼントを考えなくてはいけなくなった。というか、あんなに彼女たちが礼を言ったのだから、ローシヨンでも良かった気がした。

俺とミリアムは、大きな荷物を背負うと、フェルミが荷物を満載した馬を引いた。ミーコは、その馬の背に組まれた荷台の上で、サングラスをかけてお昼寝中だ。

「ミリアムとは、あとで荷物持ちを交代してあげます」

「馬を引くの下手だし、交代なしでいいよ」

「私の体力を気にしているのなら」

「フェルミさんは、騎士の家柄で馬の扱い慣れてるでしょう」

「では、このままで・・・ただし荷物持ちに疲れたら交代です」

俺は、フェルミとミリアムの会話に、少し前を歩きながら聞き耳を立てていた。学生時代に級長を務めていたミリアムは、そもそも世話焼きで、言葉使いも丁寧だったので、すぐにフェルミに気に入られた。もしも相手がシャーロットだったのなら、歩いて数分で口喧嘩が始まっただろう。

「・・・というわけです」

「ナルルさんは、良い教師ですね」

フェルミは、『旅立ちの街』でナルルに教わった契約の装備の心

得などを、偉そうにミリアムに講釈していた。彼女は、説明するとき人差し指を真直ぐ立てる癖がある。

「契約中の契約者と装備は、体力や疲労感を共有しているわけですから、無理に気持ち良くなるうとせず、契約者にイッてもらうのも、装備が快感を得る近道でもあるのです」

「学校では、そんなこと教えてくれませんでしたよね」

「そのためのテクニクは、色々とシスターに教えてもらいました。私は、教えに従い毎日鍛錬を欠かしていません」

「フェルミさんッ！ 私も自主練がんばるよッ！・・・どうやるの？」

「まずはですね、ここを、こんな風にして・・・こうして・・・」

「ええええッ！ そこに、そんな使用目的があったの？」

「ミリアムの見てもいいですか・・・ああ、そこです」

「これは、今夜から頑張らねば」

生真面目な二人は、毎晩どんな自主練を重ねるつもりなのやら。

馬車では、俺とカインが荷台の手前で寝起きしており、奥にある女の園を覗き見ることもなかった。

ミニコは、いつの間にか目を覚まして、馬の上から彼女たちに「そこより、ここにゃん」とアドバイスしていた。たぶん俺が、今振り返ったら命がない気がする。

馬鹿な会話をしながら半日ほど歩いたところで、早めのテントを張った。フェルミは、旗の用意をしていたが、ここまで目ぼしいモンスターもいなかったので、旗を立てるのを止めた。せつかくのクリスマスイブの晩、ほかのパーティと合流するのも野暮だろう。

「野営地も出来たことだし、近場で食材の確保といきますか？」
「私は、夕食の準備があるので、ミリアムとミーちゃんを連れて行つてください」

フェルミは、忙しそうに荷物からグラスやお皿を取り出して、丁寧に布で拭いていた。鼻歌混じりで作業をしている彼女は、今夜のクリスマスパーティを、かなり楽しみにしてる様子だ。

俺は、ミーコの足元に平伏すと、彼女の足の甲にある刻印にキスをした。ミーコは、痛いのか快感なのか契約の度にギャーギャー騒いで五月蠅い。ミリアムは、その様子を見て怯えた表情をしている。

「わ、私もフェルミさんと夕食の準備・・・」

俺は、強引にミリアムの右手を引っ張ると、掌を舐めるように舌を伸ばしてキスをした。べつにエッチな感じでチューしたわけじゃない、刻印との接地面が少ない方が痛くないかもと、彼女が提案したキスの方法だ。

ちなみに彼女達とは、初夜の儀式を済ませていなかったが、教会の牧師エラハイからコインを何枚か都合してもらっているの、俺の刻印に痛みがない。エラハイのように盗品調査を兼ねて、何度も儀式に足を運ぶ冒険者は少ない。

「昼間のミーコも、夜のミアンも『脚』の見た目は、同じなのに性能差があり過ぎるな・・・ミーコもちゃんと感じれば、新しいスキルが開発できるのかい？」

「たぶん無理っだったえ、装備した瞬間からイキまくりなのじゃん」

「イキまくりなのに、新たなスキルが発動しないとは・・・育て甲斐のない装備おんなだな」

それでも一応、『脚』の踵を踏みつけるように歩き出した。ミークは、ふぎゃ、ふみや、ふぎゃ、ふみやと、まるで子供が喜ぶ音の出るサンダルみたいに喘ぎ声をあげている。ちよつと楽しい。

さて今日のお目当ては、巨大芋虫グラスワームの家族で通称『グラスワーム王国』^{キングダム}。焼けば牛肉のステーキの味、煮込めばアンコウの触感という、捕獲レベルも手頃な食材向きモンスターだ。あれだ、あの感じ、今度は逮捕されなくてほしい。

「級長は、芋虫のプニプニした触感が気に入ってるんだよね？」

「は、はひいッ！ 早く挿入してほしいのです・・・」

俺は、『剣』の柄を濡らす彼女を舐めると、苦味のある石鹼の味がした。きつと装備をすると聞いて、慌てて石鹼で洗ったのだろう。清潔で良い感じだ。何処を洗ったのかは、男の俺には解らないけれど。

「だけど『剣』を握ると無意識にシャーロットのことを思い出す・・・
・暗くなるから止めておこう。」

俺は、地面に耳を当てると、地面の下を這いずる芋虫の動きを探った。芋虫たちは、口から土を体内に取り込んで養分を吸い上げると、お尻から同じ量の土を吐いて地中を移動している。ズンズンと土を掘り進む音は、数キロ先からも解るほどだ。だが人間が近付くと動きを止めて、捕食行動に移るため音が止まる。

俺は、剣の切先を地面に突き刺すと、ミリアムに意見を求めた。契約者の俺が地面に耳を当てるより、直接地面に突き刺した剣は、地中の僅かな音を発見できるからだ。

「アルくんっ、ここから北に200メートルに芋虫王国がいるよお・

・その先に複数の足音・村かな？」
「村？」

もしも人がいる村があるのなら、そこでプレゼントを購入することが可能である。それに教会があるのなら、長旅で腐食してきた戦利品の換金もしたかった。

「級長ツ！ とりあえずご褒美だ、受け取れツ！」

俺は、柄に縦に開いている穴に、人差し指を乱暴にグイツと突っ込んだ。「あうツ！」というミリアムの短い唸り声が聞こえた。俺は、北に向かって『剣』を振り回しながら、グラスワームの頭上を大きな足音で挑発した。

案の定、俺の足元から、一匹目のグラスワームが大きな口を開けて飛び出してきた。芋虫の跳躍力は、ほとんどないので、軽く足をあげれば奴らの顎を飛び越えられる。

俺は、上段から顎に向かって縦に切れくと、地面すれすれに回転して唇を輪切りにした。口を失った芋虫は、夕日を浴びてバタバタと地面から這いずりだしてきた。失った唇を探すように、首を左右に振るので、『剣』を真横にして、頭から尻まで駆け抜けた。パツクリと開いた裂け目は、筋肉と脂肪が交雑する霜降肉だ。

「これはステーキ用かな？」

芋虫は、人型のモンスターと違って敗走することがないので、次々に同じように地面を食い破って、足元に現れた。ただ本能に身を任せた捕食行動は、ワンパターンなので二匹目からは、ほぼ同じような手順で片付けた。

六匹目に現れたのは、グラスワーム・セレクトだった。厳選芋虫は、ほかの芋虫より若干筋肉質で跳躍力もある。油断していた俺は、

脚を厳選芋虫に喰い付かれた。俺は、ミークの数少ないスキル『逃げ足』を発動すると、喰い付かれた脚を空中でジタバタさせた。

「逃げ足つてツ、意外と使えるスキルなんだよねッ！」

「い、痛いじゃんッ」

地面に放り出された俺は、身体半身ほど地面に出していた厳選芋虫の胴体を真一文字に切裂き、断面から肉片を少しだけ切先に乗せると、空に放り上げて口に入れた。

厳選芋虫は、生食するとハムの味がして美味しい。村でメロンを手に入れたら、上に乗せてフェルミに食べさせてあげよう。彼女は、そういうお金持ちっぽい食べ方が好きだ。

どうやら厳選芋虫で打ち止めのようだ、芋虫王国の王様グラスワーム・キングは、お留守だったみたいだ。キングは、脂肪の塊で切るときの手応えも悪いし、美味しくないからお留守でちょうど良かった。

俺は、野営地に帰ると料理の支度をしたが、フェルミとミリアムが「今夜は、私たちが夕食作る」と言い出したので、食材の準備とレシピを書いた紙を渡した。彼女たちは、食事の準備に夢中になっており、俺が散歩に行くと言っても気にしていなかった。

村までは、早足で三十分程度で到着したものの、教会もなければ、商店も見当たらない。石造りの立派な建物は、小さな村に不釣り合いなほど大きく、その建物を取り囲むように小さな小屋が点在している。

「村と言うよりホテルだな」

建物の一階は、三階までの吹き抜けにシャンデリアが吊るされていた。やはりホテル、しかも高級ホテルのようで、カウンターの向こう側に、タキシードを着たフロントマンが立っていた。

「すみません、ちょっと相談があるのですが……」

「何でございましょう」

「この宿では、土産物を買っていませんか？」

「土産物ですが……当宿では、お客様に『素敵な思い出』を持ち帰って頂いておりますゆえ……何かお探しですか？」

「お恥ずかしい話ですが、彼女へのクリスマスプレゼントを買い忘れてまして」

「なるほど……では、女性が泣いて喜ぶグッズを、少しお分けいたしましょう」

「おおッ！ 有難うございます」

俺は、フロントマンにホテルの倉庫まで連れていかれた。倉庫には、彩鮮やかなドレスや宝飾品、金色の椅子、ビニールマット(?) など置いてあった。

「こんなに雑に、宝石を保管しても大丈夫なの？」

「これら宝飾品は、イミテーションでございます……こちらの黄金イスは、男女ともに愉しめるグッズでございます」

「うーん、なんで真ん中が凹んでいるのだ？」

「ここから手を……では、こちらのマットプレイ用のマットなど、ローションを使いますと……」

フロントマンは、倉庫のグッズを丁寧に説明してくれたが、今一つ理解が出来なかった俺は、実際に試してみたいと言った。彼は「

それは結構なことでございます」と、カウンターに戻ると、年頃の女性が写っている写真を並べた。

「もしかすると、このホテルは・・・アレを売る館かな？」

「おやおや冒険者様は、お気付きじゃなかったのですか？」

俺は、首を高速で縦に振ると、慌ててホテルを飛び出した。政府公認である冒険者は、娼婦館を取締る役目もあった。だが、それは表向きの話し。

ピンク酒場のような冒険者専用の風俗店は、契約者以外が立ち寄ることが出来ない。つまり旅人や職人系の刻印を持つ男性には、必然と娼婦館のようなサービスを提供する店が必要になる。それに娼婦館は、刻印を失った独り身の女性たちの生活を、支えている側面もあり、政府や冒険者も見て見ぬふり、必要悪として厳しい取り締まりをしていない。

とくに行路沿いに派手に営業している娼婦館には、裏で政府高官筋の繋がりもあり、下手に関われば、こちらの身が危険に曝される。

「俺は・・・とくに俺は、この手の店に近付いちゃなんねえ」

俺は、逃げ出したホテルの窓から、銀髪に碧眼の少女が覗いていたことに気が付いた。

色白で小さな少女は、開いた窓から吹き込む風に髪が揺れていた。娼婦にしては、あまりに幼く見える。

「シャーロット？」

俺は、なぜシャーロットの面影を少女に見たのか？

俺は、逃げるように日が落ちた暗い野原を走った。

俺は、なんとなく想像できる先の展開に恐怖した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9141x/>

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

2011年12月1日00時55分発行